Movic Game Collection 7

Novel 館山　緑

MOON.



Ikumi Amasawa sat quietly, waiting to arrive
at her destination. She got a headache just thinking of how long
she had been sitting in this truck,
on a seat which could by no means be said to be comfortable.
She ha d been ordered to get on the truck,
along with other people who had gathered at the seminar

Movic Game Collection 7

MOON.



Ikumi Amasawa sat quietly, waiting to arrive at her destination. She got a headache just thinking of how long she had been sitting in this truck, on a seat which could by no means be said to be comfortable. She ha d been ordered to get on the truck, along with other people who had gathered at the seminar

ムービックゲームコレクション 7

小説 MOON.

原作◆タクティクス
文　◆館山　緑



MGC

カバーイラスト　タクティクス
本文イラスト　　速瀬羽柴

第零章

何時間座っていたかを考えると頭痛がするほど長く、お世辞にも乗り心地のいいとは言えないトラックにしつらえられた座席で、天沢郁未（あまさわいくみ）は目的地に辿り着くのを黙って待っていた。

中野駅から少し歩いたところにあるＦＡＲＧＯ宗団のセミナー会場で、他に集まった人達と一緒にトラックに乗るように指示を受け、そのまま揺られること数時間。

最初は時計を見ていたが、かえって苛立つので、時計を見るのはやめてしまった。

秘密の場所に建っているという、ＦＡＲＧＯの隔離施設へ、このトラックは向かっていた。郁未を合わせて二一人の、上は五〇歳くらい、下は中学生くらいの少女までの信者が、ＦＡＲＧＯに着くのを待っている。

トラックには窓がなく、どんな場所を走っているのか解らない。

ただ、今は山道を走っているらしいというのは、道の勾配がきつく、時折何か石のようなものをタイヤが踏んでゆくのか、がたん、と大きく揺れるところから察せられた。

トラックの中は、冷房がよく効いていて、初夏であるのに半ば小寒かった。

（お母さんも、こうやって揺られていたのかな）

かつて郁未の母、天沢未夜子（みよこ）もまた、小学生だった郁未を置いて、このＦＡＲＧＯの隔

離施設へやって来たはずだ。そうして六年間、戻ってこなかった。
戻ってきたのは大体三週間前になるだろうか。
母が郁未と一緒に暮らせたのは、たった一〇日ほどだった。
数年間、一度たりとなかった安らかな日々の終焉は、思いがけない形でやってきた。
外から帰ってきた郁未が母を見つけた時、既に母は事切れていた。しかし、その死に様は尋常ではなかった。体中の穴から血を吹き出し、壁にもたれたままの姿で、母の死骸は郁未を迎えたのだ。
警察では、天沢未夜子の死因を摑むことはできなかった。
しかし郁未はＦＡＲＧＯのせいだ、と確信していた。
それには理由があった。母の入っていた宗教団体ＦＡＲＧＯ宗団は、あるものを教義の中心に挙げていたのだ。
不可視の力。
何でもできる万能の力をＦＡＲＧＯはそう呼んでいた。テレビでもＦＡＲＧＯの信者がその力を発動させる実演をしていた番組が放映されたこともある。手も触れないで煉瓦を砕く、というものだった。
超能力や気功などの実演では、ある程度効果を控えめに番組制作されているものだが、

ＦＡＲＧＯの番組はそうではなかった。ほとんど爆薬を使っていると言わんばかりの派手なデモンストレーションに、大多数の視聴者達は手品もどきと判断して終わりだった。

しかしごくわずかの、本物だと信じた人間達はＦＡＲＧＯの扉を叩いた。

信者として潜り込む為に受けたＦＡＲＧＯのセミナーでも、不可視の力を発動させる場面をビデオで見せていた。

ただのこけおどしと切り捨ててしまえない不気味さが、ＦＡＲＧＯにはあった。

母の死因を探る為に、いろいろＦＡＲＧＯを調べていたが、案外情報が手に入らないのだ。オープンに不可視の力についてのテレビを放映する外面に似合わず、ＦＡＲＧＯはひどく閉鎖的な団体だったのだ。

結局自分で潜入するしかない。そう結論付けた郁未は高校を休学してＦＡＲＧＯへ潜り込むことにしたのだった。

「他の奴らとは違うわね、あなた。眼を見れば、すぐに解るわ」

すぐ側から話しかけられる。

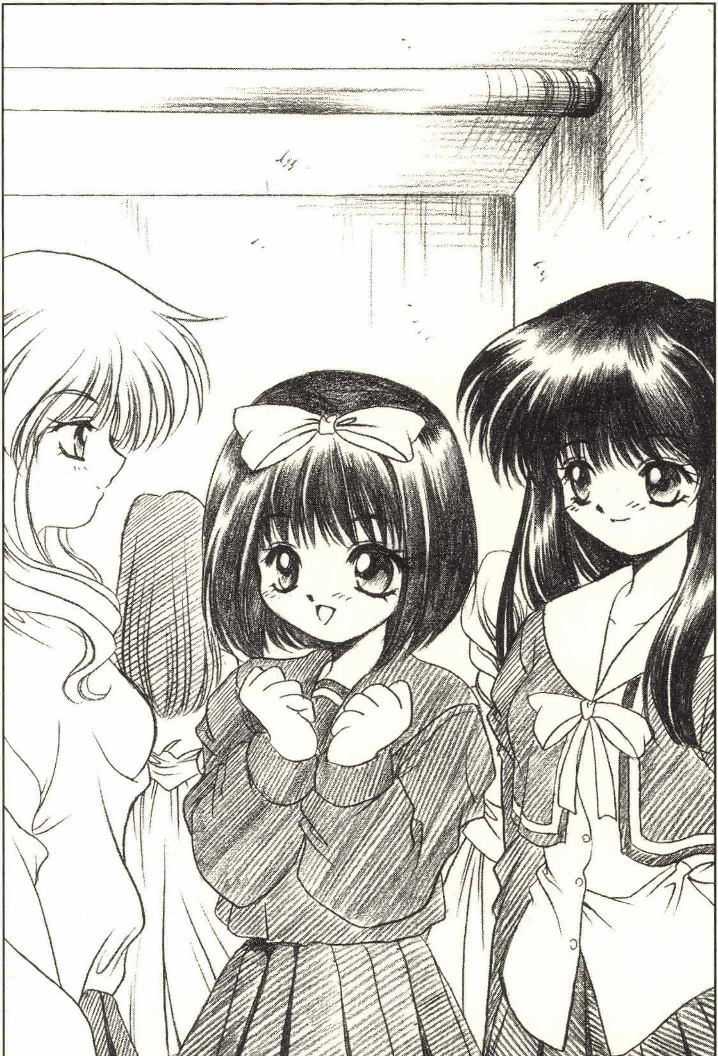
郁未と同じ年頃の、ふわふわした髪が長毛種の猫を思い起こさせる少女だった。気の強そうな眼が印象的だった。

「どんな眼をしてるっていうの？」

「意志を持った眼。ＦＡＲＧＯに入信しようなんて奴に、そんな眼をした奴いるはずないもの。見なさいよ、あの死人のような眼」
ひどく嫌そうに少女は顎をしゃくってみせた。
「あなたは？」
「巳間晴香。あなたの同士ということになるかしら」
つまりこの晴香という少女もまた、ＦＡＲＧＯの純粋な信者ではないということだ。
「時々混ざっているのよね、私達みたいなのが。帰らない家族を連れ戻しに、とかね」
「私は母が殺されたの」
「かわいそうにね……で、何をしに来たの」
「母の仇を討ちに」
「見た目によらず怖いことを思い付くのね」
「本当はよく解らない。悲しみを吹っ切る為に何かしたいだけかもしれないし」
郁未が眼を伏せた。
「でも、よく私がそういうことを考えてると解ったわね」
「解りやすいもの……」
晴香の言葉を遮るように、突然電子音が鳴り出した。郁未はびくっと震えた。しかし向

かい側の隅にいる中学生くらいの女の子が、ポケットから携帯電話を取り出す。
「もしもしっ？　うん、これから乗り込むところっ。大丈夫だって！　解ってる。絶対連れて帰るからっ。じゃあ、もう切るねっ」
晴香は頭を抱えた。
「あなた以上に解りやすい奴もいたものね。危なっかしいったらありゃしない」
しかし郁未はその少女が発しているまっとうな世界の雰囲気を好ましく思った。

トラックが停まり、エンジン音が止んだ。
出口が開けられ、外から男の声で降りるように指示が聴こえる。
外の景色からどのあたりにＦＡＲＧＯの隔離施設があるのか見当付けようと思っていた郁未の思惑は外れた。トラックが停まっていたのは、建物の中だったのだ。
隅の方にいくつかの箱が乱雑に置いてある他は、数台のトラックしかない搬入庫に郁未達は降り立った。秘密主義なＦＡＲＧＯに対して疑問を抱いている信者はいないようだった。郁未達と、先程の少女を除いては。
「ここが宇宙基地だろうが、ゾンビが走り回ってようが、こいつらは全然気にしないわよ」
晴香は明らかに蔑むような視線を、ぼうっと立っている信者達に向けた。



向こうで、黒い服を着た男達がこれから適性検査があること、自分が呼ばれるまで待っているように、ということを告げ、とりあえずひとりの女性を連れていった。
あの黒服の男達が何者であるのかはさっぱり解らなかった。これからの鍛練で彼らがどう関わってくるのか不安ではあるが、今考えても仕方がない。
とりあえず郁未達の番はまだまだ先だった。
晴香が周囲をきょろきょろ見回している先程の少女に声をかけた。
「ねえ、あなた。家族を連れ戻しに来たんでしょ」
少女の顔は眼に見えて蒼ざめる。顔が強張ったせいでさらさらのボブカットが揺れた。
「どうしてそのことを……！」
「さっき携帯でべらべら喋ってたじゃない」
「あ、そうでした。で、まさか告げ口するとか？　それだけはやめて下さい。マークされちゃうじゃないですかぁ」
「大丈夫よ、私達も純粋な信者じゃないから」
半泣状態の少女に郁未は助け船を出す。しかし少女の返事は突拍子もなかった。
「じゃあ、家出して寝るところがなくて、適当に来たとか？」
「適当すぎるわっ！　くだらないセミナーなんかに参加してまで、寝る先を確保しような

んて馬鹿いるもんですか」
「私達もＦＡＲＧＯにとって不利益なことを考えている人間、ってことよ」
「敵の懐で活動するんだから、少しでも仲間は多い方がいいと思って誘いに来たんだけど……でもあなた、足手まといになりそうね」
「うわあっ、そんなことないですよお！　あたし、名倉由依っていいます。よろしくお願いしますっ。一生懸命やりますから、見捨てないで下さい」
「私は天沢郁未。よろしくね」
「巳間晴香。晴香、でいいわ」
「郁未さんと晴香さんですね。よろしくお願いします」
感情豊かで明るい雰囲気の由依のおかげで、少し気分がほぐれたようだ。
しかし、ひとつ気になることがある。
「でも、あなたまだ義務教育じゃないの？　学校とかまずくない？」
郁未がそう訊くと、由依はぷくっと頬をふくらませた。
「郁未さん、あたし、これでも高校生ですよ」
「嘘、私も中学生だと思ってた。貧乳だし」
由依は尚更頬をふくらませた。

「違いますよっ。れっきとした高校一年生ですっ。胸のサイズで判断しないで下さい。それじゃあ、郁未さんと晴香さんはおいくつなんですか？」
「私は高校二年生」
「私も」
「おふたりとも一年先輩なんですねえ」
もう機嫌が直ってしまったらしい。気分が変わりやすいタイプなのだろう。
「おふたりはどんな目的でいらしたんですか？　やっぱり家族を連れ戻しに？」
「まあそんなものよ」
晴香は曖昧に答えた。
答えたくないのだろうか、と郁未は思ったが、由依は気付かず郁未の方に向き直る。
「郁未さんは？」
「私は……母が最後にいたところだったから」
「今はお母さん、どこにいらっしゃるんですか？」
「馬鹿、最後っていうのはもういないってことよ」
晴香が小声で耳打ちする。由依は狼狽した表情で郁未に頭を下げた。
「ご、ごめんなさい」

「いいのよ。もう吹っ切ったことだから」
実際にはまだ心の傷は生々しく、痛みは辛かった。しかし、これだけ恐縮している由依に対して傷付いていいます、などという必要はどこにもなかった。
適性検査の順番は遅々として回ってこない。由依などは退屈なのかどこからか携帯ゲームを取り出して遊び始める始末だ。
「そんなことやってる場合かあっ！　いくら暇でもそれはなしっ」
「そんなに怒らなくてもいいのに……」
由依はくるりと晴香に背を向け、いじけたようにゲームを再開した。
郁未は小声で晴香に囁いた。
「これから協力するならあんまり仲違いしても……」
「そりゃあ、そうだけど」
「謝っておいたら？　どうせこの子のことだから、すぐ機嫌を直すわよ」
晴香は由依の側に近付き、咳払いした。
「由依……悪かったわよ。ごめん」
返事がなかった。よほど傷付いているのかと晴香も心配になる。
しかし、携帯ゲームからぶーっぶーっと音が響く。ゲームオーバーになったらしい。

「晴香さんもやりますっ？　これ、すごく面白いんですよ。ほら、持って持って。それでね、ここがゲームスタート！」
「うわ、いきなりこれ？」
いきなりゲームを渡され、晴香は眼を回した。
「あはは、そこっ。晴香さんヘタですねぇ。それあげますから特訓して下さいよ。それのアーケード版がゲーセンにありますから、いつか対戦しましょうねっ」
由依の機嫌は安易に直ってしまったのだった。
ふと、郁未はあることに気が付いた。
「そう言えば信者のひと、女の人ばかりだったけど、どうしてなんだろう」
「確か最初から女性限定だったはずですよ。確かセミナーでそう言ってました」
一番真面目にセミナーを受けていたらしい由依が口を開く。
晴香が投げやりに言った。
「ハーレムでも作る気なんじゃないの？　きっと適性検査もそれ用のやらしいやつよ。すけべそうなおっさんが、はい、胸見せてー、とか言って。でもあんた貧乳だから大丈夫よ」
「どんな安心のさせ方なんですかっ」
途中でからかっているのに気付いて由依は晴香を追いかけ回している。

「それだけたくさんの女の人が、みんな不可視の力が欲しくて来るのね。何なんだろう、不可視の力って」

ふたりは足を止めた。

「そんなの、信者獲得の為の餌に決まってるじゃない」

「インチキだってことですか？」

「当然。あんた、まさか信じてたの？」

「えっ、ほんの少しだけですよおっ」

狼狽の加減からいくと、結構本気で信じていたらしい。

「あんなものいかさまに決まってるじゃない。ねえ、郁未？」

「本物だと思っておいた方がいいかもしれない」

「あんたまで信じてたの？」

郁未は首を振った。

「そういうのじゃなくて、FARGOは不可視の力を中心に作られているんだから、実際はどうあれ、あるものと想定して動いた方がいい時もあるんじゃないか、ってことよ」

晴香はうなずいた。

「なるほどね、そういう意味か。まあ、どのみちあんた達が信じていようがあの力が目的

で来ているんじゃないものね。あの力を手に入れて優越感に浸りたいだけの、そんなことに頼らなきゃ生きていけないような奴らとは違うものね」
忌々しげに、おとなしく適性検査の順番を待つ信者の列を睨む。
由依は力強くうなずいた。
「そうですよ！　あたし達には目的があるじゃないですか。あたしは姉を連れ戻しに、郁未さんはお母さんの死因を探りに、晴香さんは生き別れの息子さんを探しに！」
「こらっ、誰も生き別れの息子なんか捜してない。勝手に人を苦境の母にしないでよっ」
「あはは、つい癖で適当なこと言っちゃいました……」
郁未は向こうからＦＡＲＧＯの男達が近付いてくるのを見た。
どうやら郁未の番らしい。後ろ手にふたりに手を振ってみせると、男に指示されて郁未は後をついていった。
必要以上に曲がりくねった廊下を歩き、ひとつの無機質な黒い扉の前に辿り着いた。
「入れ」
しかし、その扉にはノブも何もなく、どう開けるのか解らない。男に訊こうとした時、自動ドアのように勝手に開いたのだった。
郁未がひとりで中に入ると同時にドアは閉まった。

小さなビルのエレベータのようだ、と郁未は思った。四方に手が届く範囲にある壁で仕切られた空間。この閉鎖空間からどこへ行けと言うのだろうか。

しかし、郁未はどこへ行く必要もなかった。

それは、そこにいたのだ。

『……眼を閉じて』

低く、包み込むようなやわらかさを持った声が、狭い部屋にくぐもって響く。どの場所から聴こえるという訳でもない。ただ、姿ないままそこにいる、という感じだった。

『……眼を閉じて』

繰り返されたが郁未は眼を閉じず、様子を窺っていた。

しかし、何も起こりはしない。閉じられた扉も開かないので、外へ出る訳にもいかない。

仕方なく瞼を閉じた。

『そのまま、落ちてゆけばいい……』

(どこへ?)

『心の中へ』

それは、確かに落下感覚だった。

その奥に郁未が見たものは、血まみれの母の姿だった。

郁未は大きく息をついていた。
（夢を見ていたの？　お母さん、何を訴えようとしてたんだろう）
気が付くと、左手の甲が痛かった。焼けた針金を押し付けられたような痕があった。焦げた皮膚の臭いが鼻をつく。それはよく見ると文字だった。
Ａ－12、そう書かれていた。
『Ｃｌａｓｓ Ａに配属されたことに祝福を』
郁未はその言葉に答えず、冷たい眼で壁を睨んだ。
「……何者なの、あなた」
『君の探求すべき真理は別の方向にある』
「人の手にこんなものを焼き付けといて、自分の正体も明かせないというの？」
『君はもっと賢い子のはずだよ』
「何を指してあなたは賢いって言うの？　そんな喩えばかりじゃなくて直接言えばいい」
その声は郁未の問いに答える気はなさそうだった。自問自答するように呟いている。
『しかし、ある意味で賢いとも言えるな。こので場そんなことを訊いた者はいなかった』
「私はあなたが何者なのか訊いてるのよ」

『答えを必要とするのなら、捜し求めればよい。私は告げる気はない。だとすれば別の方法で模索するしかない』
「解った。諦める。必要な答えは自分で探すわ」
もう答えはなかった。
その代わりに扉が開いた。

再び搬入庫まで連れられて戻ってくる。しばらくすると晴香や由依も戻ってきた。
「どうでした？」
「何だかよく解らなかったけど、でも」
郁未は左手の甲を差し出した。
二人も同じように左手の甲を見せてくれる。晴香の手には『C－219』と、由依の手には『B－73』と焼き付けられていた。
「適性によってランク付けされたみたいね。どうやら居住区も分けられるみたいよ」
「離れちゃうね、ここで」
「いつでも逢えますよ」
秘密主義なＦＡＲＧＯが、別の居住区の人間と簡単にコンタクトを取らせてくれるかど

うかは怪しかった。
「とにかく、別れた後に何とか連絡を取り合うのよ。そこでそれからの集合場所を決めましょう。いい？」
そこまで打ち合わせた時、ＦＡＲＧＯの男が郁未を迎えに来た。
二人と別れ、別棟に連れて行かれる。無人の廊下を歩き、ひとつのドアの前に案内され、入るように促される。
郁未はドアを開けた。
簡素で、ベッド以外に何もない部屋だ。向こうに見えるすりガラスの引き戸は、多分ユニットバスだろう。
しかし、郁未の視線はそこにいるはずのないものの上で止まった。
少年だった。郁未と同じくらいか、それよりも年下であるらしい少年がベッドの上に座っていた。独特の、金色にも見える不思議な眼で、顔は整っていると言えるだろう。
郁未は困惑した。
「ここ、私の部屋らしいんだけど」
「そうだね、そう聞いてる」
「じゃあ、話は早いわ。私ね、疲れてるの」

「じゃあ、眠ればいいよ」

しかし、少年が出て行く様子は全然なかった。どうやら郁未が寝るのを待っているらしい。不思議そうに郁未を見やった。

「どうしたの？」

そこで、郁未は思わず怒鳴りつけていた。

「出て行きなさいよっ！」

「出て行くの？　僕が？」

「そうよっ」

「で、いつ入ってきていいの？」

郁未はがっくりとうなだれた。

「どうして入ってくるのよっ！　ここは私の部屋なんでしょっ？」

「僕の部屋でもあるんだけど」

少年の言ったことを頭が認めるまでに数秒かかった。

「……嘘でしょ」

「何か、凄くショックを受けてるように見えるんだけど。環境が変われば精神が乱れるけど、一時のことだよ。すぐ馴れる。すぐ落ち着くよ」

「私は永遠に落ち着かない自信があるんだけど」
「まあ、シャワーでも浴びてきなよ。ちゃんとあるんだし」
「なかったら困るわよっ」
少年は郁未の意に介さず、にっこりと笑った。
「絶対に覗かないでよっ⁉　覗いたら、その時点で外に寝かせてやるんだから」
郁未が着替えを持ってシャワー室に入っていくと、少年は呟いた。
「何だか今度は大変な同居人だなあ」

（まさか男の子と相部屋になるなんて……）
疲れた筋肉にシャワーを当てながら、郁未は考えた。
決して悪い人間には見えなかったが、あの少年も所詮はＦＡＲＧＯの人間だ。決して信用できはしない。あの、どこかずれたような言動も油断させる為の手段かもしれないのだ。
あの少年のことだけでなく、訳の解らない訓練、晴香や由依と連絡を取り合う手段を探すことといい、どれも一筋縄ではいかないだろう。
どのみち、明日からは大変な毎日になりそうだ。
郁未は溜息をついた。

第一章

暖かいシーツにくるまれて眠っている郁未の耳に、いきなり大きな声が響いた。
「おーいっ。起きろ、朝だぞっ」
朝起きる時はいつも、ひとりだ。母が死んでしまってから、誰かに起こされるなどということはなくなっているはずだ。何故人に起こされているのだろう。
いぶかしく思いながらもうっすらと瞼を開けた。
「起きた？」
そんな郁未の思惑も知らず、少年は腹が立つほど無邪気に笑っている。
「何であんたがここにいるのよっ！」
郁未は大声で叫んだ。
「またおかしなことを言うなあ。同居人だからだよ。忘れたのかい？」
やっと昨日のことを思い出した。ＦＡＲＧＯの隔離施設へやってきたこと。晴香と由依。Ｃｌａｓｓ Ａに配属され、少年と同居することになった自分。
「思い出した……」
郁未は頭を抱えた。
「朝は弱いの？」
「弱くはないけど」

「じゃあ頑張ってさっさと行きなよ」
郁未はきょとんとした表情で少年を見た。
「行くって、どこへ？」
「ＭＩＮＭＥＳ」
「ミンメス？」
「そう札書きされた部屋があるから」
そこまで聞いてから、郁未は慌てて着替えて部屋を出た。

しばらく廊下を探していると、少年に言われたように『ＭＩＮＭＥＳ』という札の出た扉があった。多分ここは修行の場所なのだろう。
何をさせられるのか見当もつかないが、ここで立っていても仕方がない。
郁未は扉を開けた。
真っ暗な部屋の中は、床に埋め込まれている照明のせいでぼんやりと薄明るくなっている。床に埋め込まれた計器が光を放っているらしい。
「Ａ－12だな」
壁から声が聴こえた。昨日の『声』とは違い、ただ単にスピーカーから聴こえているよ

うだ。手の甲にある識別番号を確認する。A－12。間違いない。
「はい」
「では部屋の中央に立って」
自分が何をさせられるのか一切説明もなく命令されるのは、あまりにもぶしつけな行為だと思った郁未は、足を動かさず、代わりに床の模様を指差した。
「待って。何なの、これ」
「MINMESと呼ばれる機械の端末。これを使用しての訓練がこれからの日課になる」
「訓練？」
「神の力を手にする為の訓練だ。精神の鍛練を目指すもので直接精神に負荷をかけ、抵抗力の増強をする。やってみれば解るだろう」
郁未はうなずくと、部屋の中央にある文様の中心に立った。
「それでは、第1段階を始める」
周囲に、案外大きな機械音が鳴り始めた。
そして機械の照明が薄れ、暗くなってゆく。

手を差し伸べられていた。

とても、大きく見えるやさしいひとに手を握られる。
『いくみ。探したのよ、もう……いつもひとりで歩いていっちゃうんだから。迷って泣くのは、いつもあなたでしょ』
迷子になってたんだ。
『もう心配かけないで……。何かあったらお母さんに一言言って、ね？　欲しいものがあるなら、考えてあげるから』
おかあさんには心配をかけたくない。
ごめんなさい。
『いつもいくみには寂しい思いさせてるから、今日は好きなものを買ってあげる』
あのね……あのね、おかあさん。
『なあに？　欲しいもの、あった？』
うん。あのね、おかあさん。
いくみね、いくみ、ナマケモノさんのぬいぐるみがほしい。

気が付くと機械音がする前と同じように、部屋の中央に立って体を硬直させていた。
「以上で、第１段階終了」

スピーカーから声が響く。
「気分はどうだ」
郁未は口をつぐんでいる。
気分はよくなかった。
何故だか解らないが、胸を突くような痛みが郁未をさいなんでいる。
(何か、凄く嫌なことがあった時の痛み……)
ひどく辛いことがあった痛みだけが残っているのに、何があったのか思い出せない。視界が閉ざされている間のことが、すっぽりと記憶からなくなっている。何があったのか解らない、すっかり忘れてしまっているのに、泣きながら目醒めた朝。そんな風だった。
しかし、眠っていない自信はあった。
眼を開けて立っていたのだから。
「混乱しているようだな」
これが、負荷なのか。
やってみれば解る、など大嘘だ。これではどう解れというのか。
「負荷って何なの」
「それは解らない。精神レベルの話だからな。まあ、早く慣れることだ」

その後係員は、今後のスケジュールについて説明した。起床後、午前中はＭＩＮＭＥＳ。その後昼食。午後はＥＬＰＯＤ。夕食。ただそれを繰り返す日々。

「それだけ？」

「Ｃｌａｓｓ Ａは、その後就寝だ」

単調極まりない予定表を頭の中で反芻すると、ＭＩＮＭＥＳから出て行った。

郁未はひどく疲れきっていた。

昼食をとりに食堂に入った郁未は、案外大きな室内を見回し、困惑した。

ここが食堂であること自体は、ほぼ間違いないだろう。無意味に広い室内には多くのテーブルが規則正しく並び、おいしそうな食べ物の匂いが漂っている。

しかし、誰もいなかった。

これだけ広い食堂の中、信者が何人か先に食事をとっていてもよさそうなものだが、誰もいないのだ。念の為テーブルを一通り見ても、誰かが食事をしたばかりという痕跡もなかった。テーブルは清潔で、乾燥している。

テーブルに食事がセッティングしてある訳でもなく、どこから食事を調達したらよいのかさえ見当がつかない。

郁未は溜息をついた。
確かに空腹ではあるが、我慢できない程ではない。他の人間が来るまで待とうかと、手持ち無沙汰にテーブルによりかかった。しかし、誰も現れない。
郁未はさすがにここが食堂であるかどうかが不安になってきた。
「ちょっと、誰かいないの？」
信者でなくてもいい。賄いの係員が出てきてくれるかもしれない。そう思ってやや大きな声を出してみる。反応はなかった。
そう思った時、ドアが開いた。
髪の長い女性が入ってくる。どこか作り物めいた雰囲気のある、郁未よりもやや年上だろうと思われる女性だ。かなり整った容貌に一瞬見とれる。
「あなた、先程の態度はいただけません」
「あ、あの」
「もう少しＣｌａｓｓ Ａの誇りと自覚を持って行動して下さい」
「あの、あれは」
いきなり叱られてしまって面食らった郁未に、その女性は冷たく言い捨てた。
「言い訳は見苦しいだけです」

「違うんです。その、訊きたいことがあって……」
無理やり話をねじ曲げる。このままではいつまでたっても自分のことに耳を貸してもらえなさそうだ。
とりあえず女性は郁未の発言を聞く様子を見せた。
「……あなた、信者の方ですよね」
「まるで自分は信者ではないと言っているようにも聞こえますが？」
「あ、違います！　私、ここに来てから他の信者の方を一度も見かけないので、それで」
「他の信者は別棟にいるのです」
女性はそう言うと、壁の一角に向けて歩いてゆき、そこに取り付けられている小さな扉を横に開く。そこから馴れた手つきで料理が盛られているトレイを取り出した。腕を上げた時に、手の甲が見える。数字までは判別できなかったが、Ａの字を読み取れた。
郁未の方を振り返る。
「あなたの分もあります」
郁未もトレイを取り、彼女が座った場所の向かいに席を決めた。
温かなオムライスにスプーンを入れる。
「さっきの話の続きなんですけど、別棟って他のクラスの人達ですよね。だとするとＣ１

ａｓｓ Ａは私達だけってこと？」
「そうです。Ｃｌａｓｓ Ａは神の使いとしてふさわしい資質に恵まれた者に与えられる名誉です」
「ふさわしい資質って何？」
「資質とはこの世に生まれ落ちた時に神から与えられるもの。その形は千差万別。神ならぬ身に言い表す術はありません。Ｃｌａｓｓ Ａの人間はその名誉を受ける資格がある者だということです」
郁未は頭を振った。ここまでどっぷりと何かを信じ込んでいる人間と語り合ったことがないせいか、あまりの噛み合わなさにどっと疲れがたまる。
「資格、ね。何だかうさん臭いインチキ商売みたい」
思わずこぼれ出た感想に、女性は形よい眉を上げて睨んだ。
「言葉を慎んで下さい」
どんなに気に入らない教義を信じている人間だろうと、信者の中で彼女だけが情報源となりうるのだ。機嫌を損ねてはまずかった。郁未は深く頭を下げた。
「ごめんなさい。もう言いませんから」
「……解りました」

明らかに渋々許してくれたのだろうと解る表情を浮かべている。
郁未以外の、たったＣｌａｓｓ Ａの住人。つまりＡ棟には彼女と郁未以外の人間はいないことになる。だとするとあの少年は何なのか。
郁未はがばっと顔を上げた。
「待って！　私と同じ部屋に寝泊まりしてるのがいるんだけど、あいつは何なの？」
「さあ、存じません。Ｃｌａｓｓ Ａは確かに私とあなたの二人だけです」
どうやらあの少年にも謎があるようだ。しかし、そのことは本人にでも訊けばいい。
「あ、そうだ。名前、聞いてなかったよね」
ごく普通に交わされるはずの質問に、女性は何故か少しの間沈黙した。
「……鹿沼葉子（かぬまようこ）。それが私の名」
「葉子さんね」
「そんな名で呼ぶ必要はありません。識別番号がありますから」
先程見えた手の甲の烙印を確認させる。Ａ－９。
「だから私を俗世間の名で呼ぶことは無意味です」
郁未はその言葉を聞いて辛くなった。
ならば何の為に名前があるのか解らないではないか。他人を記号や数字などで区別する

ような人間関係には到底耐えられない。
「あなたは？」
「天沢郁未よ。よろしく、葉子さん」
とりあえず葉子が名前で呼ぶことをとがめたりせず、郁未を強引に識別番号で呼ぶつもりはないらしいことだけは救いだった。
どこか重い空気の中、郁未はオムライスの残りを口に流し込むようにして食べ、ごちそうさま、と言って席を立った。

午後からはＥＬＰＯＤという訓練のはずだ。
郁未はやはり札が出ている部屋に入った。見た目はＭＩＮＭＥＳと全く変わらない。床に計器が埋め込んである、薄暗い部屋だ。
しかし、肝心の訓練は今日はなかった。初日からＭＩＮＭＥＳと併用すると精神にかかる負荷が大きすぎると説明を受けた。明日からは日課となるが、やはり休養日が定期的に組み込まれるらしい。
郁未はとりあえず空いた時間に、別棟へ行けるルートを探して歩いたが、見つかったのはカードキーで開閉するタイプの扉だけで、カードを持たない郁未が利用できないことは

明白だった。午後の収穫はA棟の中を迷わず歩けるようになったことだけである。
夕食の時間になり、郁未は食堂へ向かった。歩き回ったので空腹だ。
食堂に入ると、葉子は既に食事をとっていた。やはり少年の姿はない。郁未は葉子に軽く挨拶すると、やはり葉子の向かいの席にトレイを置いた。
「葉子さん……あの」
「内容のある問いかけを期待します」
あまり表情の起伏がない眼を郁未に向ける。
何かを聞きたくて話しかけてきているのは見透かされているらしい。
「やっぱり、どう考えても私がＣｌａｓｓ Ａに配属された理由が解らないんだけど。その資質があるなんて思えないし。何かの手違いじゃないの？」
「資質とは神の意志がお決めになったことです」
葉子はきつく睨むと、山菜の炒め物に黙って口をつけた。
神の意志に文句をつけた形になったのがよくなかったらしい。
「……冗談です。ごめんなさい」
葉子は溜息をついた。
「あなたが神の使いとしてふさわしい心を持った時、答えはおのずと見えてきます。精進

することです」
とりあえず宗教問答は脇に置いて、郁未は話を変えた。
「葉子さん、ここに来て長いの？」
「そうですね。短くはないです」
曖昧に笑んでみせる。
「家族は？」
「私は神に仕える者です。それ以上でも、それ以下でもありません」
家族など何の価値もない、という言葉が透けて見える。
「それなら……」
「どうして、そんな無意味な質問を繰り返すのですか？」
相手のことが知りたい、という思考法は葉子にはないらしい。そのこと自体に戸惑いながらも郁未は口を開いた。
「ただ単に、葉子さんに興味があるからだけど」
「私に、興味？」
葉子は考えてもみなかったことを言われたらしく、とても驚いている。
「同じクラスになったんだし、いろいろ知りたいなあって」

何となく気まずい沈黙の中で食事を終えると、郁未は食堂を出た。
葉子は話を遮った。
「必要ないことです」

「おかえり。どうだった?」
部屋へ戻ると少年が迎えてくれた。
「よく解らなかった。変な機械に押し込められっぱなしなんだもん」
「そういうところなんだよ、ここは」
「あの機械が何だか知ってるの?」
「僕は入ったことがないから」
訓練もしていないし、葉子も存在を知らない。彼は何の為にここにいるのだろう。昼間にも気になっていたのだ。
「あなた、一体何者なのよ?」
「どうしたの、唐突に」
かえって小憎らしくなるほど無邪気な表情で訊き返す。
「だって食事の時にもいなかったし、このＣｌａｓｓ Ａには二人しかいないって、葉子

さんが言ってたし。あなた、何者なの？」
「端的に言うのは難しいよ」
「端的でなくてもいいわよ。答えて」
少し困ったように、少年は口を開く。
「つまり、君達の側にいる人間じゃない」
それは、ＦＡＲＧＯ側の人間だ、ということだろう。
「監視役、ってこと？」
「そんなもんだね」
あっさりと返事をされ、郁未はがっくりと肩を落とした。
「何だかまたショックを受けてるように思えるんだけど」
少年がにっこりと笑いかけるが、笑い返す気など起こるはずもない。
この少年がＦＡＲＧＯ側の人間だとすると、何も突っ込んだことは聞けないだけでなく、下手なことを漏らそうものなら、自分の首を絞めてしまうことになる。
しかし、まだ望みはある。彼はどう考えてもそんなに頭がよさそうには思えない。うまく立ち回ればある程度の情報は聞き出すことはできるだろう。
郁未はやや下手に出る。

「一緒に来た友達がいるんだけど、別クラスになっちゃったの。どうにか逢えないかなあ」
少年は心配そうに郁未を見る。その表情が妙に子供っぽい。
「僕から聞いたって言わない？」
「うん」
「この先の部屋に地下通路への入口があるよ。だけど絶対誰にも言わないでよ」
「ありがとう！　じゃあ行ってくる」
「巡回員に見つからないように行くんだよ」
郁未は足早に部屋を出ていった。

いくつかある個室を片っ端から探してゆく。開かない扉がひとつあったが、目的の地下通路への入口は奥の方にある部屋の、ベッドの下にあった。目立たない色に塗られた鉄板に、取っ手が付いている。上へ持ち上げてみると、下へ続く梯子が見えた。
用心深く確認して、郁未は降りていった。
(それにしても、アホだわ、あいつ……)
自分のことを監視役と言ったすぐ後に、隠し通路の場所を教えるというのも間抜けな話ではないか。何か企んでいるのではないかと構えたが、それにしては妙にとろくさい。

郁末は人の好さそうな少年の顔が浮かぶのを振り払うように、大きく首を振った。
地下通路はだいたい十字路のような形になっている。A棟からの突き当たりにはマンホールがあるだけだが、左右にはそれぞれ、上へ向かう梯子がかかっていた。
右側の梯子を登ってみる。物置のような場所に出た。ドアの前で向こう側に人の気配がないのを確かめて外に出る。
ゆっくりと、誰かに見つからないように歩く。角を曲がったところで人影が見えた。
晴香だ。ぼんやりと立って何かを考えているらしい。
「晴香……」
声をかけてもこちらを見ない。げっそりと疲れて、辛そうな顔をしている。
郁末の声に反応して、やっと晴香が向き直った。
「聞いてるわよ」
「どうしたの、疲れてる？」
晴香の顔がまるで黄ばんだ壁のように思える。一体何があったのか。
「あなたも、そのうち解るわ。でも、ひとつだけ言えるのはね、ここの連中は人間の心なんか持っちゃいないってこと。それだけ」

二人は黙って地下通路へ移動する。晴香に何か言おうとしたが、郁未は口を閉ざす。酷いことがあったのだ。とても辛く、口に出せないようなことが。郁未は晴香の気持ちを考えると深く追及できなかった。

話はおのずと同じ部屋で暮らすことになった少年のことになる。

「でも、気をつけるのよ。その子もＦＡＲＧＯの一員には変わりないんだから」

「解ってる。で、これから由依に逢いに行こうかと思ってるんだけど」

「明日にした方がいいわ。長い間部屋を留守にすると怪しまれるわよ」

「でも、この通路のことを由依にも知らせたいし」

「焦って行動してもいい結果は出ないわ。失敗はできないのよ。慎重にいかなくちゃ」

郁未はうなずいた。そこで晴香と別れ、自分の部屋に戻った。

●●●

Ｃ棟。晴香が自分の寝る共同部屋へ入った数分後。

廊下を女性がひとり歩いていた。髪の長い、本来ならば優しい感じの美人であろうと予想される顔が、苦悶に歪んでいる。

突然全身を支配していた激痛が、いきなり消えた。
そして、ついさっきまでいた共同部屋から廊下に出ているのに気が付いた。
（まただわ……）
ここまで移動した記憶はない。しかし、こんなことになったのは初めてではなかった。数日前から起こっている発作だ。痛みと移動。その間の記憶がとぎれていることも、彼女には気にならなかった。
そんなものはどうでもいい。少なくとも、今の彼女はそう思っていた。
まだ、彼女は自分の時がいきなり回り始めることを予測してはいない。いつものように何事もなく共同部屋に戻って眠るだけだ。
早く眠ってしまいたかった。何も考えないまま。

●　●　●

『Aと他のクラスじゃ待遇は凄く違うよ。Cなんかシャワーもないし』
眠る前に少年が教えてくれたことと、ひどく辛そうな晴香の顔が思い出されるせいか、郁未はあまり眠れなかった。

「郁未、朝だよ」
昨日と同じように少年が起こしてくれる。郁未は眼をこすりながら上半身を起こした。
そう言えば、少年は郁未の名を呼んでいた。名乗った憶えは全然ないのに、どこで名前を知ったのだろう。
「さっき、名前呼んだよね」
「天沢郁未。昭和５４年１月１３日生まれ。山羊座のＯ型。野心家だね」
にこにこ笑いながら郁未のプロフィールをそらんじてみせる。
「どうやって調べたの⁉」
突然、少年の笑みが消える。
「不可視の力。これが君の求める力だよ」
郁未は硬直した。
不可視の力など本気で信じてはいなかった。しかし、その力は他人の素性までも看破できる能力なのか。この少年はそんな常軌を逸する力を操ることができるというのだろうか。
ショックを受けながらも、郁未は考えをまとめようとした。
しかし、一瞬後に床に転がったあるものに気が付く。
中身をいい加減に引っ張り出したのだとすぐ解る、郁未自身の鞄だ。何とか服だのを戻

そうとした形跡があるが、まともにたたむという行為を知らないのか、ぐしゃぐしゃに押し込んだあげく、全部は入りきらなかったらしい。
郁未は叫び声をあげると、少年の頭を殴った。
「どこが不可視よっ！　思いっきり調べた跡が残ってるじゃないっ」
「うわ、ばれたっ」
「こんな風にしといてばれないはずないでしょ！　女性の荷物を勝手に調べるなんて非常識もいいところよっ」
「君のことが知りたかっただけだよ。でも寝てたから……」
こいつにはまともな常識は通用しない。そう自分に言い聞かせて、郁未はそのまま出て行った。その際ドアを思い切り乱暴に閉めてやったのは言うまでもない。去り際にドアを蹴らなかっただけ、穏やかだと言えるだろう。

ＭＩＮＭＥＳでファストフードショップ並みのマニュアルを棒読みしているような、決まりきった確認作業を終え、機械が稼動させられるのを待つ。

せっかくすくった金魚が、落ちた。

おわんに入れるなんてしらなかったから。

花火を見るのに、新しいゆかたをきせてもらって、おとうさんとおかあさんに連れてきてもらった縁日。金魚はおよいでにげた。

『もういっかいだけ！』

『花火、始まっちゃうわよ』

『もういい加減にしないか、郁未』

なきわめいて、おとうさんからはなれて、もう一度だけとせがもうとしたとき、金魚をいれたところに、おしりか落ちた。

けっきょく、花火は見られなかった。

びしょびしょのゆかたが気持ちわるいまま、泣きながらおうちに戻る。

やはり、郁未は何も憶えていなかった。胸が詰まって、息もできないほどに辛いというのに、それが何だか解らない。頭に鈍痛がした。

●●●

同じ頃、ＢＭＩＮＭＥＳの前で由依は震えていた。
（あの光景は一体何だったの……？）
昨日ＢＭＩＮＭＥＳで見たのは、子供の頃に飼っていた犬、ちょこが死んだ時の記憶だった。忘れかけていたはずの、悲しい記憶。
しかし、今日のは昨日と勝手が違っていた。

階段を複数の人間が駆け上がる音。ドアを乱暴に叩き、入ってくるお父さんとお母さん。
あたしは、左手に何かをきつく握り締めている。
止まらない血が、床を赤く染めていた。
『由依っ、何をしてるの！』
『急いで救急車を呼べっ』
お父さんがきつく腕を掴む。身動きもできないように。
『おまえ、どうしてこんなことを！』
お父さんは泣いていた。
あたし、いけないことをしたの？　でも、これが辛い現実から逃れられるたったひとつの方法なんだよ。

だから。

あんなことはなかったはずだ。そんな記憶はどこにもなかった。

ひどく、胸が苦しかった。

由依は自分の部屋へ駆け戻ってベッドに突っ伏した。

●
●
●

A棟。食堂で郁未と葉子はいつもの通り向かい合って昼食をとっていた。

しかし、葉子は口もきいてくれない。

狂信的にさえ見えるほど敬謙な信者である葉子に、『FARGOってどういうところ?』と訊いたら、身を捧げる宗団について下らない疑問を並べ立てる郁未に愛想がつきたのか、極力話しかけるなと通告した後は、ただ黙って食事に専念しているのだ。

(やっぱり、まずかったかなあ)

口をきかないだけでなく、眼も合わせない。これ以上険悪にならないように、今はFARGOの話はやめて、当たり障りのない話をしようと声をかける。

「葉子さん」
郁未の存在を無視している。それでもめげずに再度話しかける。
「葉子さん……ねえ、よーこさん」
「何ですか」
険を帯びた声で返事をする。下手なことを言えば逆上されるかもしれない。郁未は反射的に葉子のフォークに刺さっている海老のタルタルソースがけを見た。食べ物の話なら、それほど立腹されることもないだろう。
「葉子さん、海老好き？」
葉子はどっと疲れたような気配を漂わせた。
「答えなければいけませんか」
「できれば」
溜息混じりで返事をよこす。
「大好きです。これで満足ですか」
これ以上はとても話題が続かない。郁未は自分の海老フライの残りを口に放り込み、トレイを戻しに行った。

ＥＬＰＯＤの訓練もまた、ＭＩＮＭＥＳと同じ類のものだった。胸が痛いのに、何も憶えていない。こんな訓練ばかりでは、順調なのかどうかさえ解りはしない。

おなかをこわしてた。部活のランニング中。どうしても我慢ができなかった。
目立たない草叢に隠れて、排泄した。
恥ずかしかった。吐きそうな臭いの汚物が脚の間にたまってゆく。聴くのもぞっとする排泄音をたてて。
消えない。恥ずかしい過去の自分。
『いやあああっ。見せないで！　消してえっ！』
もうひとりの私が、冷たく私を見据えて告げる。
『あなたが痛みを思い出さない限り、痛みだけを押しつけられた私達は、永遠に救われないのよ。忘れてしまった過去に、あなたは復讐されるの』

夕食の時間になって、郁未は食堂へ向かった。
やはり葉子は先に来ていて、スパゲッティミートソースを何故か箸で食べている。郁未も自分のスパゲッティに手をつけた。

いくつか質問してみたが、どうもＦＡＲＧＯに関することになると、はぐらかされたりするようだ。仕方なく郁未は別のことを訊くことにした。
「葉子さん、あの機械に入ってない時、何してるの？」
「瞑想です」
即座に返事がきた。
「それって何もしてないってことでしょ？」
「心の鍛練の為にする修行と、何もしていないことと一緒にしないで下さい」
「退屈じゃないの？」
「瞑想の途中に退屈だと感じるようでは、それは修行に集中していない証拠です」
心の鍛練なるものを行うことに意味があるのか、郁未には判別がつきがたい。しかし、葉子が何の疑問もなくその鍛練を続ける様は、何故か痛ましかった。
「葉子さんって、趣味とかないの？」
「必要ありません」
郁未は、晴香からもらった由依の携帯ゲームを葉子に差し出した。
「これ、見たことある？　携帯型のゲームなんだけど」
由依がしていたように強引にゲームを渡し、ボタンを押させる。葉子が電子音に驚いて

いる間に、ゲームオーバーになったようだ。
「これ、葉子さんにあげる。息抜きになると思うし」
「こんなものは、下らない俗世間の遊びです」
「そうかもしれないけど、無下に扱う必要もないいんじゃない？　とにかく、これは葉子さんにあげる。いらなかったら捨ててもいいから」
無理やりゲームを握らせ、郁未は食堂を出た。

夜になった。郁未は地下通路で晴香と待ち合わせ、B棟に向かう。
しかし、巡回員に見つからないように探してみたものの、由依はいない。電気の消えているMINMES、ELPODを探した後、晴香がひとつの部屋の前に立った。
ほとんどA棟と同じ構造になっているB棟に、たったひとつA棟にない部屋があったのだ。他のドアよりひどく頑丈に作られている鉛色のドア。その向こうからかすかな電子音がした。携帯電話の呼び出し音だ。
こんな場所に携帯電話を持ってきている人間など、そうはいまい。中に由依がいる可能性が高かった。晴香はドアノブに触らず、忌々しげに睨んでいる。
「この部屋、一体何なの」

「ＦＡＲＧＯの連中が『精練の間』と呼んでいる部屋よ。精神鍛練する為の部屋、って言ってけど、もちろんそんなものでまかせ。あいつらが自分達の行動を正当化したくて、言っているだけ」
「晴香、この部屋に入ったことあるの？」
「ええ……」
精練の間、とやらで何があったのかとても訊けはしなかった。
晴香はこみ上げる怒りを押さえ、溜息をついた。
「由依には酷だけど、しばらく待ってましょう。中にＦＡＲＧＯの男達もいるのよ」
郁未と晴香はそこから少し離れた、目立たない場所に隠れた。

しばらくして、ドアが開いた。何かが壊れたような音がした後、男が二人出てきた。男達が去っても、由依の出てくる様子がない。郁未達は素早く部屋に入りこんだ。
そこに、由依はいた。
全裸で、体にねばっこく白いものをまとわりつかせ、力なく座り込んでいた。窓のない部屋に漂う、生臭い刺激臭と由依の姿を見れば、何が起こっていたのかは一目瞭然だ。
晴香が、近くに散らばっている衣服を拾い集め、由依に差し出してやる。

「由依、しっかりしなさい。辛いのはあなただけじゃないんだから」
その言葉を聞いて、郁未は初めて晴香も同じように、ＦＡＲＧＯの男達に凌辱されたのだと解った。知らなかったこととは言え、己の思慮のなさが悔やまれる。
郁未は茫然と座る由依に、服を着せてやった。
「今は何も考えなくてもいいから、部屋に戻りましょう」
「……はい」
部屋に戻る途中、由依はわずかに口を開いた。
「……前にも、こんなことが」
「どういうこと？」
由依は首を振った。
「解らない。思い出せません」
由依の部屋に送って行き、姉の名前が名倉友里(ゆり)ということ、ＣｌａｓｓＢにはいなかったことを聞く。ＣｌａｓｓＡには葉子と郁未だけしかいないのだから、おのずと友里はＣｌａｓｓＣにいることになる。由依が持ってきた、姉妹で写っている写真を見て、晴香はうなずいた。

「解った。明日中には探しておくわ。郁未は脱出経路を確保しておいて。明日のうちに由依とお姉さんを脱出させましょう」
「由依、明日一日の辛抱だからね」
郁未は力づけるように由依の頭に手を置いた。

「知ってたんでしょ、BやCの待遇」
自分の部屋に戻ってきた郁未は、開口一番少年を詰問した。
「そのことは話したと思ったけど」
「シャワーがないとかは確かに聞いたわよ。でも、私の友達は……凌辱されたのよ。あんなことまでされるなんて普通思わない。あんなの、FARGOの男達が修行の名目で楽しんでいるとしか思えない」
少年は、ひどく冷静な顔になっていた。普段の、やや子供っぽい感じさえする言動とは全く違った。
「不可視の力は、生半可な鍛練じゃ自分のものにならないんだ。過酷な現実に馴れれば、それ以上の過酷も見えてくる。そうすれば自分が現実に味わっている過酷は、ただの普通になる。そういうことだよ」

つまり、あの凌辱はＦＡＲＧＯの男達が楽しむ為のものではなく、信者を苦しめることで、精神の鍛練を促す、と言いたいらしい。メソッドとして理解できなくもないのだが、感情はどうしてもついていかない。

郁未はそれ以上凌辱について追及するのはやめた。

「あなたは、あんな奴らと同じことをしてないわよね」

少年は少しの間沈黙した。

「……してないよ」

何故か郁未は安心した。

少年が黙った意味を考えておくべきだった。そう郁未が思うことになるのは、それから数日後のことだ。

眠り際、郁未は少年に話しかけた。

「友達を逃がしたいの。外へ出られるルートを教えてくれない？」

しばらくして、眠そうな声が返ってくる。寝かかっていたのを起こしてしまったらしい。

「……君はどうするんだい」

「私は逃げない。まだ何もしていないもの」

「じゃあ、ひとつ教えてあげるよ。昨日教えた地下通路にある通気ダクトに潜り込めば、トラックの搬入庫に行ける、はず……」

少年は話しているうちに眠ってしまった。

一分もしないうちに郁未もまた、同じように眠りの中に入って行ったのだった。

第二章

お姉ちゃん……？
『自分がしたこと憶えてないの⁉　あんたのせいで家族がめちゃくちゃになったんじゃない！　忘れたの？』
どうして、そんな嘘をつくの……お姉ちゃん。
お姉ちゃんの言ってること、よく解らないよ。
どうして、あたしのことをそんな眼で見るの？
大好きなのに、お姉ちゃんが一番好きなのに。

●●●

午前中のＭＩＮＭＥＳも結局思い出せないまま訓練を終えた郁未は、昼食の時間を利用して、少年の言っていた通気ダクトを探しに行った。
（あいつは、どういうポジションの人間なんだろう）
ＦＡＲＧＯ側の人間であるというのなら、葉子のように機密に触れたりしかねない発言や、宗団を誹謗中傷したと取られかねない発言は慎むべきではないのか。

確かに、彼の発言には謎が多い。言えないのか、言いたくないのだろうことがかなりあるのは言動を見ていれば察しがつく。しかし、郁未は少年のことを明確にＦＡＲＧＯ側の人間であると思い切れないところがあった。

今日の朝、少年が言った言葉。

『外はいい天気だよ』

こんなでまかせを言ってまで、郁未を元気付けてくれようとする。

施設の中には窓などひとつとしてないのに。

どこか空回りした、子供っぽくも思われる慰め方のせいで、郁未は鬱々とした顔をしているのが馬鹿らしくなり、結果的にいつもの元気が出てくる。

（もしかしたら、いい奴なのかもしれないな……ちょっと馬鹿だけど。それにしても大体の場所くらい教えてくれたっていいのに）

薄暗い地下通路の中を、延々と上を向いたまま目的物を捜しているのも、案外疲れるのだ。結局Ｃ棟へ向かう通路の途中に、通気ダクトはあった。

「うーん」

ダクトの位置はかなり高く、とても郁未の背では届かない。何か足場になるものがあれば、やっと手が届くというところだろう。

（足場になるような物なんて、あったたっけ）
郁未は考え込んだ。大体この施設にはあまり物自体がないのだ。郁未の部屋からしてベッド以外の家具はひとつもない。
（椅子くらいの物があれば大丈夫なんだけどな……あ！）
椅子ならば、食堂に行けばいくらでも転がっているではないか。どうせ利用するのも郁未と葉子だけだし、ひとつくらい持ち出しても座れなくなる信者がいる訳ではない。
食堂に向かって、郁未は小走りに向かって行った。
まだ食事をとっている葉子は、あわただしく闖入してきた郁未がパイプ椅子をおもむろに畳み、抱えて出て行くのを、不思議そうに見ている。郁未は気にせず食堂を出て行き、地下通路の入口まで戻っていった。
鉄板を開いて椅子を落とす。耳障りな金属音が郁未の耳をすり抜けてゆく。
音が聴こえなくなってから、郁未は素早く下に降りて椅子が壊れていないかを確認する。へこんでいるところがいくつかあるが、使うには問題なさそうだ。
郁未は椅子を引きずってダクトの下まで歩いた。椅子をセットし、いきなり解体しないかを確かめてから、椅子の上に立った。
ダクトには、格子がはめてある。ぼろぼろに錆びていて、取り外すのは楽そうだ。

しばらく格子と格闘していると、あっけなく格子が取れた。郁未は格子を床に置いて、何とかダクトに体を上げることに成功した。
(思ったよりダクトの中って広いのね)
最悪の場合、這って進まなければならないと覚悟していたが、膝立ちくらいなら悠々行けそうだ。
郁未はゆっくりと前に進んだ。
すぐ前の方にぼうっと明るい場所がある。どうやら光が漏れているらしい。
(あそこかな)
郁未が光源に近付こうとした時、その光を受けて足元で何かが鈍く輝いているのに気が付いた。いくつもあるようだ。
それは、フォークだった。
どれも先や柄が曲がってぼろぼろになった代物だ。ところどころ錆が浮いている。たまにスプーンも混ざっていたが、ぼろぼろになっているのは同じだった。
よく見ると光の向こうには、壁を崩したような残骸がおおざっぱに集められている。
(このフォークで、誰かが穴を掘ったんだ……)
穴を掘ったまま塞がれていないということは、この穴を掘った人物は無事に逃げおおせ

た可能性が高い。郁未はその穴から頭を出して覗いてみた。
見憶えのあるトラックが数台停まっている。間違いない。ここが搬入庫だ。
それだけ確認して、郁未は自分が来た道を帰って行った。
もうそろそろＥＬＰＯＤの訓練が始まってしまう。

好きな子の机だった。
好きだったけど、好きって言えなかった。ただの片想いだった。
夕陽が、いつもより大きく見えた。彼の机も赤く見えた。
誰もいない教室で彼の机を見ていたら、どうしてもそうせずにはいられなかった。

彼の机にまたがって、腰を動かしていた。
この机の縁が、彼の指だと思って。彼にされているんだと思って。
夢中だった。気持ちよかった。
初めていく、ということを知った。
でも、それだけじゃなかった。

あれを誰かに見られていたんだ。そうとしか思えない。
次の日から、周りの人達の空気が変わってしまった。
私は怖くて……知らない振りをしていた。

やはり訓練の後には何も憶えていなかった。とても嫌なことがあったような痛みだけを残して、何があったのかは決して記憶されない。そんな訓練に郁未は嫌気がさしていた。
今日は昼食をとらなかったので、ひどく空腹だ。郁未は足早に食堂へ入ると、半ば無意識のうちにトレイを出して、いつもの席についた。
ぼうっとしていると、どうしても昨日の由依のことを思い出してしまう。
男達に凌辱され、ぼろぼろになっていた由依。どんな顔をして逢ったらいいのだろうか、全く浮かばない。なるべく傷付けないように、元気付けてあげられればいいのだが、具体的な名案は出てこない。
自分が由依の立場だったとして、どんな言葉をかけてほしいのか……
「……どうかしましたか」
気が付いたら、向かいの席に葉子が座っていた。
「あ、ごめん。ちょっと考え事をしてたの」

「そうですか」
葉子はしばらくして、郁未に訊いてきた。
「昼食の時、どこへ行っていたのです？」
郁未はぎょっとした。そう言えばあの時、葉子が不審そうに見ていた記憶がある。当然訊かれるものだ考えておかなかった自分のミスだ。
「え、えーと……しょ、食欲がなくて、部屋で休んでたの」
取って付けたような言い訳に、自分でも信憑性がなさすぎると呆れたが、葉子は軽くうなずいた。
「解りました。ですが勝手な行動は慎むべきです」
「はい」
郁未はうなずいておくくらいしかできなかった。
二人とも黙って食事をする。郁未は空になったトレイを片付け、ドアに向かった。
「あ、そうだ葉子さん。私があげたゲーム、どうしてる？」
葉子は一瞬沈黙する。
「捨てました」
一応予想はしていたが、もしかしたら遊んでくれているかもしれないと淡い期待が外れ

た郁未は、がっかりしながら足早に食堂を退出したのだった。

「郁未さん、こんばんは」

地下通路で先に待っていた由依は、何事もなかったように笑っていた。それが無理して作っているものだと解るだけに、余計に痛々しい。

しかし一番辛い由依が明るく振る舞っているのに、郁未だけが辛気臭い表情でいる訳にもいかない。郁未も笑ってみせた。

「脱出できるルートを見つけたわよ」

「ほんとですか？」

郁未は由依を通気ダクトの方まで案内してやった。

「こんなところから抜けられるんですねえ。何だか、映画みたい」

「だから晴香がお姉さんを見つけてくれれば全て解決よ」

「そうでもないのよ」

いきなり、反対側から声がかかる。

C棟の方から晴香が来ていたのだ。しかし何故か晴香の表情は硬い。

「どうしたの。お姉さん、見つからなかったの？」

「見つけたわ。でも、帰らないって言ってるのよ」
「でも、可愛い妹が一緒に戻ろうって言えば、考えも変わるんじゃないの？」
「そうは思えないけど」
晴香は、由依の方を向いた。何故か、厳しい表情を作っている。
「あなたの行動は少しおかしいんじゃない？　今日、あなたの姉という人に逢ってきて、そう思ったのよ。私達は狂言につきあって、無駄な時間を使ってる余裕なんかないのよ」
由依がショックで一度激しく震え、すすり泣き始めた。
「晴香、言い過ぎよ」
「そうね……認めるわ。じゃあ、明日のお昼にうちの食堂に来なさい。そこで自分で説得してみればいいわ」
それだけ言うと、晴香はC棟へ戻って行った。
涙をこすっている由依に、郁未はなるべく優しく言った。
「……明日、私もついて行ってあげるから。お昼はこの場所で集まりましょ」
「郁未さん。迷惑ばかりかけて、すみません」
眼に、もう一度涙があふれてくる。その涙は先程のようなショックによるものではなく、明らかに不安と恐怖からくるものだった。

「あたし、怖いんです……本当のことを知るのが」
「由依？」
由依の顔がぼろぼろこぼれる涙をこらえようと、奇妙な表情になった。
「昨日、襲われた時、あたし……前にもこんな体験をしたことがある、って、思ったんです。でも、憶えてないんです。何も、憶えて……。だから、だから！」
由依はうつむいて泣いた。床に涙の染みができてゆく。
郁未は黙って由依が泣きやむまで側に立っていた。
泣きやんだ由依に送っていこうかと聞いたが、由依は自分で帰って行った。郁未は由依の後ろ姿が見えなくなるまで、黙って見送っていた。

「むかあしむかし、あるところに山に柴刈りに行ったおじいさんが……」
沈んだ様子で帰ってきた郁未に、何を思ったか少年はお話をしてあげる、と言った。
断わるのも面倒だったので、ベッドに横たわり、うつらうつらとしながらも聴いている。
「……謎の変死を遂げました」
郁未は眠気が吹っ飛んでしまった。
おじいさんの死因は村の捜査官が調べても解らず、死体解剖の結果何とおじいさんは生

きていた、というあたりで、郁未の忍耐力は限界に達した。
「そんなもん聞いてたら、悪夢にうなされるわ。寝る」
「それは困ったねえ。今日はこれでやめとくよ。おやすみ」
(まさか、第二回とかないでしょうね)
郁未は馬鹿げた昔話もどきを聞いたせいか、沈んだ気分はすっかり消えてしまった。少年の慰め方が他人とかなりずれているが、元気付けようという気持ちだけは本物のような気がする。
郁未は、少しだけ柔らかい表情で眠りについた。

「忘れてたけど、あのトラックの搬入庫ね、あさって封鎖されるから気をつけてね」
翌朝、少年が告げた言葉に郁未は仰天した。
「そんな大事なこと、どうして忘れるのよ!」
「忘れてたんだから仕方ないだろ? それに僕は君の友達を逃がすことはよく思ってないんだよ」
FARGO側にいるのに、これだけのことを話してくれているだけでも、充分感謝しなければならない。郁未は謝った。

しかし、搬入庫がすぐに使えなくなってしまうとなると、由依と姉を逃がすのに、長い期間説得をし続けている訳にはいかない。早めに解決しなければならないだろう。
郁末はとりあえず午前のＭＩＮＭＥＳに向かった。

いくみね、たいこうリレーでアンカー前だったの！　で、一位と二位の子たちとすごくはなれた三位だったの。だめかもしれないって思ったけど、一生懸命走ったの。
順位は変わらなかったけど、二位の子のすぐ後ろまできたの。
アンカーの清水さんが、一位と二位のクラスの子を抜いたの！
清水さんが頑張ったから、一位になったんだけど、清水さんひとりのおかげで一位になったってみんな言うけどね、でも、でもっ。
『解ってるわよ、お母さんは。郁末も頑張ったから、一位になったのよね』
誰も見てなかったんだけどねっ、いくみも速かったの！　すごく速かったの！
『すごいわね、郁末は』

郁末は何かを喋る気力もなく、由依と待ち合わせた地下通路に向かった。

●●●

部活で遅くなると、いつも使っていた近道。
使わなくなった近道。夜、うちに向かって急いでた。
お誕生日だから。お姉ちゃんが、あたしの為にお誕生会を開いてくれるって言ったから。
一番素敵なお誕生会になるはずだった。

『助けてえっ！』
後ろから、誰かがあたしを羽交い締めにした。
誰か、助けて。助けて。助けて。
お姉ちゃん……

肌に食い込むカッターナイフの刃。飛び散る赤い色。
前に見たのと同じ光景が繰り返される。

でも。

なにかが。

●●●

「あたし、思い出したんです、昔のこと」
地下通路でＣ棟へ向かう途中、由依が口を開いた。
「数年前両親が離婚して、おばさんの家に引き取られたんですけど、その頃の記憶が曖昧だったんです。思い出したくなくて、記憶を封印して、そのこと自体も忘れようとしていたみたいなんです」
郁未は由依が何かを、多分とても辛いことを告げるつもりであることを察した。
「あたし、昔男の人に襲われたんです。その後、伯母の家に引き取られて……両親が離婚して、姉が家を出たのはその直後です」
現在の由依が高校一年生であるなら、その無惨な事件が起こったのは中学生か、最悪の場合小学校高学年ということになるはずだ。そんな頃に大きすぎる傷を受けた由依に、郁未は何と言っていいのか解らなかった。
由依は笑ってみせた。

「やだなあ、そんな顔しないで下さいよ。いいんです。全部昔の話なんです。その犯人だって逮捕されたし、もうあたし気にしてません」

「……でも」

「郁未さんに聞いていただいて、すっきりしました。ありがとうございます」

ぺこり、と頭を下げた。

「あたし、お姉ちゃんに謝りたいんです。お姉ちゃんが出て行ったのは、家族がばらばらになったのは、あたしのせいですから」

「由依」

「そんな顔しないで下さいよ。ほら、行きましょう。生き別れの姉妹の再会なんて、今時テレビでしか見られませんよ」

明るく振る舞う由依がいじらしく、郁未も悲痛な話を聞いた辛さは表情から消して歩き出した。

C棟の食堂前まで来た二人は、互いに顔を見合わせる。

由依が無言でうなずいた。

郁未はドアを開き、中へ足を踏み入れた。

（人がいっぱいいるのに、何だか……）

二人しかいないA棟と較べてはいけないのだが、たくさんの人間が食事をしているC棟は、どこか異様な雰囲気を持っていた。

人が多いこと自体ではない。多くの信者が詰め込まれるようにして食事をとっているのに、全員が無言のまま食べ物を流し込んでいる。ひとりの例外もなく、だ。食堂というより、何かの工場のようだった。

「来たわね」

二人を待っていたらしい晴香が近付いてきた。

「お姉ちゃんは？」

「あそこよ」

顎で一方を指す。辿ってゆくと、テーブルの一番隅で、写真の面影がはっきりと残っている女性が他の信者と同じように食事をしているのが見えた。

由依は、友里の前まで歩いて行った。

「……お姉ちゃん」

友里が、にっこりと笑う。

それを見ていた郁未は、由依の心が報われたことで、ほうっと息をついた。
しかしそれは、大きな間違いだった。
「どなたかと間違えてらっしゃらない？」
優しい口調で返事をする。しかし由依の心を何よりも鋭くえぐる言葉だった。
「ごめんなさい。私には妹はいないの。それじゃあね」
立ち去ろうとする友里に、尚も由依は言いつのる。
「お姉ちゃん……あたし、思い出したの」
友里が足を止めた。
「あたしがあんなことになって……それで、家族が気まずくなって。でも、もう大丈夫だから。あたし、過去を引きずったりしないから。だから、一緒に帰ろ？　伯母さんのところで昔みたいに明るく暮らそう」
友里は沈黙する。
パアンッ！
その一瞬後、広い食堂に平手打ちの音が響いた。
「言いたいことはそれだけっ⁉　昔のことを思い出したですって？　そんなの嘘よ！」
「お姉ちゃん！　う、嘘じゃないです」

「あなたに姉呼ばわりされたくないわ。それに、嘘じゃないっていうなら、あの夜あんたが私にしたことを言ってみなさいよ！」

「……あたしが、お姉ちゃんに……？」

それを見て、郁未はすっと腑に落ちたことがあった。

由依はまだ全てを思い出してはいなかったのだ。強姦された、というだけでもショッキングだったせいで、すんなり納得してしまったが、まだ、思い出せないことがあるという訳だ。女性としての尊厳をまるごと踏みにじられるような経験よりも、まだ辛くてたまらない事実が残っているのだ。

友里が語ったのは、思いもかけないような話だった。

由依が暴行を受けてからの名倉家で、その事実を受け入れられないのは、傷付いた由依だけではなかった。家族全員が、突然降りかかってきた事件を受け止めかねていた。

由依を鎌倉の伯母に預けて三人で暮らそうという母と、それに反対する父。

ぎすぎすした雰囲気が家の中に立ちこめていた。

「由依、伯母さんの家に行こ。あなたひとりの為に、この家がむちゃくちゃになってる。解ってる？」

あれから半ば心を閉ざしていた由依に、友里は語りかける。
「今ならまだ間に合う。だから、伯母さんのところへ行きましょ、ね？」
「お姉ちゃんも、一緒……？　お姉ちゃんと離れたくない」
「私が一緒だと意味ないわ。あなたひとりで頑張らないといけないことなのよ」
光のない、どんよりとした眼で、由依が姉を見る。
「もうずっとお姉ちゃんと一緒に暮らせないの？」
「それは、あなた次第よ」
病んだ由依の心に、その言葉がどう響いたのか、友里はその夜知ることになった。
眠っている時、側で由依に話しかけられたような気がした。
『テレビで見』
『永遠に一緒に』
『仲良く暮ら』
『昔ちょこと遊んだ河原に』
『好き』
その後は激痛にのたうち回っていた。痛みと失血に苦しむ友里が意識を失う前に見たのは、己の血で赤く染まったシーツと、血で汚れたカッターナイフを持ったまま立ちすくむ

由依の姿だった。
友里が退院した時にはもう、由依は鎌倉の伯母の家へ行かされていたのだった。
「もし私の悲鳴を誰にも聞きつけられなかったら、私は殺されてたのよ！　眼の前にいるあんたにっ」
「知らないっ！　あたしそんなの知らないっ」
「思い出しなさいよおっ！　私の腕に一生消えない傷を刻んだあの夜のことをっ」
友里は罵りながら左の袖をめくった。
そこには紫色に変色した傷と、それを縫合した痕がくっきりと残っていた。
由依の顔から、ほとんど病院の壁を思わせるように血の気が抜けて行った。
「こんなところに傷のある人間が世間でどんな扱いを受けるか解る？　実の妹に殺されかけた人間の気持ちがあなたに解るっ？　それでものうのうと一緒に暮らそうって言えるの？　何とか言いなさいよ人殺しっ！」
由依はその瞬間、全てを思い出した。最愛の姉を殺そうとした自分。カッターナイフから伝わる、友里の肉を切ってゆく感触。何もかもを。
そして、人殺しという言葉に弾かれたように、食堂から駆け出して行った。

晴香に制止されて、結局郁未は由依を追うのをやめた。
由依にとっても、決して誰かと顔を合わせたくない時であるのは確かだし、郁未もまた由依を慰められる言葉を持たなかった。
郁未は由依のことが気にかかりつつも、A棟へ戻ることにした。

午後はELPODの代わりに安息室で休憩だった。MINMESやELPODと違い、嫌な気分になることもなく、ゆったりと眠った。
「あ、ごはんの時間だ」
郁未は食堂に行って、おいしそうな肉じゃがの湯気にあたりながら、ぼんやりと食べつつ考え込んだ。
あれから由依はちゃんとB棟へ戻っただろうか。大切な姉からあんな言葉を受けたことで、立ち直れなくなっていたらどうしよう。そんなことばかり頭に浮かぶ。
「何か、心配事ですか？　顔色もあまりよくないようです」
確かに由依のことでいろいろ考え込んでいたし、最近はいろんなことがありすぎて体調もそれほどよくないが、それを葉子に心配してもらえるとは思っていなかった。

「……どうして解ったの？」

「毎日顔を合わせていれば、微妙な顔色の変化でも気付きます」

つまり『微妙な顔色でも気が付く程度に気にかけていた』ということだ。

「ありがとう」

葉子は不思議そうに小首を傾げる。

「気分が優れないようでしたら言って下さい。わずかですが常備薬がありますから」

「……うん」

「ちょっと、待っていて下さいね」

葉子は端を置くと小さな救急箱を出て行った。

しばらくすると小さな食堂を下げて、葉子が戻ってきた。

「とりあえずビタミン剤と、鉄剤です。他にも熱冷ましや痛み止めもありますから」

小さな錠剤をふたつ出してもらい、郁未は水と一緒に飲み下した。

誰かが自分の体調を心配してくれる。そのくらい気にかけてくれている。そのことが嬉しくてたまらなかった。母が死んでから、そんな気持ちを抱いたのは初めてだった。

さほど好きな訳でもない肉じゃがが、妙においしく感じた。

由依と話そう。そう思った郁未はB棟へ向かった。
しかし郁未はB棟へ辿り着く前に、目的の人物を見つけることになった。地下通路の奥、いつもは入っていかない場所から、由依のすすり泣きが聴こえたのだ。
郁未は、奥へ入って行った。案の定壁を背に由依がうずくまって泣いている。
「由依……」
郁未は由依の隣に腰を降ろすと、由依はゆっくりと郁未の方へ顔を向ける。長い間泣いていたのか、眼を真っ赤に腫らしていた。
「ほんと、馬鹿みたいですよね。あたしが全部悪いのに、行方不明の姉を探すなんて悲劇のヒロイン気取りで、郁未さんや晴香さんにも迷惑かけて。お姉ちゃんの、ううん、友里さんの気持ちも踏みにじって……。どうしようもない馬鹿です、あたし……」
「気持ちは解るけど、とりあえず自分で自分のことを許そうよ。そこから始めなきゃ」
郁未の言葉に、由依は堰（せき）を切ったように叫んだ。
「どう頑張れって言うんですか！　あたしは実の姉を殺そうとした人殺しなんですよ。郁未さんに、何が解るって……あ」
「落ち着いて、由依」
「ごめんなさい。こんなこと言うつもりじゃなかったんです」

郁未は由依の肩を抱き寄せてやった。
「でも、由依が頑張れば、何かが必ず変わるとは思う……。だからさ、頑張ろ」
由依はうなずいた。
その夜は、硬い通路の上で、二人して座ったまま眠った。誰よりも心細い思いをしている由依に、ただひとつ郁未がしてやれることだった。
『今日から、毎日……お姉ちゃんのところへ通います。それで、謝り続けます。許してもらおうなんておこがましいかもしれないけど、ずっと、謝り続けます！』
翌朝、別れ際に告げられた由依の言葉には、一切の迷いがなかった。
『だって、やっぱりあたし、お姉ちゃんが好きだから……。誰よりも大好きだから』
もう由依は大丈夫だ。郁未はそう確信していた。
しかし、その確信から半日もしないうちに、状況は急転してしまうのだった。
「葉子さん、人参食べないの？　ひょっとして人参、嫌いだとか」
「……違います」
「食べられないんだったら、私が食べてあげるよ」

数日前に較べると、なごやかなじゃれあいとも見える夕食の会話を、郁未は楽しんでいた。葉子の人参をひとつ取り、眼の前で食べてみせる。
「おいしいよ」
「嘘、ついていませんか？」
「ついてないよ」
「……食べます」
第一印象よりもずっと子供っぽい会話の後、葉子が人参を口にした。
その時。
突然、あたりに耳障りな警報音が響き渡った。
郁未がぎょっとして立ち上がった。
「室外に出ることを禁止する警報音です。鳴り止むまでここにいればいいのです」
「でも、一体何があったの？」
「さあ、そこまでは」
葉子は何事もなかったように落ち着いている。
「よくあることなの？」
「たまに」

郁未はドアの向こうから伝わってくる音から、何が起こっているか判断しようとドアに近付いた。誰かが、あわただしく廊下を駆けてゆく音が聴こえる。
到底ただの警報チェックなどであるはずもない。葉子でさえも知らないというのなら、このドアの向こうに、郁未の目指す真実に近づけるヒントがある可能性は高い。
郁未は葉子に向き直った。
「ごめんなさい。行かせて！」
「あなたは知らなくてもいいことを知ろうとしています」
「知らなくてもいいことでも知りたいの」
少しだけ葉子が戸惑ったような表情を滲ませる。
「後悔する、かもしれませんよ」
「それでも、かまわない」
郁未は食堂を飛び出した。

思っていたより状況は不穏なものだった。A棟の中を巡回員が銃を持って走っている。銃を必要とする危険がある訳だ。郁未の側を二人の巡回員が打ち合わせながら走って行った。

「完全なロスト体だ！」
「識別番号C－188、合っているか!?」
「確認！　いくぞ……おい、おまえ」
男は走りながらに郁未の方を振り返る。
「早く部屋へ戻れ！」
郁未が形だけうなずくと、男達はそのまま駆け去って行った。
C－188。Class Cの信者に与えられた番号だ。晴香のものではない。しかし、友里の件といい、全てがC棟に集まっているような気がした。
郁未は地下通路を急いで抜け、C棟に入って行った。
いつまでも止まない、耳が痛くなるような警報音が響く中、郁未は強張った表情で足を進めていた。

第三章

Ｃ棟の廊下を歩きながら、郁未は思っていた。
厳戒態勢を示す真っ赤な照明が、ひどく不吉な感じがする。もちろん、Ａ棟でも同じように赤い照明が灯されていたのだが、ここに銃を持った巡回員が総出で迎えなければならない何かがいるかと思うと、余計に凶々しく思えてならないのだ。
こんな時にうろついているのだから、間違えて撃たれてしまうかもしれない。
それ以上に複数の男が銃を持っていなくては立ち向かえないような相手に、郁未は丸腰で対面しようとしているのだ。
ただの命知らずとも言える。
しかし、自分の命をある程度危険にさらさなければ、ＦＡＲＧＯでは真実に至る情報など手に入らないのは、ここ数日間葉子や少年と話してよく解っていた。
だからこそ、郁未はたったひとりでこの廊下を歩いているのだ。
警報音にまぎれて、どこからか声が聴こえたような気がした。
（悲鳴？）
郁未は緊張で体にびりり、と痺れたような感じがした。
集団部屋を覗き、無人であるのを確認すると、次の廊下を曲がった。
向こうにはもうひとつ集団部屋があったはずだ。その厳戒態勢の元凶はそこへ逃げ込ん

だかもしれない。郁未が向かおうとすると、後ろからぐいっ、と肩を引っ張られた。
「……っ！」
郁未を強引に振り返らせたのは、ＦＡＲＧＯの巡回員だった。
「何を呑気にうろついているんだ！　どこかに隠れていろ。あれは、向こうにいるんだ」
『あれは、向こうにいるんだ』
その言葉を聞いた瞬間、郁未は巡回員の手を振り払い、前へ駆け出した。廊下の突き当たり近くまで走り、角から先を窺う。
とりあえず、不審なものは見当たらない。無人の廊下だ。
そこにある集団部屋の中を気配を殺して覗き、ここにも目的の存在がいないと知ると、郁未は歩き出した。
いつの間にか、体中から脂汗が滲んでいるのに気が付いた。
鉛色の鉄扉が不快なことを思い出させる精練の間にも、誰もいなかった。
向こうにあるドアに、郁未はすうっと寄る。安息室だった。計器の電源が落とされているので、中は見えない。
ドアを閉め、郁未は中に入った。
何かが、動いた。

(気のせい、よね……?)

郁未は眼をこらした。確かに、一定の質量を持った何かがわずかに動いた。何者かがここに潜んでいるのだ。

息を止めた。

ゆっくりと足を進める。この先にいるのはもしかしたら、とても太刀打ちできない化物がいるのかもしれない。緊迫感のせいで、まるで水の中を歩いているように体が重い。もう少しで、潜んでいる何者かに触れることができる。

郁未が手を伸ばした瞬間。

「こっちに来ないで下さいっ!」

叫び声をぶつけられ、郁未は反射的に腕を引っ込めた。

「あのっ、あたし、違うんです。決して怪しい者ではありません。信じて下さいよおっ」

そこまで聴いて、郁未の緊張は解けてしまった。

「由依、でしょ?」

「ええっ? 郁未さんですかあ。よかったです」

暗闇に馴れると、おぼろげに由依らしいシルエットが浮かんでくる。

「あなた、どうしてこんなところにいるの?」

「友里さんに謝ろうと思って来たんです。そしたら急に警報が鳴って……ここに入り込んだんですけど、それからどうしていいのか解らなくて」
「なるほどね」
郁未はうなずいた。
「それで……郁未さん、何が起こってるんですか？」
「解らない。でも、巡回員が総出で銃持って走り回ってることは事実よ。危険な存在がC棟にいるのかもしれない」
「あっ、あたしどうしたらいいんですか？」
ここで隠れて危険をやり過ごすのも手ではあるが、その危険な存在とやらがドアを開けて入ってきた場合、退路が一切ないのがまずい。それに、厳戒態勢に入っている巡回員も、ひどく動揺していた。こんな暗がりに隠れていては、そのまま撃たれかねない。
「危険はあるけど、すぐにB棟に戻った方がいいと思う」
「解りました。一緒に行ってもいいですか？」
郁未はうなずいた。
二人は安息室のドアの前に立ち、外の気配を窺う。耳をさいなむ警報音に紛れてしまって、中からでは解らない。うっすらとドアを開く。

銃声。
「そっちかっ！」
巡回員が駆け去ってゆくのが見えた。
郁未達は他に誰もいないのを確かめて、廊下に出た。
「銃の音、でしたよね」
「多分ね」
巡回員は郁未が来た道を走っていったのだ。さっき来た道を逆に辿れば、この騒ぎの源と対面することができる。
しかし、由依にまでそのような危険を背負わせてよいのだろうか。
「由依、もう少し安息室で待ってる？」
「いえ、行きます」
郁未は由依を先導するように、ゆっくりと歩き出した。

ひとつめの角を曲がった時、郁未は顔を強張らせた。
向こうの壁にもたれかかっていたものは、先程と同一人物であるかどうかは解らないが、巡回員のひとりだった。正確には、巡回員の死体だった。

眼、鼻、耳、口。顔の穴の全てからおびただしい量の血を流していた。
彼が持っていたらしい銃が、玩具のように転がっている。
「由依、死体がある。見ないで」
郁未は由依を死体から見えないような場所に庇った。
顔をそむけて歩く由依は、それでも視界に死体が入ってしまったらしく、小さく呻く。
銃を持った相手を、あんな風に殺すことのできる存在とは何なのか。
(何なの、一体。彼らの標的って……)
再び、発砲音が聴こえる。角の向こうだ。しかし、今度は発砲音だけではなかった。
メキッ
何かを折り曲げたような、嫌な音がした。
すぐそこに、何かがいる。確かめなければいけない。その義務感だけで、郁未は角を曲がった。
風もないのに、ふわりと髪がなびいていた。
眼が、金色に近いほど薄くなっていた。
しかし、それは明らかに友里だった。郁未は友里の様子がおかしく思えた。表情もどこか異常な感じがする。まるで、何かに取り憑かれたように。

ゆらゆらと動く、金色の灯りのような友里の眼。
「……ぐうっ！」
何の前触れもなく、郁未の体を激痛が襲った。
骨が軋む。心臓が壊れてしまいそうなほどに脈拍が速くなっている。郁未は少しでも激痛から自分を庇う為に、自分の体を抱き締めた。
「郁未さんっ」
郁未のただならぬ状態を見て、由依が飛び出してくる。
「友里さん……っ⁉」
「……ゆ、い」
由依を見た友里は、かすかな声で妹の名を呼ぶと、床に崩れ落ちた。
慌てて駆け寄った由依が、友里を抱き起こす。生きてはいるようだ。体の角度を変えた時、ちょうど友里の手の甲が眼に入った。
C－188
巡回員が探していたのは、銃で迎え撃とうとしていたのは友里なのだ。
「由依っ、早くお姉さんを連れて地下通路へ降りるわよ。説明は後！」
郁未と由依は両側から友里の体を支え、地下通路まで運んだ。その途中で、さっきの激

痛がいつの間にか消えていることに気が付いた。

「さっきの警報と友里さん、何か関係があるんですか」

地下通路の壁に友里の体をもたれさせてから、由依が口を開いた。

郁未は少し迷ってから、知っていることを由依に話してやる。由依の顔は蒼ざめた。

「どうして友里さんがＦＡＲＧＯの人達に狙われないといけないんですか！」

「そこまでは解らない。でも、巡回員が言っていた識別番号は友里さんのものだった」

由依は不安そうにうつむいた。

「友里さん……殺されるんですか」

「大丈夫よ。大丈夫だから」

その後友里のことをＢ棟の由依の部屋に運んだ後、郁未は明日の昼にも様子を見に来ることを約束して、Ａ棟に戻った。

「警報が鳴っている時、どこにいたんだい」

郁未はびくっ、とひきつった。すっかり郁未の行動は見透かされているらしい。

「えっと……Ｃ棟」

「それだけかい」
「うん……」
少年はわずかに困ったような顔をした。
「君のことだから、じっとしていないとは思ったけど。あんまり無茶はしないでくれよ」
「うん……」
多分少年もこの件で駆り出されて大変だったのだろう。ひどく疲れているらしく、早々に眠ってしまった。
疲れているのは郁末も同様だったので、追いかけるように眠りについた。

朝になると、少年は昨日の疲れはすっかり取れたのか、元気そうに起こしてくれた。
「おはよう。いやあ、昨夜はよく寝たなあ」
「そう、よかったわね」
とりあえず、元気そうな少年の為に相槌をうった。
「で、ひとつだけ教えてくれるかい」
「なに？」
「……C－188はどうしてるんだい」

少年は真顔になっていた。郁未は言葉を返せないままうつむいた。
「知ってるとは思うけど、今の彼女は非常に危険な状態なんだよ。これ以上関わらないことをお勧めするよ」
郁未は黙ったまま部屋を出た。
関わるな、と言っても今更由依達を見捨てる真似はできなかった。

午前のＭＩＮＭＥＳを終え、郁未は由依の部屋へ向かった。
Ｂ棟。由依の部屋のドアを叩く。
「どなたですか」
由依が薄くドアを開ける。中に寝させている友里を見られないように警戒しているのだろう。郁未が名乗ると、由依はドアを一度広く開けて招き入れた。
眠っていないのだろうか。由依はひどく顔色が悪かった。
ベッドでは昨日寝かしつけたままの格好で、友里が眠っていた。
「容態はどう？」
「ずっと眠ったままなんです」
心配そうに由依が姉を見やる。郁未は由依にうなずいてやった。

「すっかり落ち着いたみたいだし、もう大丈夫よ。それより……」
バランスを崩しかけた由依を、郁未は抱きとめた。
「大丈夫なの、由依。まさか、寝てないの？」
「どうってことないですよぉ。夜更かしは馴れてますから」
無理やり笑ってみせる。
しかし、消耗していない訳がないのだ。過酷な現実。凌辱という名の鍛練。それ以上に最愛の姉からの無慈悲な仕打ち。たったひとつでもお釣りが来そうだというのに、それらは一時に由依の上に降ってきたのだから。
「郁未さん、あたしは嬉しいんですよ。友里さんの為に何かできることが」
「由依……」
口ごもる郁未に、由依はひどく寂しそうに笑った。
「眼を醒ましたら、きっと怒るでしょうけどね」
由依の中にある姉の存在の大きさを、郁未は理解した。それ以上何も言わず、夜にまた様子を見に来ることだけ伝え、郁未はA棟へ戻った。
ＥＬＰＯＤがもうすぐ始まってしまう。

憧れの先輩だった。優しくて、いつも相談に乗ってくれて完璧で。
だから、舐めてくれって頼まれた時、その通りにした。
でも、違った。先輩は完璧なんかじゃなかった。
『ほんとうにこいつ、舐めてやがるうっ』
『ずっと前からこいつには眼をつけてたんだ』
『いい先輩ぶってた甲斐があったぜ……』
大好きな人のあそこだったら、舐められる。済まなそうに頼んできたから、そうしてあげなきゃいけないない気になった。
でも、違う。
先輩は思ってた完璧な人なんかじゃなくて、卑しい心の男性だった。
喉に絡む、苦くて生臭い味。それ以上に、征服欲と自分の快楽だけに酔った、歪んだ顔の先輩が嫌で、なかったことにして忘れようとしてた。
私は、愚かだった。
快楽のせいで醜く歪んだ先輩の顔がゆらりと揺れた。

「後悔していますか？」
食堂で葉子と顔を合わせた時、そう訊かれた。
郁未はためらわず首を振る。昨日食堂を抜け出してからの出来事は、確かに真実への鍵を宿していた。そう郁未は確信している。
「そう言えば葉子さん、どうしてこの施設に来たの？」
「ＦＡＲＧＯの教えに感銘を受けたからです。あなたは何故ここに来たのですか」
「私は……母が以前いたところだったから」
「母、ですか」
何故か葉子の顔に憂いの色が浮かぶ。
「その人は今はどうなさっているのですか」
郁未はとても真実を告げる気力は出なかった。まだ、母が死んで間もない。由依や晴香に強がってみせても、実際には全く平気になどなっていない。
「すみません。余計なことだったようですね」
「いつも余計なことばかり訊いてるのは私の方だから」
「自覚はあったのですね」

郁未は力なく笑ってみせた。
「郁未さん、希望というものは意外と近くにあるものです。要はどんなことがあっても、絶望しないことです」
郁未は眼を丸くした。よりにもよって葉子が慰めてくれるとは思っていなかったのだ。
食事を終え、郁未はトレイを戻しに行った。部屋を出る直前、郁未は葉子を振り返る。
「さっき、私のこと『郁未さん』って呼ばなかった？」
「いけませんか」
「ううん、全然」
にっこりと葉子に笑いかけ、郁未はドアを閉めた。

郁未がB棟に由依の部屋のドアをノックした時、誰も応答しなかった。数回叩いてみて、そのままドアを開けると、部屋には、由依の姿はなかった。
代わりに、ベッドで上半身を起こしてこちらを見ている友里と眼が合った。
「あなた、由依と一緒にいた子ね」
ノックの音で眼が醒めたものらしい。ついさっき起きたような顔をしている。
「昨日のこと、憶えてますか？」

「気がついたらこの部屋にいた、それだけよ」
「それだけって……」
郁未は友里の言っていることに当惑した。自分の記憶が途切れていたら、普通は驚くのではないか。郁未の表情を読んで、友里は無表情で呟いた。
「いつものことだから」
意味を図りかねるまま、郁未は由依の所在について訊いた。
その途端、友里は眉を逆立て、不快そうな顔をする。
「ここ、あいつの部屋なの」
「由依に逢ってないの？」
「今眼を醒ましたところだもの。じゃあ、私はもう行くわ」
友里はベッドから立ち上がると、郁未の脇を抜け、立ち去ろうとする。
「ちょっと待って！　由依に、妹に逢っていかないの⁉」
「あんなやつ、妹でも何でもないし、逢うつもりもないわ」
「でも、倒れてたあなたをここまで運んで、一晩看病したのは由依なのよ」
友里はきっ、と郁未を睨んだ。
「そのくらいで私にした仕打ちを帳消しにしろとでも言うの！」

「一言お礼くらい言ったって、罰は当たらないと思うけど」
「私が？　あの人殺しに？　冗談じゃないわ」
「……友里さん、あなたどうしてそこまで由依のことを憎めるの？」
郁未が自分のことを咎めていることに対して、友里は怒りを隠さなかった。
「あなただって話を聞いていたんでしょ」
「聞いてたから言ってるのよ。だって、どう考えても由依は」
友里が郁未を睨んだ。
(この人は、もう解ってるのかもしれない)
友里は明らかに真実であろうという方向を、意図的に見ないようにしている。
郁未は言葉をついだ。
「私は由依と知り合って、まだ日が浅いけど、これだけは言える。あの子は本当に姉さん思いのいい子よ。今からでも遅くないはず……」
「遅いのよ！　もう手遅れなの。私はもう引き返せないのよ」
友里は郁未を押しのけて、B棟の奥に向かって走り去っていった。今の友里が巡回員に見つかったら、確実に殺されてしまう。郁未は後を追った。
途中で、向こうから歩いてくる由依と鉢合わせた。

「由依っ、友里さんこっちに来なかった⁉」
「友里さん気が付いたんですか？　よかった」
「実は全然よくないのよ」
郁未は手早く今の状況を話し、それぞれ二手に別れて友里を探すことにした。

●●●

友里は乱暴に壁に拳を叩き付けた。自分でも、ひどく苛立っているのが解る。
「……どうして」
由依が眼の前に立った時の自分は、ただひたすら醜かった。ただ悪し様に由依を罵り、心の弱さを露呈していただけの自分。
(あの時、私はどんなことがあっても由依を守っていくって誓ったのに)
幼い頃、飼っていた犬のちょこが死んだ時、ちょこの死体にすがって、ちょこを生き返らせてと泣いていた由依の姿を思い起こす。
『お姉ちゃんならちょこを生き返らせてくれるよね⁉　だって、お姉ちゃんは由依のお姉ちゃんだもん。由依が困ってたらいつでも助けてくれるって言ってたもん！』

そう誓ったはずなのに、由依が一番助けて欲しかったはずの、一番酷いことから、由依を助けてあげられなかった。
『どうして助けてくれなかったの』
結局、脅えて泣く由依に対して自分がしたことは、由依に対する裏切りだった。
とくん
「あああああああああああぁっ！」
友里の体の中で、何かが脈打つ感覚。ここ数日間、友里を幾度も襲った激痛。
痛みは頂点に達したところで、友里の体から消え去っていった。
あの『儀式』の後、友里が何より望んでいた不可視の力が手に入る代わりに、この痛みが襲うようになったのだ。そして、痛みが襲ってくる間隔はだんだん短くなっている。
もう、自分の命は長くない。
多分、次の発作が起きた時が最後だ。
「……お前、昨日のロスト体か！」
「ロスト体？」
壁にもたれていた自分の前に、いつの間にかＦＡＲＧＯの巡回員が銃を構えていた。
何故か、ひどく脅えている。

「消えろぉっ！」
男は半ば逆上しながら引き金を引いた。銃声は至近距離で聴こえた。
そこで、友里の意識は真っ白になった。

●●●

郁未達は巡回員の叫びを聴きつけて、それぞれに友里を助けようと走った。
由依は銃を持った腕にしがみつき、友里を撃たせまいとする。その間に忍び寄った郁未が、大きく振りかぶった拳で男の後頭部を直撃した。
男がよろめいているうちに、二人は友里を支えて移動する。一番近くにあったのは、精練の間だった。由依の気持ちを考えて一瞬躊躇したが、場所を選んでいられる余裕はどこにもなかった。急いで室内に入り込む。
由依は、ドアに鍵をかけた。
友里が、軽く呻いた。どうやら気絶していたのではなく、当たらなかったとは言え銃を向けられて殺されそうになったショックで動けなくなっていただけらしい。

由依が、遠慮がちに側に寄る。
友里は、わずかに口を動かした。しかし、かすれてしまってまともに聴こえない。
「……え、あの」
「どうして……助けたの」
「友里さん？」
由依の方を見据え、友里は叫んだ。
しかしそれは、由依を弾劾する言葉ではなかった。
「私は、私は何もできなかったのに！　あんたが襲われた時、由依が一番助けてほしい時に助けられなかったのに……どうして私の時にはあんたが助けに来たのよっ」
「……あ」
「約束したのに……由依に困ったことがあった時には、お姉ちゃんが助けるって約束したのにっ！」
郁未はその時、友里が不可視の力を何故望んだのか解った。
大切な妹を助けられなかった時、友里は自分があまりに無力であることに打ちのめされ、そんな自分を許すことができなかったのだろう。そして、最後の希望として万能の力、不可視の力にすがるしかなかったのだ。

「由依が悪くないなんて、本当はずっと気付いてた。一番辛い由依を、家族全員で癒してあげなきゃいけないと思ってた。でも、あの時は誰かひとりを悪者にして、自分は被害者の振りをしていたかった。そうしていれば楽だから。由依に辛いこと全部押し付けて、嫌なことを忘れて生きてきたのは……私の方だった」

由依はしばらく友里を見つめ、ぽつりと言った。

「ごめんなさい」

友里は、思いもかけない言葉を聞いて、その意味が解らないかのようだった。

「あたし、決めてたんです。これからずっと謝り続けようって。だって、悪いのはやっぱりあたしだもの。これからも毎日謝り続けるから、だから、二人でここを出ませんか？　一緒にひとつの場所で暮らしませんか？　昔みたいに、とは言いませんから……」

友里は、ひどく哀しそうな笑みを浮かべた。

「それだけは、できない。もう、手遅れなの……私の命はもう、長くないから」

由依は泣きそうな顔で言いつのる。

「それなら病院行こっ。お薬飲んで、注射してもらって……そうだ！　あたし、お粥作るからっ。由依特製の栄養満点のお粥作るからっ、だから……」

「ごめんね、由依」

友里は、優しく由依の言葉を遮った。
「本当に、ごめんね」
由依は姉の体をただ、抱き締めた。今別れを告げなければならないほど、状況は切迫しているのだ。ここを出るのに間に合わないほど早く、姉の命が尽きるのだということを痛感しながら、姉を抱き締めていた。
「私、姉らしいこと、何もしてあげられなかった。ねえ、由依、せめて何かお願い言って。今の私には何もできないかもしれないけど」
「お願い、聞いてくれるの？」
「うん」
由依は涙をこぼしながらも、必死になって言葉を紡いだ。
「あたし、また……お姉ちゃんって呼びたい。お姉ちゃんのこと、お姉ちゃんって呼びたい！」
友里はうなずいた。
「お姉ちゃん……お姉ちゃん、お姉ちゃん！」
由依は叫び続けた。声の続く限り最愛の姉を呼び続けた。友里もまた、そんな妹に応えるように抱き締めている。

しかし、その時も終わりを告げた。
友里が由依の体を離し、郁未の方を向いたのだ。
「由依をお願い」
郁未は由依の肩に掌をかけた。由依は一度うなずいてみせ、最後に友里のことを抱き締めて、精練の間を出て行った。
それを見送る友里の体を、あの激痛が襲う。中から自分を食われるような、異常な痛みは、例え今耐えられたとしても、あの飛び飛びの記憶を考えると、もうこれ以上自我を保っていられる自身がなかった。
とくん
(こんなことに不可視の力なんていらなかった。気付くのが遅すぎたけど)
消えそうになる意識と戦いながら、友里はかすかに笑んだ。
(でも、由依にお姉ちゃんってもう一度呼んでもらえた……)
そこが、友里の意識の終わりだった。

精練の間の外で、郁未は鉛の扉を見ながら思った。
昨夜の、友里の変貌。ＦＡＲＧＯが厳戒態勢に移行してまで、友里を消去しようとした

理由。昨日郁未を襲った激痛。そして、顔の穴から血を吹き出していた巡回員。
そして、ロスト体という言葉。
友里は自分がそういう状態になった理由に気付いていたようだった。だからこそ、由依を受け入れて思いを残そうとしたのだ。
それは、死の間際の母がとった行動に似ていた。
そうなった経緯に心当たりがありそうだったのだ。少なくとも、難病に苦しんでいるというようには決して思っていなかったのだから。それなのに、死は予測できる状態。
つまり、友里はＦＡＲＧＯに何らかのことをされたのだ。それは多分失敗し、『ロスト体』と呼ばれるに至ったのだろう
そこまで考えたところで、郁未の思考は止まった。
鉛の扉の内側からくぐもった友里の叫び声が聴こえた。咆哮と呼ぶべきかもしれない。苦痛に満ちた獣の咆哮を、それは思わせた。
ガンッ、ガンッ、ガンッ
何かを激しく扉にぶつけるような音。友里自身が己の体をぶつけているのだ。
由依は郁未が予想しなかったほど冷静に、その有様を見ていた。まるで、その情景を記憶に焼き付けるように。

めきっ、と何かがひしゃけるような音がした。友里の悲鳴。そしてまた、さっきのめきっめきっ、という音。
由依は叫び出したいのをこらえるように、自分の唇を噛み締めていた。
不意に、床から水が流れてくるような音がした。
扉と床のわずかから隙間から、赤い液体が流れ出てくる。そして、いつの間にか消えてしまった友里の声。それが何を意味しているのかは明白すぎた。
「さようなら、お姉ちゃん」
由依の声から抑揚が消えていた。

少年から聞かされていた、脱出経路が使えるのは明日までだということを伝え、由依と別れると、郁未も自分の部屋へ戻る為に地下通路に潜った。
「遅かったわね」
地下通路では晴香が待っていた。由依の件で晴香のことを忘れていた。
「晴香、遅れてごめん」
「それで、由依の方はどうなったの?」
「決着がついたわ……望ましい形じゃなかったけど」

「そう、それなら私達の番ね。今日はその打ち合わせに来たのよ」
「そう、ね。でも待って。明日またここで逢いましょう。話はまたその時に」
晴香は泥のように疲れ果てている郁未を見やると、軽くうなずいた。
「解ったわ。じゃあ、また明日」
郁未のことを考えて、あっさりと引いてくれた晴香は、そのままC棟へ戻って行った。
晴香は晴香で、自分の目的があってここに来たのだ。彼女の気持ちも察してあげなければいけない。C棟の、とても人間が暮らすようにはできていない環境で、その為に耐えているのだ。
しかし、今日だけは由依のことを考えていてあげたかった。
郁未は晴香に済まないと思いながら、自分の部屋へ戻った。

疲れきった郁未は、ベッドの倒れ込んだ。
しかし、何故か枕が妙に埃っぽい。感触がいつもの枕と違う。郁未は体を起こし、枕の代わりに置いてあったものを掴んだ。
汚れていてごみかと思ったが、うさぎのぬいぐるみだった。
しかし、どう考えてもうさぎのぬいぐるみの残骸としか言いようがなかった。ほつれか

けて、腹部の縫い目から詰め物がはみ出している。
「何これ」
「ああ、それね。どう?」
少年が妙に嬉しそうにしている。
「どうって、何を言えばいいのよ」
「いや、何か感想があるかな、と思って」
やはり少年は何かを期待してにここと笑っている。郁末は頭を抱えた。
どう考えても、このぼろぼろのぬいぐるみを置いたのは少年としか考えられない。ごみを片付けている時に偶然ベッドにこぼれ出た可能性もなくはないが、それは彼の期待に満ち満ちた顔が否定している。
つまり、これは彼からプレゼントなのだ。
「ねえ、どうなの?」
「……おやすみ」
「うわあああ」
どうしても一言感想を言わなくてはすまない状態であるらしい。郁末は頭を抱えた。
「ありがとう」

とりあえず、礼の言葉を口にする。
もらって嬉しくなるような代物では全然ないが、今か今かと待っている少年に根負けしたようなものだ。しかし、少年は郁未の真意に気付かないのか、凄く嬉しそうだ。
「こういうものって女の子は好きそうだし、喜んでくれると思ってたんだ」
本当に郁未が喜ぶと思っていたらしい。そんなごみのような物をもらって嬉しくなる女の子はまずいない、と、これからの彼の為に忠告したくなったが、少年の気持ちに救われたような気分になった郁未は、あえて言うのはよした。
悲痛なことがあった夜を、彼がほんの少し救ってくれたのは事実なのだから。

第四章

勝つことにプレッシャーなんかない。
だからスタートはいつもうまくいく。
みんながまだうつむいている中、私はひとり駆け出す。

風の圧力に、自分の速さを実感する。
風が、とても気持ちいい。それだけの理由で走る。

辞めてしまった理由は簡単だった。疲れただけ。
(届いてほしかったの、あのひとに)
競争になんて興味なかった。
(私の、頑張っている姿が)
嫌になったからやめただけ。
(ただ、あのひとに……)

午前の訓練を終え、郁未は約束通り地下通路で由依を待った。
しばらくして由依がやってきた。

「由依、決心はついた？」
「でも、郁未さん達が頑張ってるのに、あたしだけ安全な場所に逃げるなんて……」
「ここはあなたのような子がいちゃいけない場所なの」
郁未はあえて厳しい表情を作る。
「きっと友里さんも、あなたが普通の生活に戻ってくれることを望んでいるはずよ」
効果的ではあるが、卑怯な手段で話し合いを回避したことで、郁未は罪悪感を抱いた。
しかしここの残るいわれのない由依が、郁未達を手伝う為に、凌辱を受け、苦痛を味わう羽目にさせてはいけない。これが由依の為だ、と自分に言い聞かせる。
由依も姉の名を出されると、迷いながらもうなずいた。
「そう、ですね。お姉ちゃんに心配かけたくないです」
「そろそろ、行きましょ」
郁未達は通気ダクトの方へ向かった。

トラック搬入庫に降り立ち、郁未はひとつのトラックを指差して説明した。
「ここからトラックに乗り込めば、街へ出られると思う。ただ、私達が乗ったのとは違う場所へ向かうトラックの場合、そこからは遠い可能性はあるけど」

由依がおずおずと見上げる。
「郁未さん、一緒に施設を出ませんか？　晴香さんも呼んで」
これからFARGOに残る二人を待つのが、自分と同じか、それ以上の苦難であった場合を想像しているのか、ひどく辛そうな表情だ。
郁未はゆっくりと首を振った。
「私も晴香も、まだ目的を果たしていないから……施設に残るわ。心配してくれてありがとう、由依」
「じゃあ、目的を果たしたら連絡下さい」
そう言ってポケットの中から四角い紙を取り出す。それは、前に由依が見せてくれた、姉と二人で写っている写真の裏だった。ペンで住所と電話番号が記されている。
「でも……これ、大事な写真じゃないの？」
由依はにこっと笑ってみせた。
「思い出は、全部あたしの中にあるんですよ。いいのも悪いのも、全部平等に詰め込みましたから、もうひいきはしません。辛いからって、忘れてしまうような真似は。だとしたらこんなもの、ただの紙ですよ」
郁未には、辛さを乗り越えて再び笑みを取り戻した由依が眩しく見えた。

「あ、それから晴香さんに伝言お願いしますね。ゲームセンターで対戦する約束、忘れないで下さいねって」
「うん、伝えておく」
「それじゃあ、あたし行きます。郁未さん、ありがとうございました！　あたし、郁未さんに逢えてよかったと思ってます。必ず、また逢いましょうねっ！」
由依は搬入庫の奥へ走っていった。郁未はそれを見送ると、地下通路へ戻った。

●●●

ひとりになった時、由依は新たに入ってきたトラックから、大量の人間が出てくるのを見た。誰もがただ、曇った眼を自分の足許に向け、言われるままに歩いていた。
たくさんのＦＡＲＧＯの入信者達が、自分達と同じように適性検査の順番を待っている。
傷付いて、ＦＡＲＧＯの門を叩いた人達の列を見て、その後ろ姿にかつての自分の姿が、そして、ここへ来たばかりの時に同じように並んだであろう、友里の姿がオーバーラップする。
（あたしにできることなんて、きっと何もないんだろうけど……でも）

●●●

今日の午後はＥＬＰＯＤの代わりに安息室で休憩だった。
いつも通りすっきりと眠ると、郁未は食堂へ向かう。カレーライスのいい匂いが食堂に立ち込めている。トレイを取り、いつもの席に座る。
（あれ？）
いつもなら郁未より早く来ているはずの葉子がいなかった。仕方なく食べ始めるが、何故か落ち着かない。それでも半分くらいカレーライスがなくなった頃。
「……あの」
遠慮がちに声をかけられる。郁未が顔を上げると葉子が立っていた。
「葉子さん、今日は遅かったね。もうカレーさめてるよ。今日のカレー、そんなに辛くないんだけど、結構おいしいよ」
「……はい」
「座らないの？」
「はい」

葉子はただ、いつも自分が座る場所に立って、郁未を見ていた。何故か今日の葉子は影が薄いようだ。
「あの、これお返しします」
ことん、と音をたててテーブルに置かれたものは、郁未が前にあげた携帯ゲームだった。
（捨てたって言ってたはずなのに）
「それでは、私はこれで」
葉子はそのまま食堂を出ようとする。
「葉子さん、ごはん食べないの？」
「はい」
力なくうなずくと、そのまま食堂を出て行った。
（どうしたんだろ、今日の葉子さん。元気がなかったみたいだし）
郁未は何気なく携帯ゲームのスイッチを入れた。音が間延びしておかしくなっている。どうやら電池が切れかけているらしい。画面も薄暗くなっているようだ。
つまり、今まで葉子は早々に電池切れになるほど、このゲームをやり込んでいたという訳だ。四苦八苦して馴れないゲームをプレイしている葉子の姿が頭に浮かぶ。
郁未は嬉しくなってしまった。

「ごちそうさま」
郁未は誰もいない葉子の席に向かって挨拶した。

夜になり、地下通路に向かうと晴香は待っていた。
「由依の方はうまくいったの？」
「ええ」
郁未は搬入庫に由依を送っていった時のことを話した。
「あの子にとっては、これでよかったのよ」
「解ってるけど、本当に、こんな結末しかなかったのかな」
沈み込む郁未を晴香が見やる。
「私達がどんなに彼女を哀れんでみても、ただの同情でしかないわ。大切なのはあの子が自分なりにどういう決着をつけたか、よ」
「由依は、最後に笑ってありがとうって言ってくれた……」
晴香がかすかに笑ってみせた。
「だったら、その笑顔を信じてあげてもいいいんじゃない？」
「うん、そうだよね」

「そして、今度は私達が行動を起こす番。とりあえず、今までで解ってることをまとめてみましょうか。例の警戒態勢の件だけど……あの時間違いなく何かが起きていた。そのあたりについては、私よりもあなたの方が詳しいんじゃない？」

郁未は小さくうなずいた。

「信じてくれないかもしれないけど、あの時の警戒態勢は友里さんひとりに対して敷かれたものだったの。彼女を消去する為だけにね」

「女性ひとりを消す為にＦＡＲＧＯ総出で拳銃持って走りまわった訳？」

「でも、現実にＦＡＲＧＯの男達は友里さんに対して異常に脅えていたし、普通じゃない、犠牲者らしい死体も見た。それに友里さんの死に様も。ねえ晴香、私はこう思ってる。女性ひとりにそんなに警戒しなければならないようなことが、ＦＡＲＧＯでは行われているんだ、とね」

晴香は郁未の言葉を真剣に吟味していた。

一度だけ、深い溜息をつく。

「つまり、あなたの方が真実に近い場所にいた、ということね。解ったわ。あなたの言うことを信じる」

「ありがとう」

「でも、それが真実なら……ここで何をしているのよ、良祐」
晴香の顔を一瞬だけだが、濃い影がよぎった。
「りょうすけ、さん？」
晴香が暗い表情でうなずいた。
「そう、私の目的。私がこの施設に来たのは巳間良祐、私の兄を探すこと……ＦＡＲＧＯの一員として働く、ね」
それで初対面の時、誰を探しに来たのか言いたがらなかったのかと、郁未は納得した。
とりあえずＣ棟で晴香が見ていないのなら、Ｂ棟かＡ棟にいる可能性は高い。
「みま、りょうすけさんね。解ったわ。何とか探してみる。そうだ。顔が解るようなもの、ないの？　目立つ特徴とかはある？」
「写真もないし、言葉で聞いてすぐに解るような特徴もないわ。顔に傷やほくろでもあれば楽なんでしょうけど。あなたに教えてあげられる手がかりは名前だけよ」
それは仕方ないだろう。
晴香が心配そうに訊き返す。
「それより、あなたの方はいいの？」
「大丈夫。ＦＡＲＧＯの件を調べていれば、真実に辿り着く見込みがあるから」

「復讐は？」
「真実を知ってから考える」
「手遅れにならないようにね」
「解ってる。じゃあ、また明日」
C棟の方へ歩き出す晴香の後ろ姿に、郁未は声をかけた。
「お兄さんに逢えるといいね」
少しだけ振り向いた顔に、寂しそうな色がよぎる。
「逢えない方が幸せなのかもね……もう、行くわ」
「うん……」
いつものしっかりとした晴香に似合わぬ、どこか煮え切らない口調が郁未は気になった。
気のせいかか細く見える晴香の姿が消えるのを、郁未は見送っていた。

翌朝。少年から巳間良祐がいるのが、B棟のMINMESであることを聞いた郁未は、早々に部屋を出てしまった。
顔を合わせるのが恥ずかしいのだ。今から思えば頭に血が昇っていたとしか思えないことを、昨夜してしまったのだから。

『友里さんを変えたもの……あれこそが、不可視の力よね。不可視の力って何なの』
『それは核心だ。言えないよ』
その言葉を聞いた郁未は、自分のシャツのボタンに手をかけたのだった。
色仕掛け。
そんなことをやったのは、当然生まれて初めてである。
いろいろ話してはくれるものの、それ以上ははっきりと壁を作っている少年から真相を聞き出すのに、それ以外の方法はないと思い込んでしまったのだ。
『僕は言わない。それでよかったら、君の気の済むようにしたらいい』
彼は決して嘘をつけないタイプの人間だ。言えないことは、不自然であっても口を閉ざす。その時点で郁未は少年からその話を聞き出すのを諦めた。
そして今朝、考え直して今度は巳間良祐の居場所を訊いてみたのだった。
『それは核心じゃない。でも、その足がかりになり得るよ』
その言葉の後に、良祐の居場所を付け加えてくれたのだった。
(最初からこうしておけばよかった!)
郁未が顔から火が出る思いで朝の訓練に出かけてしまったのは言うまでもない。

昼食をとりに食堂へ入ると、また葉子は来ていなかった。
しばらく待っていても現れないので、郁未は仕方なく食べ始めてしまう。
（どうしたんだろう）
昨日の葉子はどこか様子が変だった。何か訴えたげなのに、何を話すでもなく、郁未を見ていた。ゲームで遊んでくれていたことに浮かれてしまい、そのことを忘れてしまっていたのだ。
話しておかなければいけないことがあったはずだ。そんな気がする。
なのに、何も話さないまま葉子は行ってしまったのだ。
皿が空になっても、訓練が始まるぎりぎりまで、郁未は待っていた。
それでも葉子は来なかった。
夕食の時間になったら来てくれるだろうか。
そう思いながら郁未は午後の訓練に向かった。

暑い夏の日だった。
相田（あいだ）君の家に遊びに行った日。
部屋の中はひどく暑くて、暑さのせいで私はどうかしていた。

キスだけで終わらせるつもりだった。
でも、キスしたら相田君の唾液を飲んでみたくなった。
舌を入れて、互いの唾液を飲み干しあったら、もう駄目だった。

愛液のついた指を、彼の口に差し入れて舐めてもらった。
直接舐めてほしくなった。
そうしたら、もう入れてもらわずにはいられなかった。

私は、どこかおかしくなっていた。
自分の快楽に呑み込まれたまま、大好きな人を使ってマスターベーションしていただけだった。
相田君は私のことを大切にしてくれていたのに。
何十分の快感の代償に、彼自身を失ってしまったのだ。

午後の訓練を終え、郁未は早々に食堂に向かった。

今日は葉子の好きな海老が入っている。中華風の殻付き海老と豆腐の炒め物だった。海老の殻までぽりぽりと食べてしまっても、葉子は現れない。
ふと思い立ち、郁未はトレイを急いで片付けると個室が並んでいるあたりへ走った。
郁未が地下通路を探した時、たったひとつだけ開かなかったドア。
多分ここが、葉子の部屋だ。軽くドアを叩いたが応答がない。それどころか中に誰かがいる気配さえもなかった。
思い切って、ドアノブを回してみる。
あっさりと回ってしまった。
郁未は小声でおじゃまします、と断わり、足早に入り込んだ。
「あ……っ」
部屋に誰かが住んでいるような様子はなくなっていた。他の無人の部屋と同じく、ただベッドだけが置かれている。葉子が郁未の為に持って来てくれた、小さな救急箱もない。
まるで、最初から誰もいなかったかのようだ。
しかし、そうでないことは郁未には解った。
ベッドのシーツが新品に替えられていたからだ。他の部屋のシーツは一応洗ってはあったものの、しばらく住人がいなかったせいか埃をかぶっていたのに、この部屋だけはそう

ではない。
いなくなった理由はいくつか考えられる。
別棟に移されたとか、長期間隔離されるような訓練に入ったとか、最悪の場合消去された、という可能性もなくはない。
（そう言えば……あの時の葉子さん）
葉子が何か言いたげであった理由はこれかもしれない、と思い至る。あれは、別れを告げていたのだ。
どうして気付けなかったのか、と己の鈍感さが悔やまれる。
しかしこんなところに立っている時間はなかった。晴香に巳間良祐の情報を知らせなければならないのだから。
郁未は無人の部屋を出た。

晴香は先に集合場所に来ていた。
郁未が近くまで来ても晴香が気付く様子はない。唇を噛み締めて、壁の向こうを睨み付けている。しかし、郁未の方向からは晴香の表情はあまりはっきりとは解らない。
「お兄さんの居場所が解ったわ。Ｂ棟ＭＩＮＭＥＳにいるって」

「ありがとう」
晴香は郁未の方を一瞥もせず、そのままB棟の方へ歩き出した。
「私も行くわ」
「側に来ないで！」
追いかけてきた郁未を押しのけるように手で制すると、低い声で宣告する。
「一緒に来たければ好きにしたらいい。けど、私に近寄らないで」
「どうして」
呆然と呟く郁未の顔を見ず、何度か首を振った。
「やっぱり、あなたが先に行きなさい。その方がいいわ」
「うん……」
釈然としないままうなずいた郁未は、壁にもたれて郁未が行くのを待っている晴香の側を通り越した。その時、異臭が鼻をつく。
男の精液の臭い。
やっと晴香の言動の意味が解った。今日も晴香は凌辱を受けたのだ。郁未は表情が変わっていないことを祈りながら、そのまま前を歩いた。
距離をおいて、晴香が後に続く。

郁末が早々にB棟へつながる梯子を昇ると、しばらくして晴香も昇ってきた。
「突っ立ってないで早く行きなさいよ」
郁末は外の気配を窺って、するりと外に出た。
巡回員がいる様子はない。郁末と晴香はMINMESまで黙って歩いた。
「入って」
「でも、安易に行動したら後で……」
「大丈夫よ」
晴香は威圧的に指示した。仕方なく郁末はドアを開け、室内に入る。
まだMINMESの電源は落とされていなかった。まだ人がいるはずだ。しかし郁末は部屋の主に語りかける言葉を持たず、黙ってたたずんでいた。
「何か用かな」
スピーカーから男の声がする。その声を聴いた晴香が郁末の後ろに入ってきた。
「あなたに用よ」
「設定中だ。出て行ってくれないか」
「いつだったらいいの、良祐兄さん」
スピーカーの声が一瞬沈黙する。

「君は何か勘違いしているようだ。その良祐、というのは俺に言っているのか」
「そうよ、良祐」
「残念ながら俺は良祐ではない。まして君の兄なんかじゃない」
「あなたは私の兄よ、良祐」
良祐、と連呼されて、スピーカーの声は苛立った声をたてる。
「違うと言ったら違うんだよ！　何度も言わせるな」
「相変わらずね、良祐」
スピーカーの向こうで男が声を詰まらせている。晴香の言葉を自分で認めたも同然の状況だ。しかし、返事をしたのは『巳間良祐』ではなく、別の声だった。
「いいだろう。兄に逢わせてやろう」
高音域の、どこか金属質な声には、わずかながら悪意からくる嘲笑が感じられた。
「精練の間にて待つぞ」
「あなたには関係ないわ。良祐だけをよこせばいいのよ」
「逢いたがらない兄と仲介してやろうと言うんだ。無下にするんじゃない」
暗に、自分抜きでは良祐と逢わせはしない、というニュアンスを匂わせる。
「なら、ここに出てきなさいよ！」

「ここは落ち着いて話せる場所ではない。あそこならじっくりと話ができる」
相手の話はそこで終わりだった。
晴香は不快そうな顔で条件を呑んだ。
「解ったわ。先に行ってるわよ、良祐」
それだけ言うと晴香は部屋を出て行った。慌てて郁未も後を追う。早足で歩いている晴香に追いついたのは、精練の部屋の前だった。
「来たの、あなた」
「だって、私は真実を知りたいから」
「この部屋が何だか、ちゃんと知っているの？」
由依が凌辱を受け、その姉の友里が悲惨な死を迎えた場所。そして多分今日、晴香も無事で済むとは思えなかった。あの男が『じっくりと話ができる』と言ったのにそういう意味が含まれていることは、郁未にも容易に想像がついた。
「凄い覚悟。どうなっても知らないから」
二人が部屋に入ると間もなくドアが開いた。ＦＡＲＧＯ内部で見た他の男と同じように黒い服を着た男達だ。ロン毛でやせた男と、後ろで髪を縛った男だ。
ロン毛の方が薄く笑った。

「ほう……本当にいた」
「本当にいたとは何よ」
この男相手に話し合いなど決して通用しない。郁未は男の笑いを見た瞬間悟った。しかし晴香はその後ろにいた男のことをじっと見ていた。晴香と同じ、跳ねっ返りな印象の青年。彼が巳間良祐なのだ。
「良祐……」
「おい、お前の名を呼んでるぜ。おまえのことなのか？」
「……違うさ」
無理に表情を押し殺したような表情で首を振る。
「巳間良祐！　私を眼の前にしてよくそんなことが言えたものね」
「同姓同名じゃないか。本当にお前じゃないんだな？」
「ああ」
「じゃあ、この虚言症の女を俺が手籠めにしようと構わない、という訳だ」
巳間良祐は不快そうに黙っていた。もうひとりの男は笑みを消さず、訊き直した。
「返事はどうした？」
「……構わない」

「巳間、その女を押え込んでおけ」
晴香が兄を呼ぶ声は、施錠音でかき消えた。男は鍵をかけた後、手馴れた様子で晴香を捕まえ、床に押し倒すと両脚を掴んで股間に顔を近づけたところだった。
「済まない……」
良祐は一言郁未に呟くと、郁未を羽交い締めにした。
「嫌ぁっ！　臭いを嗅がないでっ」
晴香を傷付ける為だろう。男は意図的に音をたてて臭いを嗅いでみせた。
「なるほどなあ……こいつは嫌がる訳だぜ。おい、巳間。その女をこっちに持ってこい」
郁未は晴香の方へ引きずられていった。郁未は男を睨み付けて弾劾した。
「あなたたち、こんなことしてどうなると思ってるのっ⁉」
「はあ？　今更何を言うやら。ん、まさかそいつ……」
良祐が郁未の袖をめくった。
「こいつ、Ａだぞ。まずいんじゃないのか、高槻（たかつき）」
高槻と呼ばれた男は少し考え込むと、薄い唇を笑みの形に歪ませた。
「それならそれで面白い。Ｃｌａｓｓ Ａの高級階級としての扱いに疑問を抱いていたところだ。こういう機会もあってしかるべきだろう」

「俺には興味本位の建前にしか聞こえないがな」
「どちらにしても理由はつく。構うか。さあ、その女を持って来い」
郁未は脚を開かされた晴香の前に引きずっていかれた。
「この友達のあそこを綺麗に舐めあげてやれ。いいか、高級階級のお嬢さん。こっちの子はなあ、Ｃｌａｓｓ Ｃなんととんでもない場所にいるんだ。シャワーもなければトイレもない。それでこのざまだ」
高槻は郁未の髪を摑み、乱暴に晴香の股間に持ってくる。臭いを嗅がないで、と泣きそうな声で晴香が叫んだが、息を止めるには遅かった。郁未はひどい臭いに胃液が喉まで上がってくるのをこらえた。
「かわいそうだろう？　だから特別にお前の舌で綺麗にしてやることを許可してやる」
「できるわけないでしょ」
「そうか」
高槻が手を大きく振り上げるのが見えた。殴られる、と覚悟したが、殴られたのは郁未ではなく晴香の方だった。容赦ない一撃が顔面を直撃すると、晴香が力なく呻いた。
「もう一度訊くぞ。できないのか」
郁未は寒気がした。この男は多分郁未が嫌だと言えば、見せしめの為に晴香が気絶して

も殴り続けるに違いない。そして晴香が死んだとしても何も感じないのだ。
自分が殴られるならそれでもいい。しかし、晴香をそんな目に遭わせることはできなかった。郁未にはうなずく以外になかった。
「さすが友達だな。まさかそんなところまで舌で綺麗にしてやれるとは。さあ、ぺろぺろ舐めて綺麗にしてやるんだな」
郁未は晴香のショーツの、そこを覆う部分に手をかけてずらした。舌を近づけ、機械的に上下に這わせる。晴香にこびり付いた汗や血、男の精液が垢に混ざっている。それを呑み下した。
「もっと綺麗にしてやれ。みっつの穴全部だ」
「……や、やめてっ」
割れ目の間に舌を差し込み、尿道口をつつく。晴香は身をよじった。
「肛門の方はどうした」
「……いや、そこだけはやめて」
自分の一番汚い部分だけは舐められたくない。その気持ちは郁未にも痛いほど解る。しかし今は高槻の言う通りにするしかなかった。
肛門に舌をあてがい、汚れを落とす。

高槻は屈辱に顔を歪ませる晴香を、笑いながら見下ろした。
「どんな気分だ？　友達に一番汚いところをぺろぺろ舐めてもらってるのは」
「い、郁未、もうやめ……」
「まだだ。今度は男の精液で汚れきったあそこの穴を、奥まで綺麗にしてやるんだ」
もう晴香は言葉もなかった。
郁未は指でその部分を開き、奥へと舌を伸ばす。その中で舌を動かしていると、晴香が敏感に反応し始めた。郁未の唾液以外のものが奥からしたたってくる。それでも郁未は舐め続けた。高槻が制止の命令を出すまで。
郁未はやっと晴香の脚の間から顔を離した。顎がひどくだるい。顔の下半分がべとべとに濡れている。
「ようやく準備が整ったという訳だ」
高槻が晴香の脚を解放し、代わりにその上に覆いかぶさった。
「準備、って何なの……」
「お前が汚くて入れられないあそこを、わざわざ綺麗にしてくれたんだろうが」
郁未は自分のしたことを後悔した。晴香の為によかれと思ってしたことで、結局晴香はこの下劣な男に凌辱を受けてしまうことになったのだ。

高槻がファスナーを開けて取り出した性器を、晴香のそれに擦り付ける。充分に濡れて暖かい感触に飽きると、亀頭をつぷ、と押し入れた。
「見ろ、先の部分が入ったぞ」
高槻は肉体だけでなく、言葉でも晴香をいたぶるのを楽しんでいるように見えた。
「だがまだまだだ。ずぶずぶと入ってゆくぞ……。俺のように初めて逢った男のモノを入れられてしまっていいのか？　ほうら、奥まで入った」
高槻は饒舌だった。その言葉は明らかに郁未達にそれを聴かせることによって、晴香に屈辱を与える為のものだった。熱に浮かれたかのように、高槻の言葉は止まらない。
「俺とお前の腰が密着しているぞ。俺のモノはどこへ行った？　そうか、お前の膣の中かっ！　あんなでかいものがお前の中に隠れていたのかあっ！　ぶっすりと刺さってるぞ……お前はそれでいいのかっ？　初めて逢ったような男に入れられてしまっていいのかっ」
高槻の言葉は譫言のように続く。
「お前は俺のことが好きなのか⁉　違うだろっ。殴られたりして嫌いだろっ？　俺のような下種な男にやられて悔しいだろ！　惨めだろっ⁉」
高槻が激しく腰を動かし始めた。
湿った音が辺りに響き渡る。郁未は耳を塞ぎたくなった。この常軌を逸した男に晴香は



一方的に貪り尽くされている事実が苦しかった。
「ぐわああっ、出るうっ」
「嫌ぁっ……中では出さ、ないで……」
「ならキスしろぉっ！」
高槻は腰を動かしながらも晴香の体を抱き寄せた。晴香は眼の前に迫った高槻の唇に自分のそれを重ねる。
「そんな小娘のようなキスで許してもらえると思ってるのかっ！」
晴香は今度は唇を開いたまま舌を差し入れ、高槻の舌と絡め合わせた。頬の中で舌が動いているのが、押さえられている郁未にもよく見えた。その間も高槻は腰を動かすスピードは変わらないままだ。
高槻が何か言った。晴香の唇が重なっていて何を言ったのかはっきりとは解らない。しかし、その恍惚の表情と腰の動きが止まったことから、何が起こったのかはすぐに解った。
「気持ちよすぎて中に出しちまったよ」
うっとうしそうに晴香の体を押しのける。その言葉を聞いて晴香は泣き出した。
郁未は結局最後まで晴香が犯されるのを見ているしかなかった。この兄と同じように。
良祐は妹がこんな酷いやり方で高槻の玩具にされても何も言わない。しかし、平気ではな

いのは解った。郁未の腕はきつく握られ過ぎて既に感覚もなくなっていたからだ。
高槻は今度は良祐の方を見た。
「巳間、お前もやればいい。そっちのお嬢様をな」
一瞬、郁未の体は強張った。しかし良祐は無表情に首を振る。
「興味ない」
「興味ないだぁ？　お前はインポか……ならいい。またそこで見ていたらいい。眼に焼き付けておいて、夜のオカズにでもすればいい」
音の外れた嘲笑を放ちながら、高槻は郁未に腕を伸ばした。
郁未は嫌悪と軽蔑で刺し殺せそうなほど鋭い視線で高槻を睨む。
「何だその眼は……信者は信者らしく従順にしていろおっ！」
「ぐうっ！」
郁未の腹に高槻の右の爪先がめり込んでいた。
痛みのあまり、郁未の意識は半ば朦朧となりかけていた。息もまともにできない。
どおん、と大きな音が響いた。
（私……何を、されたの）
もはや痛みも感じないのか、そう思った時、そこにいないはずの人間の声が響いた。

『その子に手を出す必要はないはずだ。その子はＣｌａｓｓ Ａだ。精練の必要はないはずだろう』
『その通りだ』
高槻が悔しそうに息を呑むのが聴こえる。郁未は体が宙に浮くのを感じた。
『連れて帰るぞ』
見えないが危なげなく抱き上げられている。郁未は安心のせいか意識が薄れてきた。
『しっかりしつけておけっ！』
最後に、どこか遠くから高槻の声が響いたような気がした。

第五章

気が付くと郁未は自分の部屋のベッドに横たわっていた。
側で少年が郁未の顔を見つめている。ずっと見ていてくれていたらしい。
「シャワーを浴びてきなよ」
郁未は少年の言う通りにユニットバスへ向かった。確かに晴香から出た液体や自分の唾液、それ以上に体中にべたつく脂汗を流したかった。
服を脱いで脱衣籠に入れると、郁未はシャワーのコックをひねった。
暖かい湯が自分の皮膚から少しずつではあるが疲れも一緒に落としてくれているようだった。体を点検するとやはり蹴られた腹部と、感覚がなくなるほどに強く握られた腕には、くっきりと青黒い痣が現れていた。
（そう言えば……晴香はどうしたんだろう）
意識が戻ったばかりの郁未は、やっと晴香のことを思い出した。
郁未が連れ去られた後、あの高槻が晴香を何事もなく解放しているとは思えなかった。郁未の代わりに再び犯され、自分の思惑を邪魔された腹立ちをぶつけられているかもしれない。
しかも晴香にはシャワーを浴びる権利さえない。あの凌辱の痕をそのまま体に残して、これからも彼女は生活していかなければならないのだ。

晴香の、あの部分の臭いを思い出す。とても人間が耐えられるものではなかった。それを耐えながら晴香は生活しているのだ。
(晴香は、強い。それに較べて私は)
晴香を助けてやることもできなかった。ただ見ていただけ。それはかえって晴香の足を引っ張り、羞恥心を煽っただけではないのか。そう思うとのこのこついて行った自分の軽率さが呪わしくてならない。
「……私は、弱くて卑怯。私をここに導いたのは一体何だったの。気の迷い？　ただの感傷？　そんなものの為に……」
「大丈夫、君の強さだよ」
少年が横開きの扉を開けて立っていた。
郁未は茫然とシャワーの湯の中で少年を見つめ返していた。
少年が郁未に慌ててほしかったのだと解る。いつものように慌てて、シャワーを浴びている女性のところへ乱入した非常識な自分のことをなじって、その反動で元気を取り戻してほしかったのだ。
郁未は泣いていた。
少年は、優しかった。あの悪夢のような時間は確かに郁未を傷付けていた。だからこそ、

人間の温かさに触れていたかった。ただ、溺れるように。
郁未は濡れた体のまま、少年の体にしがみついた。
「何も言わないよ、僕は」
「なんにも、言わなくていいから……だから」
その行為の間、本当に何も言葉は交わされなかった。
さしたる前戯もないままの挿入。まだ体自体は男性のそれを受け入れるほどには開いていなかった。
それでも、少しずつではあるが中から潤って、動くのに支障はなくなっていく。動けるのを確認してから少年は腰を使い始めた。くちゅっ、くちゅっと音がたち始める。
「……はあ……んっ」
心地よかった。体が感じている快感だけでなく、少年から伝わってくる温もりも、今まで少年がずっと郁未を気遣ってくれていたその気持ちも、全て。
少年は最後まで何も話さなかった。
それでもよかった。ずっとこうしていたかった。

「おはよう」

翌朝には郁未はかなり落ち着いていた。かすかに笑って挨拶を返す。
「ねえ、今日の天気は？」
「そうだね、きっといい天気だよ」
自分の中にある、温かな感情。過酷な状況の中でただ安らぎを求めているのだろうか、と思ってみたが、そうではない答えが郁未の中には既にあった。
「気をつけることだね」
少年の口調で、郁未の思考は中断した。
「巳間だけならよかったんだ。だけど高槻はよくないよ」
「どうよくないの？」
「あいつは危険なんだ。もうあの地下通路は使わない方がいい」
郁未は口ごもる。
「で、でもあれを使わないと別棟には行けないわ……」
「行かない方がいい」
「真実に近づけなくなる」
「真実は近くにあるよ」
思いがけない言葉に、郁未は一瞬意味が摑めなかった。

「ヒントだよ」
「じゃあ、それって……A棟に真実はあるってこと？」
「これはまだ早かったかな」
結局少年はその意味を教えてくれなかった。郁未もまた深く訊かないまま、朝の訓練に向かった。
しかし、晴香の件もある。地下通路にはあと数回は出入りする必要があるだろう。

『郁未、ただいま』
ただいまなんて言葉は、ずっと聴きなれないものだったから、私は変な顔をしていたかもしれなかった。
『……お、おかえり』
お母さんに子供みたいに抱きついて、やっと痛感した。
お母さんが、帰ってきたんだって。
もうひとりなんかじゃない。ずっとお母さんが一緒にいる。
今までお母さんがいなかったことで、生きる意味さえ失っていたんだということを、お

母さんが戻ってきて初めて解った。

食堂。葉子がいなくなって、ひどくがらんとして見える。
誰もいない食堂というのが、こんなに寂しいものだったのを郁未は知らなかった。
多分、もう葉子は戻ってこない。そんな気がした。
いい加減に食事を終え、午後の訓練に向かった。

あなたはいやらしい女。もうひとりの自分が宣告する。
どうしてそんなに男の人の性器が好きなの？　どうして自分の性器を見せつけたいの。
そんなに我慢できないの？　なら、自分で処理すればいいのよ。
みんなそうしてる。

手伝ってあげるわ。
さあ、どんなのがいい？　願えばいいの、最もいやらしいことを。
彼女の声が呪文であったかのように、椅子に座ったまま裸で縛られていた。
自分のことが好き。整った顔も、大きな眼も、さらさらの髪も。

鏡を舐められるくらい好き。だからもうひとりの自分がいやらしいことしてくれる、して欲しいけど。
でも、もう私は望まない。望んでしまったら今まで通り自制の効かない女のまま。
私は縄を解いた。

夕方、たったひとりの食堂で食事をしながら、郁未は考えていた。
明日から自分の部屋で食べよう。少年ももしかしたらいるかもしれない。そうしたら一緒に食べられるし、もし誰もいなくてもこんな寂しい場所で食べるよりずっとましだ。
夜、少年に逢ったらそう言ってみよう。
とりあえず郁未はいつもの通り地下通路に向かう。

「あれ?」
気が付いたら、眼の前に壁があった。個室の側にある突き当たりの場所だ。ぼうっと歩いていていて気が付かないうちに通り過ぎたらしい。
郁未は少し戻って地下通路の方へ向かった。

約束の時間になっても、晴香は来なかった。
無人の通路で郁未はただ立ち尽くすことになった。時間にして約一時間ほどは待っていただろうか。昨日の件の後だ。さすがに今日は来ないかもしれないと思い、そのまま戻ろうとした時、Ｂ棟の方から足音が聴こえた。
もうあの地下通路は使わない方がいい。少年はそう言っていた。
彼の懸念通り高槻がここへ来たのだとしたら、必ず昨夜の続きがこの場所で展開されるはずだった。しかも、制止してくれる人間は誰もいないまま。
逃げようと思ったが、既に足音はすぐ側まで近付いている。
郁未は反射的に座り込んでいた。
「君か……」
そこにいたのは高槻ではなく、巳間良祐、晴香の兄だった。
郁未はほうっと息をついた。
「晴香は？」
「今日は来ないみたい」
「じゃあ、伝えてほしいことがある」
良祐がわずかに眼を伏せた。

「ここから逃がしてやる。そうだな、明日の同じ時間にここに晴香と来てくれ」
「あなたは、晴香と逃げてあげないの？」
「俺は、ここに残る」
「妹があんな目に遭わされても？」
良祐はうなずいた。
「俺には全てを最後まで見届ける義務がある。FARGOがしてきたことが正しいのかそうでないのかを。途中で逃げることはできない。君がここにいる目的があるのと同じように、俺にも目的がある」
「晴香を、妹を見捨ててまでその目的にしがみつくの？」
「……そうだ」
一瞬間を置いて答えたが、その声にためらいはなかった。
郁未はたたみかけた。
「私はFARGOに母を殺された。それなのに何も知らないままで帰れって言うの⁉」
「そうだ」
「そんなので納得なんかできない。私も晴香も」
「納得する必要はない。すぐに忘れろ。それが自分達の為だ」

良祐はポケットから何かを取り出して郁末に渡した。
「もしかしたら俺は動けなくなるかもしれない。その時はこれを使って自力で脱出してくれ。早いうちに脱出しないと危険だ……晴香も君も」
メタリックシルバーのカードだった。多少古いものらしく、手垢が付いている。スタッフの間で使い回しているのかもしれない。良祐が共通パスだと付け加えた。
「最後に、これは忠告だ。同居人には気を付けろ。早いうちに外へ逃げることだ」
そう告げるなり、良祐はそのまま歩き去ってしまった。
同居人には気を付けろ。
脳裏にその言葉だけがわんわんと響いていた。

「おかえり。浮かない顔してるね」
「そんなこと、ないけど……」
良祐の言葉を少年に伝える気にはなれなかった。
少年のことを好きになってしまっている自分に気が付いていても、まだ彼には謎が多すぎた。しかし、少年の正体を知っているらしい良祐も、肝心の真実については口を閉ざしている。どちらも完全に信用しきってしまうことはできないのだ。

「地下通路に行ってきたのかい」
「うん」
「本当に、やめておいた方がいいよ」
「だけど、晴香に逢えなくなる……」
「今日はその人に逢えたのかい」
郁未は首を振った。
「だけど、晴香のお兄さん……巳間さんって人には逢えた。私と晴香のこと、逃がしてやるって」
「で、逃げるの？」
「私は逃げない。多分、晴香も逃げない、と思う」
「でもね、巳間が手伝ってくれるのなら本当に逃げられるよ」
「逃げろって言いたいの？」
「好きにすればいいよ。ただ、選択肢のひとつとして有効だってことさ」
郁未は黙ってうなずいてみせた。そして突然あることを思い出した。
「ねえ、明日からここでごはん食べるから」
「ちゃんとした食堂があるだろう？」

「駄目？」
「そういうのじゃなくて、持ってくる途中でごはん、冷めちゃうだろ」
「猫舌だからちょうどいいのよ」
もちろん嘘だった。しかし、伸びきってまずい麺類を食べるとしても、たったひとりで静まり返った食堂にいるよりずっとましだった。
「ふうん、そうなんだ」
少年は気にした風もなく相槌をうった。
郁未は少年を見つめる。
「今度からは、さ……一緒に食べよう」
「そうだね。じゃあ、明日から」
郁未は嬉しそうに笑った。

朝になると、いつものように少年が起こしてくれる。そうやって目醒められるのが、郁未は幸せだった。
今日から少年と一緒にごはんを食べる。そう考えただけで少しほっとするようだ。
「行ってきます」

郁未はＭＩＮＭＥＳに向かった。

花をプレゼントしよう。
河原で摘んだ、持ちきれないくらいの花を抱えて帰ろう。
部屋中を花で埋め尽くして、お母さんをびっくりさせよう。

今日は母の日だから。お母さんに感謝の気持ち。
きっと花を見るたびにお母さんは今日のことを思い出す。
今日はかけがえのない日になる。
これからも側にいてね。お母さんの為に私頑張るから。

赤く染まったお母さんが動かない。
私の腕から花が、散らばった……

昼に公言通り部屋へトレイを持って現れた郁未を見て、少年は驚いたのと呆れたのとが混ざったような笑顔を向けた。

「本当に持って来たんだねえ」
「そうよ」
郁未はベッドに腰かけ、膝の上にトレイを置いた。いただきます、と呟いてから、散らし寿司を食べ始める。
しばらくして、少年の食べているものを見て、郁未は怪訝な顔をした。
「何、それ」
「昼ご飯」
それは歯磨き粉のチューブに似ていた。少年はそこに口を付け、中身を絞り出しているのだ。どう考えても『昼ご飯』という名前にはふさわしくない代物だ。
「そんなのでいいの？」
「食にはあまり欲がないんだ。栄養が摂取できればなんだっていいよ」
「でも、行儀が悪い。ちゃんとお皿に出してスプーンで食べなさいよ。あなたのスプーンも持って来てあげるから。それと、食卓がいるわね。あなたが用意してくれない？」
少年はぎょっとしたような顔をして郁未を見た。
「そういうのはここで探すのは難しいんだよ」
「でも、このままじゃ行儀が悪いわ」

もちろん、行儀など郁未にはどうでもよかった。ただちゃんとした食卓を囲んでみたかったのだ。少年の食べているものが食卓、というイメージにはそぐわないが、この際贅沢は言っていられない。

「どこかにあるかなあ……」

少年は困惑しながらも探してくれる気になったらしい。

もうそろそろ昼食の時間は終わる。郁未は少年に手を振り、空になったトレイを持って部屋を出て行った。

かちゃん

プラスチックのトレイの上で、皿が踊った。

「おっかしいなあ」

郁未はいつの間にか袋小路に入っていた。眼の前にある壁にトレイがぶつかって音を立てたのだ。そのショックで箸が転がり落ちる。

ついさっき、もっと先の方にあるＥＬＰＯＤの札の側を通ったはずだ。それなのに、自分の部屋の側にある袋小路にいるのは何故だろう。気のせいというには、あまりに距離が長すぎる。

しかし、考え込んでみても結果は出なかった。

郁未は食堂に入ってトレイを返すと、早足でＥＬＰＯＤに向かった。

ＥＬＰＯＤで今日は安息室へ行くようにと言われる。

郁未はあの、夢も見ないで心地よく休めるベッドで眠ると、夕食を取りに食堂へ入った。メニューはミートローフだった。ついでに少年が使う為の皿とスプーンもトレイに乗せる。ダイニングテーブルが欲しい、などとわがままを言ってしまったが、結局どうなっただろう。もし入手できていなくても、文句などは決して言うまいと思いながら、郁未はドアを開けた。

「わぁ……」

部屋の真ん中に木製のテーブルがあった。そして椅子も二脚。

「凄い。これどうしたの？」

テーブルにトレイを置いた郁未は、少年の返事を聞く前に全て理解した。持って来た冷たいお茶が、斜めに傾いでいる。よく見るとテーブルも椅子も、どれひとつとして水平なものはなかった。当然座る部分にやすりもかけていない。釘を打ち損ねているところさえあった。

言うまでもなく、少年の手作りなのだ。
座っても平気なのかと郁未は不安になってしまう。
「どう?」
得意そうに少年が感想を求める。
「うん……とても素敵」
「いやあ、気に入ってくれてよかったよ。君の言うようなものはなかったから、自分で作ったんだ。本当に大変だったんだよ」
「ありがとう……」
「ちょっと雑だけどね」
郁未達はテーブルについた。椅子がささくれだっていて、郁未のスカートが引っかかるが、あえて何も言わなかった。少年は皿にチューブからチョコレートペーストを絞り出してスプーンを入れているが、白い皿に茶色の物体が便器を思い起こさせて見栄えが悪い。
郁未はそれでも幸せそうにミートローフを食べ始めた。
しかし突然ばきっという破壊音と共に、郁未の尻に痛みが走った。案の定椅子が壊れたのだ。
「うわ、郁未が消えた!」

「違う！　椅子が壊れて落ちたのよ」
郁未は腰をさすりながら立ち上がった。
結局食事は昼と同じようにベッドの上でとることになった。
「あははは、また捨ててこようっと」
ひどく疲れる食事を終え、郁未はトレイを返しに行った。

トレイを戻し、郁未はいつものように地下通路へ行った。
誰もいなかった。
晴香が来ていてくれればいい。そうでなければ良祐の伝言を話せない。もちろんあの件で晴香が郁未に逢いたがらない可能性は高いが、どんなに邪険にされても逢う必要があるのだ。
ほんの少し待っていると晴香が現れた。郁未の顔を見て、明らかに強張った表情を浮かべる。やはり晴香は郁未に逢いたくなかったのだ。
晴香は無言のまま郁未の側を通り過ぎようとする。
郁未は声をあげた。
「お兄さんのところに行くんでしょう？」

「あなたには関係ないわ」
「あるわよ。あなたのお兄さんから伝言があるんだから」
晴香の刺すような視線が郁未に向いた。郁未はいたたまれなさを感じながらも伝言内容を伝える。
「私達を逃がしてくれる、って。だから今日ここに良祐さんは来るはずよ」
「本当なのね」
郁未がうなずくと、晴香は一瞬瞼を閉じた。
「なら、待つわ」
晴香は郁未の側に戻って来ると、壁にもたれた。

小一時間も待っただろうか。さすがに晴香が怪訝そうな顔を郁未に向ける。
「本当に来るの?」
「そう言ってたけど、でも……『もしかしたら動けなくなるかもしれない』って。その場合は二人で逃げてくれって言ってた」
「どういうこと……?」
郁未は困惑した表情で首を振る。

「忙しくて、なのかな……あ」
郁未はひとつの可能性に思い至った。
少年が言っていた言葉が頭をよぎる。
『あいつは危険だ』
『巳間だけならよかったんだ。だけど高槻はよくないよ』
郁未は顔を強張らせた。
「高槻にお兄さんの行動がばれたのかもしれない！」
その言葉を聞くと、晴香は弾かれたようにB棟に向かって走り出した。
「晴香っ！　あなたも危ないのよ⁉」
「今以上の過酷なんてありはしないわ！　もうあなたには関係ない。ついてこないで」
遠くで梯子を昇る音が聴こえた。そして、鉄板が開き、閉じる音。
郁未はショックのあまり立ち尽くしていた。
(関係ないことなんてないのに……晴香、いつから私達は仲間じゃなくなったの？)
しかし晴香かどう思っていても、郁未は晴香のことを仲間だと思っている。だからこそ助けたいのだ。郁未も晴香の後を追った。

●●●

「今度は呼んでもいないのに逢いに来てくれたのか」
待ち構えていたのだ。
高槻の足元には、両腕両足を縄で縛られた良祐が転がっていた。床に血溜りができており、その中に頬を浸すように横たえられていた。明らかに拷問を受けたとしか思えない。
晴香は注意深く訊いた。
「何故そんな目に遭っているの」
「こいつはなあ、裏切り者だからだ。我々にも守らなければならない規律がたくさんある。そのいくつかを同時に破った……。信者との密通、肉親との会合、脱出手引きだ」
「……逃げ、ろ……はるか」
かすれた声が晴香の耳に入る。
高槻が良祐の顔を蹴った。
「だがこいつは、誰と密通していたのか絶対喋ろうとしなかった。そこで、こうしていれば必ず密通者は現れると踏んでいたんだが、そこに飛び込んできたのがお前だ」
「違う……そいつは関係ない」

頑なに晴香を知らないと言い続ける良祐の言葉を、泣きながら晴香が遮った。
「……どうして、兄妹が逢ったらいけないのっ⁉　どうして、私を妹だと認めたらいけないのっ！」
悲痛な叫びだった。
しかし、その言葉は兄の死刑執行命令となった。高槻は薄く笑う。
「罪の証言は成された。已間、俺を恨むなよ」
「……どうなるの、良祐」
「当然、消去だ。ここの戒律だ。何者も逆らえない」
「嘘……だ」
高槻は後ろの方へ合図した。
後ろに立っているショートヘアの女がうなずくと、良祐の方を見る。
「ぐわあああああっ！」
良祐が顔をひきつらせて叫びながら身悶え続けた。
「やめてぇっ！　良祐を助けてっ」
高槻が冷たい眼で晴香を見下ろした。
「助けたいか」

「当然よ、兄なんだから」
「なら、俺を感動させてみればいい。こいつの処分は俺に任されている。俺さえ許せば解放してやってもいいぞ」
何か含むところがある笑みを浮かべ、晴香をねっとりと見る。
「俺だって人の子だ。兄妹愛を見せられたら情にほだされてしまうかもしれないな」
普段の晴香なら、高槻の薄っぺらい言葉をまともに信じたりはしなかっただろう。
「……どうしたらいいの」
「大好きな兄貴のブツを取り出して、愛おしくしゃぶってみせてくれ。それが唯一俺を感動させる兄妹愛だ。できないならこいつは即刻消去だ」
「……そうすれば、良祐を助けてくれるのね」
高槻は返事の代わりに良祐の体を壁にもたれさせた。
晴香はズボンのファスナーを下ろし、トランクスを下げると兄の性器を取り出した。それは幼い頃一緒に入浴した時に見た形とはかけ離れていた。
「馬鹿なことをするな、晴香……」
晴香は黙って良祐のそれに、ゆっくりと舌を這わせた。その刺激で硬く、大きくなってゆく。高槻は無情にも晴香に命令する。

「そのまま唇と舌で奉仕してやるんだな」
晴香はただ、高槻の言う通りにするしかなかった。兄が助かるのなら、と、それだけしか考えないようにしていた。
良祐がその刺激に耐えていると、何を思ったか高槻が制止した。
「こいつだって口だけでいかされたら寂しいだろう。あそこでいかせてやれよ」
「もう……もう、いい。やめろ、晴香」
良祐は自分を救う為にどんな屈辱的なこともしようとする妹が健気で、そして痛々しくてたまらなかった。
しかし晴香はショーツを脱ぎ、壁にもたれた良祐の腰を跨いだ。決して眼を合わせようとしないまま、片手で良祐の性器を固定し、自分の中に沈めてゆく。
ぐちゅっ、ぐちゅっと淫靡な音が響いた。
「一生懸命腰を動かして、お互い気持ちよくなるんだ」
晴香は不自然な格好で、必死に腰を動かし始める。
「どうだ、気持ちいいか。お互いが気持ちよくなければ愛とは呼べないな」
「……気持ち、いい」
悔しさで顔を歪ませながらそう答えた。高槻は更に追いつめる。

「そうか、なら兄貴にも訊いてみろ。気持ちいいですか、ってな」
涙を浮かべながら、晴香は口を開いた。
「りょ、良祐……気持ちいい……？　気持ちいいって答えてよっ、でないと！」
「もういいんだ、晴香！」
良祐の声は切迫していた。
このまま、いじらしい妹の中で果ててしまうことだけはできない。それだけは決して踏み越えてはならない一線だった。
「高槻いいいっ！　こんなことをさせて楽しむなんて、お前は人間じゃないっ。この、欠陥だらけの下種野郎があっ！」
「良祐ぇっ！　何言ってるのよおっ。気持ちいいって言えばいいのよっ！　晴香とセックスしてるのよっ？　それだけを考えてよっ」
しかし良祐はもう叫ぶのをやめなかった。
「この下種があっ！　貴様など誰が愛してくれるんだっ。兄を想ってくれるやさしい妹のいる俺がうらやましいのか！　嫌われ者。お前など愛する人間はこの世にいるものか！」
高槻の眼の色が変わった。
「黙れえっ！　だまれだまれだまれだまれっ。お前なんか、お前なんか……っ！　B－58っ、

もうこいつは殺せえええっ！」
めきっ、と聴き馴れない音が晴香の耳に届いた。
良祐の鼻から、大量の血が流れ出る。眼窩から、口から、耳から、溢れ出る血が、晴香の顔を赤く濡らしてゆく。
「……良祐？」
何が起こったのか理解できず、ただ手で血を拭う晴香を、先ほどとは別人のように冷静さを取り戻した高槻が見下している。
「死に急ぎやがった」
わずかに、良祐の体が動いた。
残っている最後の力で縄を引きちぎり、強く晴香を抱き締める。健気な妹に、今まで伝えられなかった兄としての愛を与えるように。
そして、永遠に動きを止めた。

●●●

郁未がＢ棟ＭＩＮＭＥＳに辿り着いた時、そこはもぬけの殻だった。だとしたら、晴香

がいるのは精練の間しか考えられない。

郁未は精練の間に走った。

ドアに手をかけると案の定鍵がかかっていた。

晴香達はやはりこの中にいるのだ。そして高槻も。辿り着くのが遅すぎたことを郁未は後悔した。

（そうだ。あいつなら！）

前に郁未のことを助けてくれた少年のことを思い出す。彼なら助けてくれるかもしれない。郁未は必死でA棟に戻ったのだった。

第六章

結局、少年は晴香達を助けてはくれなかった。
郁未本人に危険が及ばないなら一切手を出すことはできない。それをしてしまったら少年が懲罰を受けるのだった。もちろん郁未も高槻の言動を見てしまった後だけに、それが言い逃れでないのはすぐに解った。
「結果を待つしかないよ。結果が出てから対策を考える」
「……そうね」
「手遅れでないといいけどね」
とりあえず郁未は眠ることにした。
晴香を助けるのに間に合うなら、その為に体力を温存しておかなければならない。しかし気になってまんじりともしないまま、郁未はベッドに転がっていた。

「眼が、兎みたいだ」
一睡もできなかったのだから仕方ないだろう。
郁未は何とかベッドから抜け出し、部屋から出て行った。体調が悪くても訓練に行かなくなれば怪しまれる可能性がある。嫌でも行かなければならない。
歩きながら、郁未は浮かない顔で考えていた。

（真実への手がかりを掴むたびに、悲劇もついてくる。私が頑張れば頑張るほど、周りが不幸になってゆくみたい……）

郁未はＭＩＮＭＥＳのドアを開けた。

「おはよう、いくみ」

お母さんが微笑んでる。

ねえ、いろいろなことがあったのよ。お母さんの後を追って、ＦＡＲＧＯにやってきたら、悲しいことがいっぱいあった。

「悪い夢を見たのね」

夢なんかじゃない。あれは現実だった。

でも、自分の手を見ると、紅葉みたいに小さかった。

「今日も天気がいいわよ。今日はずうっとお母さんと遊ぼうか」

お母さんが笑ってる。

でも、胸が痛いの。

「さあ、おっきしよう」

ほんとはもう、お母さんがいないって知ってるから。

昼食をトレイに乗せて部屋へ戻る。

少年は相変わらずチューブから中身を絞り出して食べている。今日はピンクだった。苺味なのかもしれない。

郁未は何も食べたくなかったが、付け合わせのポテトサラダとお茶だけを何とか口に入れただけで、食事を切り上げてしまった。

持って来た時とほとんど重さの変わらないトレイを持って、部屋を出て行った。

「いやらしい郁未、あなたは自慰にすら飽きていたのよね。この世界では望めば全て叶う。あなたが憧れていたひと、彼女をあげるわ……」

憧れていたひと？　誰なのそれ。

「綺麗なひと、大人のひと」

『私』の代わりに現れたのは、見憶えのあるひとだった。

長い髪、人形めいた美貌に浮かぶ意志の強さ。静かな話し声。

それは、葉子さんだった。

そうだったんだ。こういうことだったの。
私がただの憧れだと想っていたのは、葉子さんを自分の思い通りにしてみたいという欲望だった。唇を重ねて唾液を味わい、形のよい胸を揉みしだいてみたかった。股間から流れ出るぬるぬるとした液体の味に狂ってみたかった。いつもからは想像できない淫らな声を出して快楽に溺れる葉子さんが見たかった。そういうこと。
夢の中なら誰も傷付かない。ここにいる葉子さんは幻、私しかいない世界なのだから。
（……傷付かない？）
私しかいないなら、私が傷付く。
大事なひとを快楽の為の玩具にした自分に傷付く。
そうして、傷付いた自分に復讐される。

私は、何も望んだりしない。

訓練が終わって、食堂にトレイを取りに寄ってから、自分の部屋に戻る。
しかし食欲は相変わらず起こらない。晴香とその兄のことが気にかかって、とても食欲

など湧かないのだ。
「少しでも食べておいた方がいいよ。いざという時に動けなくなるよ」
少年が心配しているが、郁未はとても手を付ける気にならない。
「ねえ、晴香や巳間さんのこと、何か聞いてないの……？」
「巳間か」
少年は一瞬眼を伏せた。しかし首を振ってみせる。
「知らない」
郁未はその沈黙から悟った。彼らの件はよくない結果を迎えたのだ。可能性としては、晴香も良祐も殺されてしまった、というのも考えられる。
郁未の表情を読んで、少年が口を開いた。
「最悪の結果なんて、確率的に考えると一番端っこにあるんだよ。解る？」
そう慰めてもらっても、郁未の気が晴れることはなかった。
少年はもう郁未が察するのに充分な情報を与えているのだ。彼は決して核心であることは喋らない。そして晴香達が無事であるのなら、高槻への注意を再び促さねばならないはずなのに、それがなかった。
晴香達の顛末は悲しい形で終わり、多分二人とも死んだのだ。それも、少年の言う核心

に触れた形の死であるはずだ。
郁未はそう結論づけ、これからは自分の知りたいことを知る為に調査をすることに決めたのだった。

郁未は気になっていたカードキーの設置してあるドアの前に立っていた。ここより他に外へ出るドアはない。
ここから先には何があるか解らない。もちろん、巡回員に見つかってもいけない。
(無理はしないようにしよう……)
郁未はカードキーをスロットに通す。
がちゃん、と大きな音をたてて鍵が外れた。
わずかに開いているドアから、気配を殺して向こうを覗く。幸運なことに誰もいなかった。郁未は素早く中に潜り込んだ。

空気が冷たい。
気のせいかもしれないが、ドアから先に入ってしまうと郁未は何故か鳥肌がたった。
もう少し行ったところに左へ曲がる廊下が、突き当たりには右側にドアがひとつある。

郁未は左に曲がった。
頑丈そうなドアが三つあった。
そのうちのひとつのノブに郁未は手をかける。鍵はかかっていなかった。
誰もいない、何もない部屋。金属でできた壁が居心地の悪さを抱かせる。よく見ると、壁の方々がわずかにへこんでいた。
ちょうど、郁未くらいの身長の人間が肩でぶつかってきた位置に当たる場所だ。それだけでなく、いろんな箇所にぶつかったような跡が見られた。現実に誰かがぶつかった程度で壁がへこむのかどうかは解らないが、少なくともそれらしくは見える。
（一体、ここは何なんだろう）
郁未は不安そうに部屋を見回したが、何に使う部屋なのか判断できるものはひとつもない。仕方なく部屋を出て、次のドアを開ける。
ここもさっきの部屋と同じように無人だった。もちろん何かを置いてある訳でもない。
早々に部屋を出ると、最後に残った部屋へ移動した。
「……うっ」
ドアを開けた瞬間、郁未は鼻をつく強烈な異臭に思わずむせた。
部屋の奥に、それはあった。体中が損傷して血がこびりつき、特に口のあたりが裂けて

ひどい有様だったが、間違いなく女の死体だった。大体二十代半ばだろうか。肩まで伸ばした髪には取れかけたパーマがかかっている。
死亡してからどのくらいたっているのだろうか。
郁未は息を止めたまま、思い切って手の甲を確認する。B－66。彼女はB棟の住人だった訳だ。由依あたりは面識があったかもしれない。
(こんなところに何で死体があるの)
死体置き場、という訳でもないように見える。この女性がこの部屋で死んだのは、床に飛び散っている血からするとほぼ確実だろうからだ。
(気持ち悪い……)
まだ死臭も肺から抜けていないようで、吐き気がしていた。
郁未はこみ上げてくる胃液を吐かないように耐えながら自分の部屋へ戻ると、早々に眠ってしまった。

何となく肌寒い。郁未は瞼を開けた。
気が付くといつの間にか廊下に立っていた。ベッドに転がったところまでは憶えているのだが、ここまで来た記憶はない。

場所はまた、例の袋小路だった。
（何だろ、この傷……）
よく見ると壁には無数の傷が付いている。さっき見た時には付いていなかったはずだ。
郁未はあまり深く考えず、そのまま自分の部屋に戻った。
「どうしたの？」
ドアを開けて入ってきた郁未を見て、少年は軽く驚いた。
「どうしたの？　確か寝てたよね」
「じゃあ、あなたが連れ出した訳じゃないんだ」
「そんなことして何の意味があるんだい」
「ないわよねえ……」
あることを思い出し、郁未は小さな叫び声をあげた。
「前にも、こんなことがあった。知らない間に別の場所に立ってて」
考え込む郁未に、少年が低い声で告げた。
「そのことは人には言わない方がいいよ。ここではね、歓迎されないことなんだ」
「どういうことなの……？」
少年は呟き声で付け加えた。

「真実は君の中にあるってことさ。ほら、もう寝た方がいいよ。せめて睡眠くらいはちゃんととっておいた方がいいと思うよ」

郁未は釈然としないまま、もう一度ベッドに横たわって考え込んだ。

気が付くと、違う場所に移動している。そんなことを誰かも言っていた。

（友里さん……）

由依の部屋で話した時、友里が同じことを言っていた。

そのことにどんな意味があるのか思い至る間もなく、疲れ果てた郁未は眠りに落ちていった。

朝起きると体からはほとんど疲れはとれておらず、だるいままだった。

「時間だけど、どうする？」

「行く」

ベッドから這い出して準備をすると、郁未はＭＩＮＭＥＳへ向かった。

お母さん、名前……どうして郁未、ってつけたの？

「お父さんがね、ずっと決めてたの。女の子だったらいくみ、って。本当はいくみの『み』

の字『美』だったんだけど、お母さんが『未』に換えたの」
うん。
「未は、私の名前『未夜子』の未。ずっといくみの側にいるよ、って意味」
そうだったんだ。
「郁未は自分の名前、好き？」
うん、好き……ううん、好きだった。今は、大好き。
でも、ずっと側にいられないから付けた名前みたいな気がする。きっといなくなってしまったら、いくみは自分の名前を呼ばれるたびに、いなくなったお母さんを思い出す。
「考え過ぎよ」
そうかなあ。うん、きっとそうだよね……。

郁未は訓練を終え、食堂に昼食のトレイを取りに向かう。
「……！」
あの壁の前にいた。体中にざわりざわりと戦慄が走ってゆく。意識を失ってしまいそうなぎりぎりのところで、郁未は意識を保った。
大げさなほど震える自分の体を、きつく抱き締める。

（敵意）
戦慄におののいたわずかな時間に、郁未は自分に対する強烈な敵意を感じた。
（もう一度来る）
全身の毛が逆立った。皮膚がぴりぴりと痛む。がん、がん、がん、と耳の中で脈拍がうるさいほどだった。
逃げ出したかった。
しかし、逃げ出すことなどできはしない。
敵意の源は、自分の体の中にあるのだ。この体の中から郁未を害しようとする意志は発されているのだから。
郁未はもう一度その戦慄が襲ってくるのを感じた。

気が付くと郁未はやわらかなシーツの上に転がっていた。
すぐ側で少年が郁未を見下ろしている。
「私、どうなったの……」
「廊下に倒れていたんだよ」
少年は何が起こったのか知っている。そう当て込んで郁未は小声で訊いた。

「これから私、どうなるの」
「どうもならないよ」
「嘘」
郁未は激しく首を振った。
「凄く怖かった。殺されるところだったのよ。何かが私を殺そうとしてるのよ。きっといつか殺されるんだわ！」
「大丈夫だよ。それを感じ取れたのなら対応のしようがある。昨日までの君は、それすら気付いていなかった。そうだろ？」
少年は郁未の側に座った。
「君は自分が思っている以上に強いんだよ。自分に自信を持って」
「そんなことできない。次来たら殺されるわ……！」
「駄目だよ。そんな弱気でいたらどうなるか解らない。強い意志を持たなきゃ」
「できない……」
「頑張るんだよ」
そう言うと少年は郁未の側にトレイを持って来た。どうやら代わりに持って来てくれたらしい。冷めた天津丼が乗っている。

「もう冷めてるけど、食べなよ。食べたら、午後の訓練に行くんだよ」
生返事を返した郁未は、結局食事には手を付けず、そのまま部屋を出て行った。

私は自分が嫌いだった。
「あんなにも自分が大好きだったのに？」
もうひとりの自分が訊く。いつもみたいな冷たさはなかった。
そう、嫌い。でもそれは過去の自分。だから今の自分を、これからの自分を好きになれるように生きていきたい。
「言葉ではどうとでも言えるわ」
でも、やらなければならないの。
「もし、受け入れられたのなら始まり。長い、終わりのない旅の始まり。それが、あなたにできるの？」
できる気がする。

訓練が終わり、郁未は食堂の方へ機械的に歩いて行く。
誰もいない食堂で、取り出し口から鶏肉のピカタが乗ったトレイを出そうとして、それ

から手を止める。トレイを戻して取り出し口を閉め、椅子に座った。
郁未は今までのことを考え直した。
『真実は君の中にある』と、少年は言っていた。なら、今持っている情報だけで真実に辿り着くことができるはずだ。
(私が追っていた『真実』は、お母さんの変死の理由)
それはFARGOがここで何をしているか、ということとイコールだ。
ひとつ、大きなヒントがあった。由依の姉、名倉友里の死だ。多分、友里と母は同じ理由で死亡している。友里の件を詰めていけば、自ずと真実は開けることになる。
『真実は君の中にある』
つまり真実イコール母や友里の死因であるなら、郁未もまたFARGOに消されるに足る状態になっているのだ。
郁未はあの警戒態勢の夕方に聞いた言葉を思い出した。
ロスト体。
そう言われた友里は何を失っていたのか。それは言うまでもなく自在に不可視の力を操ることのできる制御能力だ。
友里に睨まれた時、郁未の体に原因不明の激痛が襲った。今ならあの痛みが郁未の中か

ら発する敵意が与えるものと同じだと解る。多分友里は手も触れずに人を殺せる不可視の力を得たはいいものの、その制御を失い、暴走していたのだ。あの時の友里は、しっかりとした意志を持っていなかった。衝動の赴くままに敵を殺し続けていたのだ。

あれと同じことが、郁未の中でも起こっている。

つまり、郁未は不可視の力を不安定な形で手に入れている、ということだ。

不可視の力と呼ばれる別意識は、母や友里と同じように内側から郁未を食らい、乗っ取ろうとしている。母はこんな不安定な状態で、郁未に限られた時間を与える為に戻ってきて、取り戻せない時間の謝罪として、側にいてくれたのだ。

これが真実なのだ。

（考えなきゃ。何が正しくて、何が悪いのか……）

復讐の為に残された時間はほんのわずかしかなかった。

郁未は部屋に戻って少年に問い質した。

「復讐を遂げるにふさわしい相手を教えて。私には時間がないの」

少年は困ったように首を振った。

「それだって核心なんだ。言えないよ」

「解ってる、でも……」
「もう少し時間がいるよ。もう少し我慢していれば道が開けるんだ」
「どういうことよ、それ……？　私の精神が食われてしまうのを待てって言うの⁉」
「そんな風に精神をすり減らしちゃ駄目だ。食事もちゃんとして、睡眠も充分とる。悪い方に物事を考えない。強い意志を持って行動するんだ。そこから助かった人間はまだいないけど、時間稼ぎにはなると思うよ。君だって時間は多い方がいいだろう？」
郁未は脅えた表情を消すように努力し、ゆっくりとうなずいた。
「努力してみる」

郁未は眠りにつく寸前、髪を撫でられる感触に気が付いた。
「……ごめんね」
少年の謝罪の声がする。
何を謝っているのか解らないまま、郁未は眠りについた。

珍しくひとりで起きた。
「行っておいでよ。いきなり生活サイクルが変わると怪しまれる」

少年の助言通り、郁未は朝の訓練に向かう。

お母さん。私の中にね、何かいるの。
きっとお母さんも経験した、とても怖いこと。
「不安なのよ。疲れているとね、悪い方に考えてしまうものなの。眠ってしまえば、起きた時には不安もなくなってるわ」
でも、眠ったらもうお母さん、いないでしょ。
「おかしなこと言って。じゃあ、郁未の寝顔をずうっと見ていてあげる。だからおやすみ」
でも、目醒めたら私は悲惨な現実に
「また明日」
戻るの……。

「ちゃんと食事をとる気になったのかい」
シーフードピラフからたつ湯気はもうわずかになっていた。
郁未はスプーンで多めに一口すくうと、ぱくりと食べてみせた。
別に食事の大切さに気が付いたわけではなかった。時間がない、ということを思い知っ

た郁未が、こんな風に過ごせる時間をかけがえのないものに感じたからだ。
あと何回共にできるか解らないささやかな時間。
もうそろそろ午後の訓練に行かなければならない。
郁未はドアを開けた。

今日は安息室で眠る日だった。
すっきりと眠った後ですぐ隣の食堂へ入り、トレイを持って部屋へ向かう。

●　●　●

「自我のロストが認められた者、一名。消去に向かえ」
「……」
その人物は何も言わずゆらりと立ちあがった。
何もかもどうでもよかった。こんな命令に従う義務も感じなかった。しかし、他人の言葉で動いている間は、あの辛い思い出を心の中で繰り返さずにいられる。
それだけの為に歩き出した。

●●●

自分の部屋の側まで来た時、郁未は耳障りな警報音に眉をひそめた。
素早く部屋に入ると、すれ違いに少年が出てくるところだった。ひどく真剣な表情でい組を見据える。
「すぐに戻ってくるから、外に出るんじゃないよ」
「う、うん」
郁未がうなずくのを見て、少年は足早に部屋を出て行った。
トレイを置くと、郁未は心配そうにドアを見つめた。
(この前みたいに誰かが消去されるのかな……)
沈んだ気分になったが、郁未にどうこうできる問題でもない。少年が帰ってくるまでただ、待とう。しかし、こんな時にあの戦慄が襲ってきたのだった。
もうひとつの意識が目醒め、郁未に向けて敵意を発する。死の恐怖が郁未の体内を満たしてゆく。ぼとぼとと、刃物を当てられた傷から血が流れ出てゆくような痛みを感じた。
(殺される……!)

風が引く音に郁未は身構える。
くしゃああああっっ
凄まじい衝撃と共に、郁未の意識は吹き飛ばされた。

●●●

「おい、こんな時間に出歩くんじゃない。部屋に戻れ！」
巡回員は廊下を歩くその人物の肩に、乱暴に手をかける。厳戒態勢の今、外に出ていては何が起こるか解らない。数日前に起こったC－188の暴走事件の後だけに、巡回員は普段より神経質になっていた。
「邪魔……無能な人間」
その信者はうるさそうに巡回員の手を払った。
「言うことを聞け。でないと……」
それ以上言うことはできなかった。
巡回員はその信者の眼を見た途端、壁に向かって飛ばされて廊下の壁で頭蓋骨がひしゃけてしまったのだ。スタンプのように鮮血が壁を染める。

彼女はつまらなそうに巡回員の惨状を見た後、何事もなかったように歩き出した。

●●●

また例の壁の前に郁未は立っていた。
しかし、立っていたというのは正解ではないかもしれない。腰がすっかり引けて、半ば中腰になりながら、がくがくと震えているという情けない有様だったからだ。
（まだ……私の心は食われていない）
そのことで少しだけ安心する。
警報音はまだ狂ったように鳴り続けていた。
突然聴こえた銃声に、郁未はやっと我に返った。
（何かいる……！）
逃げなければならない。このA棟のどこかに危険な存在がいるのだ。
しかし、ここには郁未しか信者はいないはずだ。それなのにA棟で銃声が聴こえるとなると、事情は多少変わってくる。
基本的にはＦＡＲＧＯの施設は何となく他へ迷い込めるようにはできていない。隠し通

路を使うなり、共通パスを使うなりして、他の棟から入ってこなければならないのだ。
無意味に入ってきたとは思い辛い。
そいつは明らかに唯一の住人、郁未を狙っているのだ。そう考えるのが自然だろう。
害意を持った何かが、この中を徘徊しているのだ。すぐに逃げなければならない。
べしゃあっ、と何かがひしゃけた音がする。
郁未はすくむ足を無理やり前に出し、歩き出した。

一歩、また一歩。耳をちぎり捨てたくなるほどうるさい警報音の向こうに、誰かが来る気配を窺おうとする。
男の断末魔と何発かの銃声で、郁未はそれがいる場所を察知した。
後ろだ。振り返りたい衝動に駆られるが、そんなことをしている暇があったら一歩でも遠くまで逃げなければならない。
何とか個室の近くへ戻ってきた。
少年はこの部屋で待っているように言っていた。この部屋にいればきっと助けに来てくれる。そう思ってドアノブに手をかけた。
「見つけた」

ほぼ耳元に近い後ろから、聴き憶えのある声が響く。
郁未はその人物の声を認め、大きく震えた。
「……晴香」
確かにそこにいるのは晴香のはずだった。しかし、どこかが違う。
眼だ。金色の灯がゆらゆらと揺れるような、独特の眼。友里の眼と同じような光が宿っている。ひとつ違うのは暴走していた友里から発されていたのが破壊衝動に近い殺意だったのに、晴香のそれはどこまでも冷たく、静かであったことだ。
「ロスト体なのに、無意味に生き続けている生物」
「誰なの……それは私の友達の姿よ。あなた誰なの⁉」
「巳間晴香。そんなことはどうでもいい。命により消去するだけ」
全身に圧力を感じた。そう思った瞬間、郁未の体が後方へ飛んでいた。
壁に背中を打ちつけられ、一瞬意識が薄れかける。晴香は再び冷たい殺意を向けながら郁未に近付いてくる。
「虫と一緒。存在するだけ邪魔。駆逐するの、蝿叩きで蝿を潰すみたいに」
「意志がある者には生きる価値がある！　たくさんできることがあるっ」
「あなたは何もできない。失敗作だから。ピースの足りないパズルは飾られることはない

の。無価値な人間の言葉を聞いているのに飽きたわ。爆発しなさい、脳髄をぶちまけて」
頭蓋骨がきしむ音がした。それと同時に鼻から赤い血がぼとぼとと流れる。友里の犠牲になった巡回員のように。そして、郁未は見ていなかったが巳間良祐のように。
感覚がなくなった。しかし、全ての感覚の代わりに、あの戦慄が襲いかかった。
キシュゥゥ。風が鳴った。
少年が郁未の名を叫ぶ声。
そこで郁未の意志は途切れた。

体中がひどくだるい。その不快感で郁未は目醒めると、自分の部屋の中だった。どうやら少年が運んでくれたらしい。
「朝までまだ時間があるよ。もう一度眠ったらいい」
友里の時にも確か同じように戦慄が訪れた。あの時は由依の叫び声で友里の暴走は止まり、何事もなかった。しかし、今回は違う。確かに力を発動させた自覚があった。
晴香の殺意とぶつかったそれが、何も被害を出さなかった訳がない。
「あの後、晴香は……どうなったの」
「危なかったんだよ。君の手で彼女を葬り去ってしまうところだったんだ。それだけは免

れたんだけど」
「ねえ、どうなったの……」
「不可視の力は使用した者の体力を大量に奪う。不可視の力を得て間もない彼女は、コントロールの仕方を知らなかったんだ。巡回員を何人か惨殺した後で、一時的に力を失った。銃撃の中、何の力もない彼女が逃げられたかどうかは解らない」
郁未は力なく首を振った。
「でも、逃げ切れたかもしれないんだから、希望は捨てないことだよ」
郁未は少年の言葉を聞きながら、泥のような眠りに引きずり込まれていった。
明日は晴香を探しに行こう。そう思いながら。

朝起きて、晴香を探しに出ようとしていた郁未に少年が忠告する。
「もう、止めはしないけど……気を付けるんだよ。もう君の居場所なんてどこにもないんだから」
「解ってる」
郁未はふらふらと外へ出た。
廊下を歩きながらも、郁未は晴香が逃げそうな場所に何故か足が向かわなかった。今更

晴香に逢っても、彼女にとって巡回員を引き付けてしまうというデメリットを与えるだけで、何もいいことはない。
（もう逢えなくなっちゃったけど、遠くへ逃げてね）
ほんのわずかの時間ではあったが、親友だと思っていた晴香に対して、もう無事を祈るしかできない。それが悲しかった。
逢ったばかりの、由依も含めて三人でいた時が一番幸せだった。
その後に起こる凌辱も、多くの死も知らない頃の晴香の笑みを思い浮かべてから、郁未は自分の部屋に戻った。

「どうしたの？」
「やっぱり、今日はずっとここにいることにした」
「いいんじゃない」
もうわずかしか残されていないのなら、のんびりした時間を過ごそう。部屋でごろごろして、他愛ない話をする。
つまらないことで笑ったり、怒ったりしながら。
そしてふと、郁未は顔を上げた。

「ありがとう」
「何が？」
「あなたのおかげで、私はここまでやってこられたんだよ」
少年は申し訳なさそうに眼を伏せた。
「そう言ってくれると嬉しいけど……」
その時、ドアが開いた。銃を持った三人の巡回員が入ってくる。
「連れてゆくぞ。いいな」
少年が無言でうなずく。
これが本当の別れなのだ。もう終わりなのだ。そのことを痛感した郁未は、自分の頬を涙がこぼれてゆくのを感じていた。

不自然なほどの距離を引きずり回され、飽きた頃に郁未は連れてこられた牢に入れられる。両手に枷を付けられた郁未は何も言わず、床に座っていた。
多分、牢に入れられて数時間もたってはいない頃に、外から何者かが入ってくる音がした。物音はだんだん近付いてきて、郁未の前に止まった。
「死ぬ準備はできたか？」

聴き憶えのある、どこか金属質な声。郁未は顔を上げた。
高槻だった。しかし、彼の表情はどこか心の線が一本切れてしまったかのような、尋常でない印象を受ける。前に見た時の、異常さを感じはするが冷静な表情ではなかった。
くくっ、と高槻が笑う。
「命乞いはしないのか、この俺に。アレをれろれろ舐めますから助けて下さいとなぁ。騎乗位で一生懸命腰を動かしますから助けて下さいとなあ?」
郁未はただ無言で高槻を睨み付けるだけだった。
「いい度胸だ。それとも何したって無駄だって気付いてたか? まあ、次にお前の自我がロストした時が最後だ。周期から言っても朝までは保たん。せいぜい残りの時間を有意義に使うんだな。それとも、あいつを恨んで過ごすか?」
少年のことだろうか。郁未は怪訝そうな顔になった。
「あいつが全ての元凶なんだもんなあ?」
その表情を見て、高槻はサディスティックな笑みで顔を歪めた。
この男は何を話すつもりなのだろう。郁未は何となく嫌な予感がした。
結果的には郁未は高槻の言葉に耳を塞ぐべきだったかもしれない。しかし高槻は郁未の思惑を知ってか知らずか、猫がネズミを追いつめたような笑みを浮かべて話し出した。

第七章

「お前、あいつとやったんだろうが。その時、あいつの分身……お前をロストさせた別意識を植え付けられたんだよ。力ずくで襲ってやればいいのに、あいつは情に訴えかけて回りくどいやり方をするんだよ。そういうのを楽しんでいるんだな。人間でもないくせに」
郁未は呆然と高槻を見つめた。
あの少年が人間ではない。そう言われても外見上は人間と変わるところなどなく、とても信じられなかった。
高槻は勝ち誇ったように笑う。
「あいつはな、人間の皮をかぶってるだけなんだぜ？　その下は人間じゃない別の生き物だ。見たいだろう？　だがやめておくんだな。吐くほどおぞましい生き物なんだからな。何人もの研究員があれを見て吐いてるような代物だ。そんな化け物とてめえはずっと過ごしてきたんだよ！」
「嘘よ。あいつは人間だもの……。たくさんいる人間なんかよりずっといい人間だわ！」
「最後の時間をあいつを呪って過ごすんだな」
高槻は郁未の側から去って行った。どうやら隣にある詰所のような場所へ入って行ったらしい。それを見届けてから郁未はがくりとうなだれた。
（そういう、こと……だったんだ）

不可視の力というのは、人間ではない者の異能力を人間に植え付けることで与えるものだったのだ。少年が言っていた『真実は近くにあるよ』という言葉。それは彼自身が不可視の力の源である、という意味だったのだ。

母もまた、人ではない種族に分身を植え付けられ、その体を食い破られて死んだのだ。

(あいつに騙されて、気を許して……家族の真似事みたいなことして、ひとりではしゃいで。何て馬鹿だったの……いいように実験体に使われただけじゃない)

郁未は唇を噛み締めた。唇から、血の味がした。

ひどく疲れていた。もう、このまま死んでしまいたい。そう思っていた。

早く、最後の時が来ればいい。郁未はすっかり投げやりな気分になっていた。

グブウウン

遠くで音がする。それを追うように銃声が聴こえる。しかし郁未は絶望のあまり、何が起きているのかを見るのもおっくうになっていた。

(ああ、私が消去されてるのね……)

●●●

郁未がけだるげに床に身を横たえたのと同じ時、詰所にいた高槻が銃声を聞きつけて出てきた。部屋の外で警備をさせていたコントロール体Ｂ－58がいなくなっている。代わりに、少年が立っていた。両腕を斬られ、腕のないままこちらへ向かってくる。

「Ｂ－58はどこに行った⁉」

「そこでのびてるよ」

少年は顎をしゃくってドアの死角を示した。確かに女の足が二本見える。

高槻は信じられないというように少年を見た。

「どうして『足枷』のある貴様にコントロール体が……！」

「おかげで腕がこんな有様だけどね。まあ、やってみればできるもんなんだな」

高槻の顔に、他の誰も見たことがない表情が初めて浮かんだ。

恐怖。

「止まれ、そこで！」

「止まればいいのか？」

高槻は安堵した。

少年は足を止めた。それと同時に風が少年の周りを渦巻いた。

「や、やめろ……力を使うなあああっ！」
しかし、風は高槻の皮膚を切り刻み始めていた。髪を斬り、肉を少しずつ刻んで壁にびしゃびしゃとへばりつかせる。しばらくして骨が見え、そのむき出しになった骨が、ブーメランのようにぶんっ、ぶんっと飛ばされてゆく。
通常では考えられない形で、高槻の体は崩壊していった。
少年は溜息をついた。
「言うのが遅いよ」

●●●

掌が、冷たい水に触れている。その冷たさで、郁未は正気づいた。
体を起こしてみると、掌がひたされていたのは下水で、郁未の掌にはすっかり悪臭が染み付いていた。もう片方の無事な手で制服に付いた埃を払い、郁未は立ち上がった。
まだ、夢うつつのまま郁未は周囲を見渡した。
暗くてはっきりとしなかったが、一方は行き止まりだった。そこから無理に先へ進もうとすると、下水を潜っていかなければならない。

とりあえず郁未は反対側に歩いていこうとした。
爪先に、何かやわらかいものが当たる。郁未がしゃがんで踏んだものを確認する。
少年がくれた、うさぎのぬいぐるみだった。
(あいつが私をここまで連れてきたんだ……)
ロスト体である自分を助けることに何の意味があるのか、と考えたところで郁未は首を振った。そうではなく、これはただ単に自分の分身を助けただけなのだと思い直す。
高槻の言葉によるなら郁未の中にある別意識は、少年の分身なのだ。つまりそれは体の一部と言える。それが失われるのを恐れて自分ごと助けたのだろう。
だとしたら、郁未はあのまま死んでおくべきだったのだ。
(でも、いい。後悔させてやる……)
もう怖いものなどない。郁未はぼろぼろのぬいぐるみを下水に投げ込む。
郁未は少年に復讐する為に下水道を後にした。

上への梯子を見つけ、郁未は無言で昇った。辿り着いた先は、郁未の馴染んだ場所だった。いつも集まっていた地下通路の、行き止まりだと思っていたところに出たのだ。
郁未の使っていた部屋を見て誰もいないのを確認する。A棟には少年の姿はなかった。

郁未は共通パスを使って通用口を抜け、今まで入ったことのない奥の方へ進んでいった。
途中でひとつ共通パスがないと入れないドアを見つけた。郁未はそこに入り込むと、床を探してみた。地下通路の入口と同じように、目立たないように鉄板がかぶせられていた。それを上げるとやはり梯子がある。
郁未は降りてみた。
しかし、どうも埃だらけでここ数年来誰かが入った形跡はなかった。郁未はそのまま梯子を上がってくる。ここではないのだ。
その部屋を出て、また奥へ入ってゆく。郁未はしばらく歩いていると見覚えのある場所に出た。郁未が繋がれていた牢だった。
一番奥の部屋から誰かがいる気配がする。
郁未はゆっくりと歩いて行った。
「あ……っ」
少年はそこにいた。両腕をもがれた彼は、それでもいつものように笑ってみせた。
「まだ、僕に用があったのかい」
「あるわよ。だって私の仇はあなただったんだもの。でも、そのあなたがどうしてこんなところにいるのよ……」

「好都合じゃないか。僕は逃げも隠れもできない」
郁未は声を詰まらせた。
「どうして私を助けておいて、あなたが捕まってるのよ」
「捕まるようなことをしたからね」
「あなたは自分の為に私を助けたんでしょ⁉　自分の体の分身を失われたくなくて」
「違うよ」
「嘘おっ！」
「ほんとだよ」
郁未は自分の感情をもてあまして、口をきけなかった。
「何だかまたショックを受けてるように見えるんだけど」
「じゃあ、何で私なんかを助けたりしたの！　そんな……両腕を失ってまで」
「謝罪さ。僕にできることなんかそのくらいだったんだ」
「謝るくらいなら最初からそんなことしなきゃよかったのよ」
少年は首を振ってみせた。
「これは僕達だけの問題じゃなかったんだ。君達の種と僕達の種、双方の問題だったんだよ。だから君達も巻き込まれる運命だったんだ」

「教えて、全てを」
郁未は低い声で呟いた。
少年が語ったことは、郁未の想像の範疇を超えていた。
三〇年前、彼らの一族のひとりが人間に捕獲されたことから全ては始まった。人間は彼らのことを『悪魔』と呼んだ。奇異な姿、それ以上に彼らの『力』が人間の眼を引いた。最初は彼ら自身がその力を使わされていたが、次第に人間達が自分達にその力を植え付けるもくろみを持ち始めた。そうして、試行錯誤のうちに彼らの種族から分身という意志のかけらを人間に植え付ける方法を見つけ出したのだ。
「まず対象者は今までの人生でどれだけの過酷を経験してきたかで、３つのランクに分けられる。君はここに来る前に、よっぽど辛いことがあったんだね。Ａなんてよほどのことがなけりゃ配属されないからね」
ＭＩＮＭＥＳは過去の痛みを精神の一定位置に固定して、精神の強化を図る訓練。
ＥＬＰＯＤはもうひとりの自分と対峙し、過去の醜態を大幅に脚色した映像を無理に回顧させ、同じく精神の強化を図る。
その訓練を経て充分精神を強化した個体に、意志の注入が行われる。
「だけど、ただ解るのは僕達にとっても君達にとってもよくないことをしてる、というこ

となんだ。だから僕は君に賭けてみた。君を最後の犠牲にして、全てを終えられたらって思ってたんだ。僕達にはこの敷地内にいるだけで『足枷』が付く。でも君が完成体に至れば、同等の力を持って足枷がない。その状態の君が復讐を遂げてくれれば、全て終わっていたんだ」

「でも、あなたは何度でもやり直せたはずだわ。私を助けたりしなければ、あなたは何度でも種の解放に臨めたはず」

「……人間は嫌いだったんだよ。あのさ」

少年が立ち上がった。

「顔がかゆい。見ての通りかけないんだ。かいてくれない？」

「いいよ。顔、出して」

郁未は少年の側に寄った。その時、少年が鉄格子の隙間から郁未にキスをした。

そうして、あることを小声で囁く。

「さようなら、郁未」

『共通の敵は『声の主』と呼ばれるＦＡＲＧＯの創設者だ。居場所は僕達でも解らない。その居場所を見出せるものがあるとしたら本能だけだ』

『僕らの足枷となっているものは、地下、奥深くにある。だけど一時の感情では動いちゃ駄目だ。地下は限りなく深いし、足枷の正体も解らない。明日の僕の消去には間に合わない。後は自分で考えて、目的を持って行動するんだ』

郁未が取れる選択肢はふたつある。

この足で『声の主』を討ちに向かうか。

時間がなくなるのを覚悟で、彼らの足枷を除去しに行くか。

しかし郁未の意志は少年の言葉を聞いた時から決まっていた。

ここに来る前、地下へ降りてゆく梯子を見つけていた。それを再び降りて行ったのだ。気味が悪いほど静かで、生物のいる気配は全くしない。まるで見捨てられた場所のようだった。ここを誰かが利用した形跡がないことで、郁未はある程度自信を持った。

梯子を降りると曲がりくねった廊下が続く。しかし一本道で奥まで行くと再び梯子がある。それをまた降りる。その繰り返しだった。

地下１０階をとうに超えたあたりで、郁未も疲れてきた。陸上で鍛えた足も、無限に動き続けられるわけではない。

もう何階にいるのか憶えてもいなかった。

途中で梯子から足を滑らせ、したたか腰を打ちつけた。途中で脛のあたりを梯子で打ち付けて、とても立てないほど痛む。それでも郁未は足を引きずりながら歩いた。
えんえんと同じところを迷っているのではないかと疑いだした頃、今までとは違う、まっすぐの廊下が視界に入った。その突き当たりに黒いドアが見えた。
郁未は駆け寄った。しかし、そのドアをよく見て、郁未の顔は強張った。
ノブがない。それだけでなく他の開閉装置も一切なかった。
（どうしたらいいのよ……！）
郁未はドアと壁のわずかな隙間に指を入れてみる。強引にこじ開けようとすると、爪が割れて血が滲んだ。
郁未は乱暴にドアに体当たりした。

●
●
●

自分を消去する為にやってきたＦＡＲＧＯの男達に連れられていきながら、少年は郁未のことを考えていた。
（待ち受ける運命はいつも過酷だ。自分を忘れずにね、郁未……）

●●●

郁未は開かないドアにひたすら血まみれになった拳を打ち付けていた。
もう、かなり時間がたっているはずだ。
郁未はぼろぼろになった自分の体を抱き締め、自分の中にいるはずの、少年の半身に呼びかけた。
（ねえ、教えてよ……私の中にだっているんでしょ、あなたは……）
少年と同じ気配を体内に感じ取れる。確かに存在する別の鼓動を郁未は抱き締めていたのだ。戦慄としてでなく、あたたかな存在として、郁未は初めてそれを実感していた。
（……ちゃんと、あなただったんだね）
突然、ドアが音をたてた。電子音をたてながらドアが開いていっているのだ。
これで少年を助けられる。そう思った郁未はゆっくりと開くドアがもどかしいまま、無理やり体をねじこんだ。
しかし、中に入ってみて郁未の期待は崩れ去った。
そこは、一面の花畑だったのだ。この部屋の終わりがどこにあるとも解らないほど広い

というのに、床一面に花がびっしりと咲いている。
思ってもいない光景に、郁未は途方に暮れた。
何が足枷なのだろう。もしかしたらこの花一本一本が足枷なのだろうか。地中深く寝を張っている花々を一本残らず引っこ抜くことなど不可能だ。
それでも郁未は花を引き抜こうとした。しかし花はどれも根から抜けてくれるものはなく、茎の途中であえなくちぎれてしまう。
ひたすらに、花をちぎり続ける。茎や葉の繊維で掌や指が傷付き、ひどく痛んだ。それでもただ、花をちぎり続ける。
「……ああっ」
郁未は突然叫び声をあげ、虚空を見上げた。
少年が死んだのだということを、自分の半身が訴えていた。少年を助けるのに間に合わなかったのだ。
掌に握った花々がばさりと落ちる。
郁未の眼から、光が消えた。

いつの間にか郁未は下水道のところまで来ていた。

下水に、郁未が捨てたうさぎのぬいぐるみが浮かんでいる。郁未はためらわず下水に飛び込み、そのぬいぐるみを抱き締めた。
今となっては少年が残してくれたただひとつの形見だった。ただひとり、郁未を見ていてくれた人を失って、自分の頑張る意味もまた失ってしまったのだ。

ただ郁未は床に座って、幸せな頃のことを回想している。
幸せな頃の思い出は、全て母の思い出だ。
まだ幼くて、世界が不思議に満ちていた夏の終わりの海で、母に見ていてもらって砂の城を作る。波が近付いてきて、浜をよたよたと歩く蟹が転がる。
幼い郁未を見守る母の笑みは、どこまでもやさしい。
幸せだったあの頃に戻って、永遠に過ごしたい。
どうせもうすぐ終わる命なら、あの頃の夢を見ながら死にたい。
(あ、そうだ)
少年はＭＩＮＭＥＳを人の心の痛みを見せる機械だと言っていた。あの機械なら母の夢を見せてくれるかもしれない。郁未の心の痛み、その中心にいるのは母であるはずだ。
郁未はぬいぐるみを抱いたまま、ふらりと立ち上がった。

しばらくぶりにA棟へ戻ってくる。

郁未がMINMESのドアを開けると、中の電気は消えていた。一瞬いぶかしく思ったが、何のことはない。葉子がいなくなり、郁未もまた消去を待つ身の今、A棟の信者はひとりもいないことになるのだ。閉鎖しているのだろう。

郁未は使い方も解らない機械をでたらめにいじると、何とか電源も入り、馴染んだ機械音が響き始めた。

（逢いに行こう……一番逢いたいひとに）

郁未はうっとりと瞼を閉じた。

そこは海だった。お母さんと一緒に来た、夏の終わりの海。

「やあ。どうしたの、今日は」

ここにいたのは少年だった。

私は彼の隣に座った。

「泳ぐにはもう季節が遅すぎるねえ。海が冷たすぎるよ。でも、こうしてただ眺めているだけというのもいいけどね」

うん、私ね、お母さんに逢いに来たんだ。でも、ここにいたのはあなただった。
「邪魔だったかい？」
ううん。私、あなたとお母さんを重ねて見てたのね。私が逢いたかったのは確かにあなたなのよ。
あなたがいてくれたから頑張れたのよ。あなたが見ていてくれたから頑張れた。
でも、もう……。
「こうしてここで出逢っているように、僕の存在は心の痛みでしかなくなったんだね」
そう……同じことの繰り返し。悲しみを吹っ切ろうとして、強くなろうとして、でも私はどこにも辿り着けなかった……
「辿り着こうとしなかったんだね。ここで僕と出逢っているということは、もう道は開けているんだよ。ほら、自分の体を抱き締めてみて」
温かい。体の奥が温かい。
「ありがとう。僕を受け入れてくれて」
あなたを受け入れたことで、空虚じゃない、確実な存在が息づいている。あなたの言ったのはそういう意味だったのね。
ねえ、私はこれからどうしたらいいの？

「進めばいいんだよ、君の目的に向かって」
そうだね、おかしなこと聞いたね。ねえ、また……逢えるかな。
「季節というのは巡っていくんだよ。僕はいつまでもここにいる。でも君はずっと先行く季節を生きてゆくんだよ。ずうっと、遠くまで行くんだよ。この夏の終わりの海が霞んで見えなくなる場所まで……」
解った。そうする。でも最後にひとつだけ聞かせて。あなたの名前を知りたいの。
「僕の名前は……」
聴こえないよ。ねえ。
「さようなら、郁未」
さようなら。

心が満たされていた。掌に力がこもって汗ばんでいた。
(あいつが残していってくれた力……)
郁未は不可視の力を完全に制御できている自分に気が付いていた。母と話したくてここまで来たのに、少年と逢ったのだ。
(私は自分の中に彼を探していたんだ。そうして受け取ったのは、希望)

ありがとうと言いたかった。憶えてはいなくても、ＭＩＮＭＥＳの中で感謝を告げたのだろうか。そうでなかったとしたら、今言っておきたい。
「ありがとう……名も知らぬ、少年」
郁未はドアを開けた。復讐を果たす為に。

『その場所を見出せるものがあるとしたら本能だけだ』
郁未は少年が残した言葉を考え直した。
たったひとつ思い当たる場所がある。意識を失っていた時に迷い込んでいた袋小路。無意識は、多分正確に言うなら別意識は、いつもここを目指していた。
無尽蔵に付けられた傷。
本能のままに敵を探していた別意識は、まっすぐに敵の方へ向かっているはずだ。
このまま、まっすぐに進んだ位置に敵はいる。
（行こう……二人の意志が交わる場所へ）
郁未は少年の意志を、力を解放した。
大きな音をたてて壁が崩れ、そこに道が開けた。

地下にあったのと同じ、大きな黒い扉がある。
（ここ、来たことある……）
初めてこの施設にやってきた日、クラス分けの為の検査が行われた場所だ。あの時の姿なき声が『声の主』であったのだ。
今まで、この場所を忘れさせられていたような気がする。
しかし、今はしっかりと思い出した。それと、この扉が意志の力で開くことも。
扉はゆっくりと開いてゆく。

『おかえり、新たなる道を見出した者よ』
「ただいま」
『だが、その者は聖者などではなかった』
「そう、背教者の帰還」
『実に稀な事例となってしまった。君をそこまで駆り立てるものは何だったのだろうね』
「私を見ていてくれる、私を見ていてくれた人達の存在」
『まだ我々は浅はかだったのかな。しかし、築いてゆくしかないのだよ。いつ壊れるとも知れぬ砂の城でも』

「潮は、思ったより満ちているものよ」
『それは理解しよう』
「なら覚悟はできている、ということね」
『そういう言葉ですら、我々には理解に苦しむのだが……対等に話ができるようにはするべきかな』

視界が暗闇に遮られたかと思うと、すぐ頭上に巨大な赤い月があった。
『……なにに見える、私が』
「月。天空に浮かぶ月よ」
『なるほど、月か。人間達の悲しく、哀れな姿を見てきた悲劇の傍観者……月そのものと言えるだろう』
「それがあなたの本当の姿だと言うなら、私はそれを倒すまで」
郁未は意志の力を集めた。自分を構築する全ての細胞から、力を一気に集中させる。こめかみの側の空間が膨張を始める。ばしっばしっと蒼色の放電が飛ぶ。
『…親……した…は…………な…だよ』
全身からあふれる力のせいで、髪がたなびき始める。

『母……殺……の…き………なの…よ』
眼には決して見えない、それこそ不可視である力が巨大な球形となって浮かんでいた。
その全てを郁未はコントロールしていた。
頭上の月を睨む。
それは郁未の手を離れ、月に向かって急上昇していった。不可視の力が付きと衝突しようとする寸前。
『母……殺し…のは…み……な……よ』
『母親を殺したのはきみ自身なのだよ』
その言葉を理解した時、郁未の力は一気に霧散していった。
(母親を殺したのはきみ自身なのだよ母親を殺したのはきみ自身なのだよ母親を殺したのはきみ自身なのだよ母親を殺し……)
大量に襲いかかる言葉を郁未はどうしても振り払えなかった。

きい、きい
揺り椅子に老人が座っている。彼は時の証人。
「お前の母、未夜子がおまえを身ごもった時、すでに不可視の力を有していた。その力は

娘にも受け継がれた。おまえは生まれた時から不可視の力を有していたのだ」
そんなの信じられない。
でも、私の抗弁など無力だ。
「不可視の力というのは、邪な力。自分の正の意志とは相対する意志を持った力。自分の願いに反し作用する力。再び母と暮らす日々、おまえはこう願った。この生活を失いたくない、と。それが不可視の力を放つ引き金となった。お前の中に潜む邪な意志が、穏やかな日々を壊したのだよ」
そんなこと。
「自分では気付いていないだろうが、確かにお前の力が母をこの世から葬り去った。つまり、お前が母親、未夜子を殺したのだよ」
そうだったんだ。私がお母さんを殺したんだ……。
私が、この手で、お母さんを……殺しました。
「なら、どのような裁きが待っているか、知っておるな」
時の証人に裁かれた者は、体の裏表がひっくり返るって話を聞いたことがある。
そうだ……

「お姉ちゃん、どうしてそんな格好になってるの」
子供が語りかけてくる。どこか歪んだ光景。歪んだ子供。
「時の証人に裁かれたから」
「変色したレバーがかわいそう。砂のついてる歯ぐきがかわいそう」
「いいのよ、手術が楽だから」
ひっくり返されたなんて、認めていないはずだ。なのに何を言っているのか。
「ねえ、お姉ちゃん、お姉ちゃんの脳みそを牛の脳みそと取り替えられちゃったよ」
「誰よ、そんなことするのは」
「ケンちゃんだよ」
あいつはいつまでも根に持っているんだ。きっと、前に落とし穴に竹槍をしかけて串刺しにした時の仕返しだ。子供のいたずらなのに、何て嫌なやつだろう。
「早くしないとケンちゃん、脳みそを細かくちぎっていろんな所に隠しちゃうよ。細かくちぎった脳はハジの大好物なんだよ」
そうだった。最近ハジが大発生していて、社会問題になっていたんだ。あのハジの醜い顔を思い出すだけで嫌になる。
でも、もう一週間もたっている。今追いかけても手遅れだ。

「昨日の帰り、C組のゆかりちゃんが、ハジに耳から脳をちゅうちゅう吸われちゃったらしいよ」
「きゃー、こわーい」
小学生がハジの話をしている。
「ハジにはすのこがよく効くんだって。あの不気味な角をすのこの隙間にはめてやれば、身動きできなくなるらしいよ」
私もすのこを買いに行こう。家にあるかもしれないけど、ふたつあったって困りはしないんだし。
そう思って風呂屋に行ったら、すのこフェアをやっていて、すのこだらけだった。
「私もすのこをひとつ」
レジに並んでそう頼む。
「……何をしてるの、あなたはこんなところで」
後ろに並んでいるひとが声をかける。
「すのこを買ってるのよ。だってハジに襲われたら大変じゃない」
「ハジって何よ」
「だから、すごく狂暴で……醜くて」

そのひとは冷たく言った。
「それは知らないのと同じ……というより、そこまで詳細を決めていなかったのね」
「ねえ、あなた誰よ」
「私はあなたよ」
そう言えば私、こんな顔してたっけ。しばらくひっくり返っていたから気付かなかった。
「あなた自分の世界に閉じこもろうとしてるのよ。自分の手で母親を殺したことを認めちゃ駄目。あなたは、つまり私は自分の手で母親を殺してなんかいない。信じて」
いいのよ、今の生活に不自由してないし。ハジは多いけどね。
「馬鹿なことを言ってないの。時の証人なんてのも存在しないの。奴が作り出した幻影。もういい加減に向こうに戻りなさい！」
もうひとりの私は、思い切り私の頬を殴った。

そこには相変わらず赤い月があった。
悪意を持った月。郁未を狂わせようとした月が。
『狂いたかったのはきみ自身なのだよ』
「もう騙されないわ。私はあなたを倒す」

郁未は力が溜まってゆくのを感じた。
自分の頬から鱗が落ち、真っ赤な肉が見えた。そう思った後、それが幻覚だと気付いた。
『よく母親を殺してのうのうと＊＊＊＊＊＊＊』
『よく母親を＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊』
彼の言葉を拒否する。そして再び意志の力を集めた。さっきとは較べ物にならないほど巨大な力。しかしまだ足りなかった。不可視の力の球面全体から、一瞬針のような突起が現われ、消えた。
郁未はもう一度巨大な月を見据えて念じた。
「消えろ！」
まるで手品のように月は消えた。
郁未はその一撃で『声の主』をしとめたのだと解った。しかし彼の断末魔のように風が荒れ狂い、部屋の中心へ引きずり込まれてしまいそうだった。
郁未はドアなのではないかと思われる空間に飛び込んだ。

最終章

半ば崩壊状態となったＦＡＲＧＯの施設内を、男達が走り回っている。
彼らの黒服が、まるで葬送の列のように思える。うろたえ、叫びながら右往左往する人間達に混ざって、ひとりの人間が郁未に近付いてくる。
いなくなっていた鹿沼葉子だった。
「食堂で、お待ちしています」
葉子は返事を待たずに、そのまま歩き去ってしまった。
郁未は葉子が何故今になって現れたのか、よく解っていた。しかし、そう信じたくなかったのだ。
「どうして……」
郁未は呟いた。

●
●
●

同じ時、郁未の場所から十メートルも離れていない場所に、名倉由依はいた。
郁未に脱出の手引きをしてもらったものの、そのまま戻ってきて、自分なりのやり方で傷付く女性達を助けながらここに留まっていたのだが、突然建物が揺れ始め、動揺するＦ

ＡＲＧＯの連中が逃げてゆく中、逃げ出そうとする信者の手助けをしながら何が起こっているのか確認しに来たのだった。
元凶であるらしい場所から多くのＦＡＲＧＯの男達が走り去ってゆく。
そこから死角に当たる場所に、誰かが座っていた。怪我をして歩けなくなっているのではなく、茫然と座っているだけのようだった。
しかし、その人物は知らない信者の女性ではなく、巳間晴香だったのだ。
「晴香さんっ！　どうしたんたですかっ」
由依は慌てて晴香に駆け寄った。
「あんた、誰」
「もう、やだなあ……由依ですよ、由依」
「ユイ……そう、そうよね……」
おぼつなかげに由依の名前を反芻する。
「晴香さん、憶えてないんですか……？」
よく見ると、晴香の胸に返り血が飛び散っている。しばらく逢わない間にどんな修羅場をくぐってきているのかを想像させた。
「いろんなことがあった。そんな気がするだけ」

「とっても、心が痛むようなことだったんですね」
「でも、いいのよ。私は憶えていないんだもの、どんなことがあったとしても……忘れてしまえば生きていけるわ。一瞬、悲しくなるだけ」
由依は晴香を見据えた。
「そんなのでいいんでしょうか。思い出さない方がいい真実なんて、実はないんじゃないんですか？　その事実を受け止めた上で生きていかないと……何ていうか、自分勝手だって思うんです」
晴香は沈黙している。
「全てを受け止めて、自分でちゃんと整理して、心の奥にしまっておかなきゃいけないんじゃないですか？　自分の過去の一部を封じ込めてしまうのって、そこにいた人達の存在も一緒に消しちゃうことになって、何かを見ないままのうのうと生きていくなんて……」
声が震えてうまく話せなかった。しかし、それでも由依は話し続ける。
「すごく自分勝手ですよっ！　自分に甘えて……。正直に生きるのって、すごく辛い……けど、でもっ、それが人の道なんだと思う」
途中から涙が溢れて、言葉もまともに聴き取れない。由依は鼻水をずるずるとすすって泣いていた。

「あなた馬鹿でしょ。馬鹿じゃなきゃそんな考え方できないもの」
「そうかもしれません。でも、晴香さんにもきっとできますよ、そういう生き方」
「それって馬鹿にしてるのよねえ……」
「そんなことないですよっ。ほら、一緒に行きましょう」
「どこへ?」
「とりあえずここの人を助けてあげられたらな、って思ってるんですけど。でも、どこだってここよりはましでしょう?」
「ま、そうね」
晴香は立ち上がった。先を歩く由依の小さな背中を見ながら、まだ辛さはあるものの、ひとつ吹っ切れたような表情を浮かべていた。
この子と一緒にいたら、いつか自分の記憶喪失ごっこも終わる。
その時には、兄、良祐の為に泣こう。そう思っていた。

●　●　●

食堂に入ると、いつもいた場所に葉子は座っていた。テーブルには空のトレイが置かれ

ている。郁未も同じようににトレイを持ってきて、テーブルに置いた。
「こんにちは。ここ、座ってもいい？」
「どうぞ」
葉子の向かいの席に座る。
「この食堂ってさ、もう少し凝った内装にしたらいいのにね。明るい色の壁紙貼って、真っ白のテーブルクロスとか敷いてさ」
「……そうですね」
「ここの料理って、案外おいしかったよね。誰が作ってたんだろ」
「さあ、存じません」
「……そうだ。今度一緒にゲームセンターに行こうよ。あのゲームのアーケード版があるんだって友達が言ってた」
「そう、ですか」
ひたすら葉子に対して楽しかった思い出につながることを話し続ける郁未の姿は、ひどく痛々しかった。それを郁未自身も、葉子もまた思い知っていた。
そんな努力も結局は沈黙がとって代わる。
気まずそうに郁未が呟いた。

「私、あなたのこと嫌いじゃない」
「私もです」
「どうしても、引き返せないの……？」
「はい」
「どうしてっ！」
郁未の悲痛な叫びに、もう葉子は動じなかった。
「識別番号『Ａ－12』の消去。これが神のご意志なのですから」
「神⁉　あの赤い月が神だというのなら……」
葉子はゆっくりと首を振った。
「ＦＡＲＧＯ宗団自体が神なのです。ＦＡＲＧＯの規律は私にとって絶対の言葉であり、ＦＡＲＧＯの教えは全ての理なのです」
「どうしてなのよぉっ！」
郁未の叫びを無視し、葉子は郁未の左手の甲を見やった。
「『Ａ－12』……識別番号確認。消去します」
葉子は立ち上がると郁未から離れる。
郁未もまた椅子から立ち、葉子と間合いを取った。

暴走する力にただ翻弄された名倉友里。巨大な力に流されることはなかったものの、自分の力の制御方法を知らなかった晴香。コントロール体と至る前の郁未。その誰よりも危なげなく不可視の力を使いこなす葉子。

彼女の攻撃は今まで受けたものとは段違いだった。

気圧が急激に変化する。

空気が葉子の前に集まってゆく。不可視の力によって現実では有り得ない重さを与えられた空気が、水晶玉のように固まった。

葉子は力を放った。

（速い！）

郁未が身構えた時にはもう、二人の間にあったテーブルは粉々に消し飛んでしまっていた。それでも球のスピードは減らなかった。

体に触れる寸前、郁未もまた意識の固まりを作り出し、つややかな水晶玉に見えるそれを弾いた。間一髪郁未の体をそれて、壁に激突する。

ごおっ

図らずもその力を受け止める羽目になった壁がに、大きく陥没する。砕けた壁が部屋中に舞い落ちる。



「やめよう！　もうやめようよ。私達が傷付け合う必要なんかどこにもないじゃない！」
「あなたはＦＡＲＧＯにとってよくない存在です。そして、私はＦＡＲＧＯの信者。それだけです」
郁未は叫びたいのをこらえて、葉子を見つめていた。
突然、葉子の姿に重なるようにいくつもの映像が浮かんだ。

搬入車の中に座る少女の膝

プレゼントの包み

Ｃ－112

血まみれの、動物を象った安っぽい置き時計

ひきつった顔の女性

（これは、葉子さんの記憶だ……！）
今の郁未は葉子の一挙手一投足に精神を集中している。不可視の力は葉子の一番辛かった、多分彼女がＣｌａｓｓ Ａに配属されたきっかけとなった痛みを浮かび上がらせていたのだ。
この戦いを終わりにしたい。しかし倒すことに専念できる葉子に対して、郁未は勝っても負けてもメリットは何もなかった。どうしても本気で殺し合えない。

終わらせる手段はもうひとつしか残されていないのだ。
郁未は迷うことなく葉子の心から溢れ出る映像の数々を抱き締めた。

『また、一緒に暮らしましょう』
ＦＡＲＧＯ宗団の隔離施設で生活しているお母さんから、手紙が届いた。
これからはお母さんと一緒に暮らせる。お母さんの手料理が食べられる。
それ以外には何もなかった。

Ｃ－112
手の甲にそんな烙印が押され、お母さんと同じクラスに配属された。
しばらくぶりに逢ったお母さんは、写真で見ていたのとは全然違った。頬はげっそりとこけて、眼窩は落ち窪み、髪の白髪がひどく目立った。
「お母さん」
返事の代わりにお母さんは私の手を見て、がっかりした。
「もしかしたらと思ったんだけど……まあいいわ」
それからの生活はひどいものだったけど、お母さんの手料理は食べられなかったんだけ

ど、お母さんといられるだけで満足だった。
でも、辛かったのは、優しかったおかあさんが他の信者の人達を見て、悪し様に陰口を言うこと。お母さんがひどく醜く見えて、その気持ちを押し隠すのが辛かった。

お母さんの誕生日だった。
ここに来る前に買ってあった、かわいいハムスターの置き時計。お母さんが来たから、その時計を後ろに隠した。
お母さん、とっても嬉しそう。誕生日だからかな、と私は思った。
でも違った。
「Class Aに昇格する方法があるのよ！　それでね、あなたの協力が必要なの。協力してくれるわよね」
「うん、私……お母さんの為なら何だってするよ」
お母さんは笑った。私は幸せな気分になった。
そうしてお母さんは私の首を絞め始めたのだ。
「これが精神の負荷を与える一番の方法なんだって！　最愛の身内の死に直面することが。これがお母さん、Class Aに昇格できるのよ？　ほらっ、笑ってよ！　これでCl

ａｓｓ Ｃのごみの世界とは違うところへ行けるのよ。お母さんの資質がやっと認められるのよ。あなたも嬉しいでしょっ⁉ だからもっと嬉しそうな顔をしてよっ」
お母さんは笑ってた。引きつった顔で、延々とＣｌａｓｓ Ａ、Ｃｌａｓｓ Ａ、Ｃｌａｓｓ Ａと叫び続ける。
私は抵抗しなければよかったのかもしれない。お母さんの為に死んでいればよかったのかもしれない。でも、私は苦しかった。苦しくて、手足をばたつかせて暴れていた。
手に握っていた置き時計が、お母さんの頭を直撃した。

『おめでとう、鹿沼葉子』
あの、頭に直接響くような声が私に語りかける。
「いいえ、私はＣ－112です。鹿沼葉子という名は今日捨てました」
『しかし、残念ながら君はＣ－112でもないのだよ』
手の甲には今まであったＣ－112の代わりに、Ａ－９の文字があった。
お母さんが熱望していたＣｌａｓｓ Ａの称号。娘を殺してまで欲しがった称号。
でも、私にはそこまでしてＣｌａｓｓ Ａに昇格したい気持ちは全然解らなかったから、無感動にそれを受けた。

きっと、ＦＡＲＧＯの教えを全て受け入れれば、お母さんの気持ちも解る。ＦＡＲＧＯを否定することは、お母さんを否定すること。ＦＡＲＧＯの教えを拒むことは、お母さんを拒むこと。

だから私はＦＡＲＧＯの信者として生きていく。

「どうして泣いているのですか」

半ば夢うつつの状態だった郁未は、葉子にそう問われるまで自分が泣いていることに気が付かなかった。しかし、頬を濡らしてゆく感触は明らかに涙だ。

「葉子さんがかわいそうだから……」

「何を根拠にそんなことを言うのですか！」

葉子は声を荒げた。

「だって、私と同じだもの。母との思い出にすがって……でも、結局その思い出に縛り付けられてしまう。そうでしょう？」

「私は違いますっ！」

再び葉子の前に水晶玉のような空気の固まりが作られる。ほとんど葉子の全身が隠れてしまいそうな大きさだった。

あれは危険だ。郁未の別意識が警告する。

ブウン！　空気がうねりながら郁未の許へ繰り出される。郁未も反射的に意志の力を集中させた。葉子の意志と郁未の意志が、互いに喰い合いながら相手を拮抗しようとしている。周囲の空気が渦を巻き始めた。その渦に巻き込まれた椅子やテーブルが、瞬時に粉々になってゆく。

「葉子さんっ、もうやめよう！　葉子さんは別の道を選ぶべきだったのよっ」

「別の道などありませんでした」

「考えなかっただけ！　お母さんとの思い出を壊したくなかっただけっ！」

「違いますっ」

「お母さんの姿にいつまでも幻想を重ねていたかったから……っ」

「ちがいますっ！」

葉子の力が不安定になった。空中に固定されていた水晶玉が歪む。力が大きければ大きいほど、わずかな歪みが致命的な影響を及ぼす。

その力は二人の意識の枠を破壊し、同時に食堂の中で大きな音をたてて、爆発した。

真っ白な世界。郁未はその白を眺めながら考えていた。

『青一色に彩られた晴れの日もいいけど、雲のかかった晴れの日も好き』
誰の言葉だったのだろう。
『お母さんね、草原に落ちる雲の影が流れるのを眺めているのが好き。郁未、あなたと一緒にね』
その言葉と一緒に、郁未は自分の本当の目的を思い出した。

気が付くと、体が全く動かなかった。おまけに体の節々がひどく痛い。
眼を開くと、天井にいくつもひびが入っているのに気が付いた。どうやら仰向けに寝転がっているらしい。
「葉子さん?」
「はい」
すぐ側から返事がある。どうやら葉子もまた郁未と同じく床に転がっているらしい。
「ありがとう。途中で力を解放してくれたでしょ?」
「……手元が狂っただけです」
「どっちにしても神のご意志は果たせなかった訳ね。もう一度やる?」
葉子は少し黙った。

「それがいいよ。そう言えば葉子さん、戻るの？　外の世界に」

「いいえ、もう疲れました」

「それもいいかもしれませんね」

「消費税、五%に上がったから気をつけてね」

「消費税って何ですか？」

郁未は苦笑しながら何とか体を起こした。葉子も上体を起こし、郁未の方を見た。

「知らない間にずいぶんと変わったんでしょうね」

「うん、良くもなったし悪くもなった。でも、ここにいるよりは退屈しないと思う」

葉子はためらうような表情を浮かべた。

「私に、取り戻せるのでしょうか。失った時間を」

「葉子さん、まだ22でしょ？　全然大丈夫だよ」

「23です。今日が誕生日だから」

「そっか……だったら、お誕生日おめでとう」

別れ際、葉子は今まで決して浮かべたことのない晴れやかな笑みを浮かべ、振り返った。

「まだ、ちゃんと自己紹介していませんでしたね。私の名前は鹿沼葉子です。よろしくお

願いします」
葉子の止まっていた時間は動き出したのだ。
郁未もまた、明日に向かって歩き出す為に必要なことをしよう。

たったひとりになった郁未は、もう一度MINMESに戻った。
もう施設内もすっかり静まり返っている。
前よりは馴れた手順で機械を稼動させた。

蝉の鳴く声が響く。天気のいい夏の日。
ちいさなおくるみに包まれた赤ちゃんを抱いているお母さんがいた。
「ほら、このあたりは緑が多いから空気がきれいでしょ。お母さんの大好きな場所なの」
もう、無邪気な昔の思い出の中の自分じゃない。
私は私で、自分なりに時を過ごして、自分自身を作ってきたんだから。
「ここ、座っていいですか」
「ええ、どうぞ」
今の私はお母さんよりも背が高い。お母さんも私が誰かなんて解らない。

「可愛い、赤ちゃんですね」
「ええ、女の子なんですよ」
お母さんは幸せそうに微笑んでくれる。
「あの、名前は……？」
「いくみ、っていいます」
「とても、いい名前ですね……。多分いくみちゃんも大きくなったらその名前、凄く気に入ると思います」
「だといいんだけど」
お母さんがふと、昔のことを思い出すように首を傾げる。
「この子はね、大切に育てようと思うんです。私が愛情に恵まれなかった分、この子には母親としての愛情を充分与えてやりたい」
お母さん。
「だけど、いつまでも甘えてばかりじゃ駄目。大きくなったらひとりで生きていけるような強さを持ってほしい。でも、できるかしらね……この子に」
「きっとできますよ」
だって、私はこれからそんな自分になる為に、未来に向かって歩き出すんだから。

お母さんの姿が薄れ始める。
さようなら、おかあさん。
私は、大丈夫だから。

郁未は部屋の隅に置かれたうさぎのぬいぐるみを見つけ、胸に抱いた。
少年の思い出にすがる訳ではない。でも、思い出せない記憶の中に少年がいたことの印に、体内に宿った彼からもらった希望の記念に、これを持って行こう。
郁未は電源を落とし、ドアを開けた。
「わっ、郁未さん！　こんなところにいたんですかっ。もう避難したかと思ってましたよ」
「由依!?」
誰もいない廊下を、由依が駆け寄ってきた。後ろからまだ少し辛そうな表情の晴香がついてくる。しかし晴香も郁未を見ると、かすかに微笑んでくれた。
「それにしても、どうしたの？」
由依から話を聞きながら、三人は外へと向かう。郁未は自分が見ていないＦＡＲＧＯで起こったことについて驚いたり、成長した由依のことを頼もしく思ったりした。
晴香が記憶を失っていることを聞いた時には痛ましい思いを禁じ得なかったが、それで

も晴香の笑みにはわずかだが力を感じたので、郁未は心配しなかった。いつかきっと乗り越えていける。そう信じていた。

「郁未さんの方はどうだったんですか？」

「私の方も、いろいろあったんだ……」

郁未は笑った。

そして、開けっ放しになっているドアをくぐり、真っ青な空を仰いだ。

こうして、郁未達は非日常から日常の世界へと戻ってきたのだった。

了

あとがき

こんばんは。
お元気ですか、館山緑です。
この作品はＷｉｎｄｏｗｓ95専用ゲーム「ＭＯＯＮ.」のノベライズです。原作にかなり忠実な形での物語をお送りすることになりました。
一癖も二癖もある、心にずしんとくるシナリオと、不思議な印象のゲームミュージックでかなり変わった世界を作っている「ＭＯＯＮ.」ですが、ワタシがこのゲームを手に取ったのは、パソコンゲーム雑誌の記事を見て、「これはやるしかないっ！」と近所のパソコンゲームも置いてある家電屋さんで入手したのがきっかけです。
それまでコンシューマゲームしかプレイしたことのなかったワタシを、一気にパソゲーに向かわせた、破壊的なソフトでした。
縁あってそのゲームのお仕事をいただいた時、ワタシが狂喜乱舞したのは言うまでもありません。来月も「ＭＯＯＮ.」を作ったタクティクスさんの、これもまたがんがん泣かせる「ＯＮＥ」を書かせていただけることになりましたので、タクティクスのゲームを愛するみ

なさま、よろしかったらまた来月本屋まで見に来てやって下さると嬉しいです。
「MOON.」を書き終わってからも、郁未達が今どうしているのだろう、と想像してみることがあります。彼女達は、そして死んでしまった人達もまた、大きな存在感を持ってワタシの中に残っています。（個人的に一番気になっている巳間良祐がFARGOにやって来た当初の物語、というのを書いてみたいなあ、と思います）
郁未達はきっと幸せにやっていることでしょう。
肝心のワタシの方は無謀にも大作に挑んで、半ば実力不足のせいで玉砕、という気がしなくもないのですが、この作品と関わっていけたことが、すごく嬉しいです。
死にそうに大変でしたが、とても楽しかったです。

ワタシは怖い話なら、古典ホラーからサイコ系、怪談に至るまで全部好きです。知識はあまりないのですが、いわゆる「愛だけなら誰にも負けないわっ」というやつですね。（怖がりたいタイプなので、スプラッタギャグはいまいちなのですが）
「MOON.」を手に取ったのも、そちら系なのかな、という期待もありました。
でも、この「MOON.」は、めちゃくちゃいい意味でそれを裏切っているゲームでもあ

ります。傷付いた女の子達が自分の道を修羅の中から見つけてゆく話です。
わ、こんなどんでん返しがありかっ、とのたうち回る、よく切れるメスのごときトリックもあります。向き不向きはかなりあるでしょうが、ぜひプレイしてみて下さい。
それでは、よろしければ次回「ONE～輝く季節へ～」でお逢いしましょう。
お元気で。

館山　緑

闇夜未明　七月

小説 MOON.

1998年7月31日　初版発行

原　作　Tactics
著　者　館山　緑
発行者　髙橋　豊
発行所　株式会社ムービック
〒173-8558 東京都板橋区弥生町77-3
Tel. 03-3972-1992
装　丁　柏木秀博
黒木三郎（デザインワーク）

発行／株式会社ムービック

MOON.

9784896013870

1920293008578

ISBN4-89601-387-5

C0293 ¥857E

定価／本体価格857円+税

発行／株式会社ムービック

8320 0331-MO01

MOON.